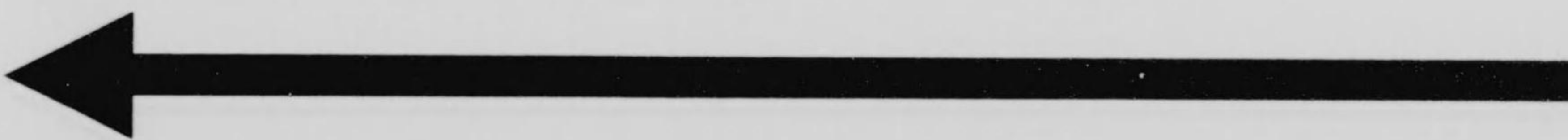


5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



362
22



362-122



刷 廉

法學博士福田德三著

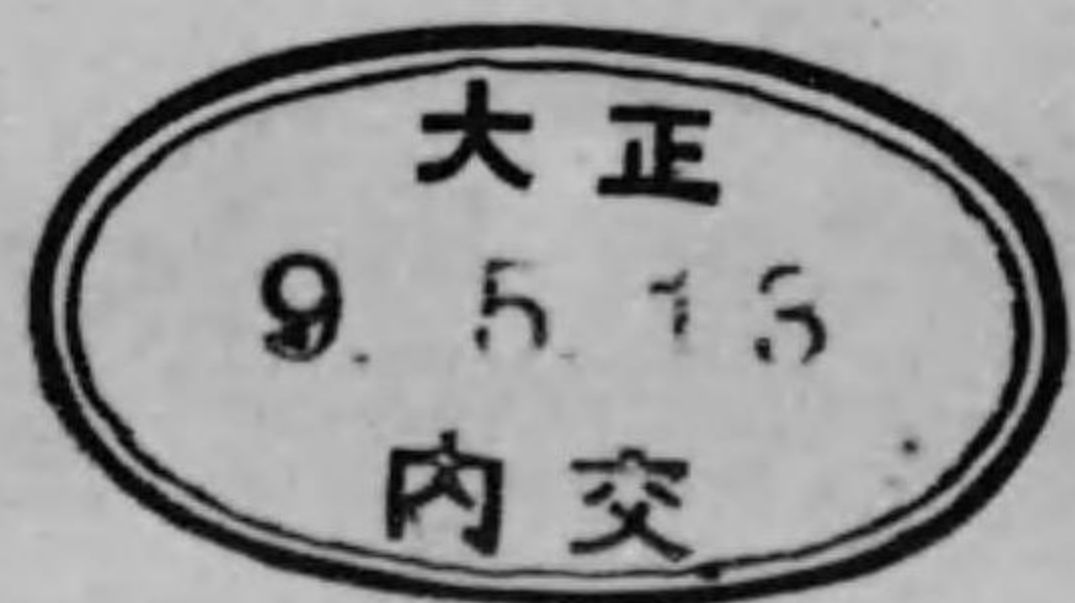
黎明錄

東京 佐藤出版部藏版

東京

株式會社

大鐙閣印行



廉刷黎明録印行の辞

黎明録は、佐藤出版部の蔵版にかゝり、用紙、装幀善美を盡したるものにして、之に比すれば既刷の価格は決して不廉なりと云ふ可からず。今日に至る迄版を重ねる前後八回に及びしも偶然にあらず。然れども弊閣は、民衆の讀本として絶好の書たる本書の、更らに廣き讀書界に普及するに至らんことを熱望して已まざるが故に、用紙、製本を質素簡便にしたる廉刷版を作らんことを企て、之を著者に諮りたるに、快諾を與へらるゝのみならず、廉刷に對する一切の印税を免除す可きが故に、出來得る限り、價格を低廉ならしむ可きとを命ぜられ、更らに佐藤出版部の承諾を得る勞をも執られたり。佐藤氏は熱心に廉刷の舉を賛成せられ、其進行に就て種々同情深き援助を與へられ、同部員大野隆氏は、最新版原本の全

部に亘つて、誤植訂正の勞を執られ、内容に於ては、却つて原本に勝るものを茲に刷出することを得たり。唯だ一般讀者に取りて用多からずと信ぜらるゝ附録英傳文論説は全部之を割愛し、代ふるに、原本第七版以後に添附せられたる人名索引、術語索引を以てしたり。斯くして本廉刷に於て、あらゆる點に於て最も洗練せられたる形態に於ける黎明録を、目下の事情の許す限りの最低價を以て提供することを得たるは、弊閣の無上の光榮として感謝して措かざる所なり。茲に謹告して廉刷の辭と爲すと云爾。

大正九年三月

大鏡閣に於て

面 家 莊 信

謹 識

序

英國と獨逸との經濟的比較を發端として、今次大戦争の進行に連れて起つて來た世界と日本との諸々の問題に就て、其時々に表示した論文や談話や講演を纏めたのが、此の黎明録である。第三篇(一)文は、末節を除く外は、未刊のものあり。元來一讀書生に過ぎない著者が、分を量らず當面現實の問題に就て議論をすると云ふのは、間違つたことであるかも知れない。少くとも其の爲めに専門の勉強を等閑にすることを免れない、決して好んで爲す可きことではない。併し著者が過ぐる五年間自ら好んで此事に従事したのは、多少勉強を怠つても、自分としてまことに爲す可きこと

であると信じたからである。けれども、其は自分だけで信ずること、他人から見たら、馬鹿な事をして居るものだと考へられるかも知れぬ。自分は、社會の爲めに多少役に立つと思つて居ても、社會は却つて之を迷惑とするかも知れない。

兎に角世界大戦は最早終を告げた。向後も黎明會の同人と思想上に於ける黎明運動に従事することは、決して無用ではあるまいと思ふが、其以外には大戦終末を期として、過去一兩年多少怠つた専門の研究に主力を注ぎたいと覺悟して居る。此黎明録は云はゞ一の備忘録でもあり、又た懺悔録でもある。

従つて本書に收むる諸章は一々校訂は加へたが、其は字句だけに限

つて、内容には少しも修正を加へない。時代後れの議論や、誤つた引證や、殊に悉く外れた推測やは皆發表した當時の儘にして置いた。イクラ修飾したとて、一度犯した罪過を輕減することは出来ない。遼東の豕は毛を染め直しても矢張遼東の豕である。有りの儘に収録して識者の叱正を受けたいのである。但し其時々事情と對照して頂きたいから、各篇中の諸文は、出来るだけ發表した時期の順序を追つて、古いものから新らしいものに及ぶようにした。而して各文の初めに、發表した場所と、其時日とを掲げて、參考の便を圖つて置いた。各章は、凡そ内容に共通點あるものを纏めて一篇として、其主題を示めず爲め篇名を附けて置いた。我邦で刊行する英佛語の新聞雜誌に見えた拙文の

紹介、批評、翻譯の中數種を集めて附録として置いた。

本書の原稿は本年三月の春休みに纏めたものであるから、其以後公けにしたものは載せてない。其等は何かの機會に追加したいと思つて居る。猶餘事ではあるが、本書の校訂を終つた日から、拙著「國民經濟講話」續卷の印刷を始めたから、遠からず出版が出来よう。學問上から言ひ度いことは此講話中に少しく述べて置いたから、多少參考となることもあらうと思つて、茲に申添へて置く。

大正八年六月二十四日 講和條約の調印を目の前に控へつゝ

福田 德三

謹識

黎明錄 目次

第一篇 世界の平和望み遠し (改造途上の世界) 一―三七五

- 一 英獨國民經濟の比較……………三―二二
- 二 第十九世紀の總勘定……………二二―四二
- 三 來るべき世界と其の文明……………四二―六四
- 四 ロムバード・ストリート本位の戰時經濟論を笑ふ……………六五―七六
- 五 愚なる經濟戰論……………七七―八八
- 六 英國的經濟思想の末路……………八九―一〇二
- 七 戰後の世界と姉崎博士……………一〇三―一〇九
- 八 ホッブスとグロシーアスとを論じて姉崎博士の空想的世界觀を排す……………一〇九―一六七

九 大戦が暴露せる獨逸の弱點……………一六八—二〇〇

附録一 金と人に困る……………二〇一—二〇二

同 二 講和と獨逸社會黨……………二〇二—二〇四

同 三 眞鍮の獨逸……………二〇四—二〇五

同 四 獨逸日本を恐る……………二〇五—二〇七

同 五 空ン洞の獨逸……………二〇七—二〇九

同 六 獨逸の月賦革命……………二〇九—二一〇

同 七 獨逸帝國未來記……………二一〇—二一一

一〇 勝者は誰か……………二一一—二五八

一一 新世界の文明に於ける佛蘭西の使命……………二五八—二七八

一二 資本的帝國主義を排す……………二七八—三〇七

一三 世界經濟戰の認想を排す……………三〇八—三二一

一四 資本的侵略主義の危険……………三二一—三三八

一五 拜英論も亦た甚しからずや……………三三八—三四五

一六 世界の平和望み遠し……………三四六—三七五

第二篇 對抗か順應か (世界に於ける日本)

三七七—五〇三

一 聯合國經濟協定の實何くに在る……………三七九—三九八

二 愚に重ぬるに愚……………三九九—四〇四

三 歐洲出兵論を排す……………四〇五—四一三

四 ウキアルソンの教書と日本の國是……………四一四—四三三

五 何の爲めに戦ふ……………四三三—四五七

六 自主的出兵よりも自主的平和……………四五七—四八三

七 對抗か順應か……………四八三—五〇三

第三篇 改造途上の世界經濟 (戦時及戦後の經濟問題)

五〇五—七八一

一 英國中心の世界經濟と其改造……………五〇七—六九四

二 金の経済と物の経済……………六九五―七二〇

三 戦時経済の一福音……………七一―七一九

四 戦後の経済界に於て眞に恐る可き事は何……………七一九―七三五

五 意氣地なき戦後経済論を排す……………七三五―七四七

六 戦後世界経済當面の大問題……………七四七―七八一

第四篇 國本は動かさず (黎明日本の諸問題)

七八三―一〇六二

一 新社會とは何ぞや……………七八五―七九六

二 二大政綱對立論を非とす……………七九七―八一〇

三 新しい意味のデモクラシー……………八一―八二八

附録一 寺内内閣の社會的施設を評す……………八一―八二二

附録二 速かに物價調査會を起せ……………八二三―八二八

附録三 奸商取締の手を護むること勿れ……………八二八―八三五

同 四 極窮權の實行……………八三五―八三八

同 五 國民生活に觸れざる政變は無意味……………八三八―八五三

同 六 原内閣に要望す……………八五三―八六五

四 日本に社會主義起る可きや……………八六六―八八二

五 何を調節する……………八八三―九二九

六 社會政策とは何ぞや……………九二九―九六六

七 黎明運動論……………九六七―一〇一五

八 國本は動かさず……………一〇一六―一〇六二

人名索引……………一一六

件名索引……………七一―一五

黎明 録 目次 終

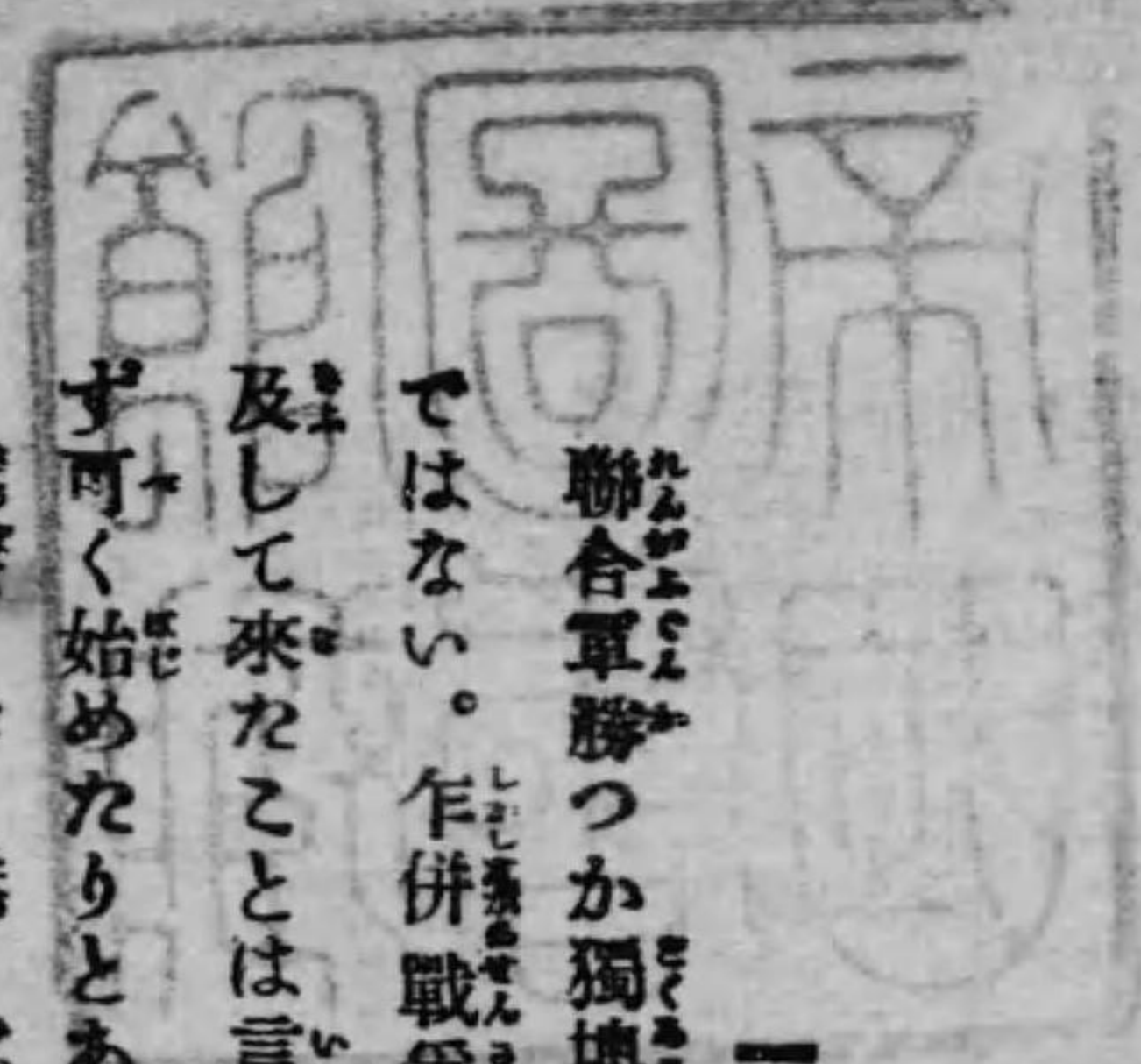
第一篇 世界の平和望み遠し

|| 改造途上の世界 ||

- 一 英獨國民經濟の比較
 - 二 第十九世紀の總勘定
 - 三 來る可き世界と其の文明
 - 四 ロムバード・ストリート本位の戰時經濟論を笑ふ
 - 五 愚なる經濟戰論
 - 六 英國的經濟思想の末路
 - 七 戰後の世界と姉崎博士
 - 八 ホツプスとグロリアシアスとを論じて姉崎博士の空想的世界觀を排す
 - 九 大戰が暴露せる獨逸の弱點
 - 附錄一 人と金に困る
 - 同 二 講和と獨逸社會黨
-
- 同 三 眞劍の獨逸
 - 同 四 獨逸日本を恐る
 - 同 五 空洞の獨逸
 - 同 六 獨逸の月賦革命
 - 同 七 獨逸帝國未來記
 - 一〇 勝者は誰か
 - 一一 新世界の文明に於ける佛蘭西の使命
 - 一二 資本的帝國主義を排す
 - 一三 世界經濟戰の謬想を排す
 - 一四 資本的侵略主義の危險
 - 一五 拜英論も亦た甚しからずや
 - 一六 世界の平和望み遠し

一 英獨國民經濟の比較

— 大正四年三月十五日執筆同年四月「新日本」掲載 —



聯合軍勝つか獨逸軍勝つか一向見當の就かぬ今日、妄りに將來の事を揣摩臆測す可きではない。乍併戰争の永引くに就けて問題は段々軍事方面のみでなく、經濟方面にも波及して來たことは言ふまでもない。現に最近の諸新聞紙に依れば獨逸は漸次食料難を感ず可く始めたりとある。たとへ軍事上に成效するも、食料を始め各種の經濟的關係に於て窮迫し來る時は必勝を望むことは出來ない。是は我邦に於ける識者の皆認むる所であつて、而して一般の感想はと云へば獨逸は其兵戰に於て如何にも成效しつゝあるが如くに於て、或は軍事上勝を占むるに至るやも知れざれども、結局經濟上の持久力を失ひ其方面から負けるに至るであらうと云ふにあるが如くである。乍併、學問的研究の立場よ

り云へば唯一般の感想若くは願望を事實として取扱ふことは甚だ危険である。據る可き的確な材料ありて之を立證するに非ざる限り、獨逸が食料に必迫す可しとか、經濟上に於て大敗を招く可しとか輕々しく論斷することは許されない、然るに聯合軍側殊に英國に於ては可成材料の得られつゝあるに拘らず、獨逸側に就ては其經濟上の状態を判斷す可き材料は甚だ闕如たるものである。尊敬する同學諸先輩中歐洲戰時經濟論を發表せられたもの二三にして止まらずして該博精密皆何れも時務に益あるものではあるが、其所謂歐洲とは單に英國に限られたるの觀ありて、佛國に就てさへ具體的事實、確實なる材料に就て説明せられて居らぬ。況んや露國をや、況んや敵側たる獨逸に就てをや。唯だ英國の新聞雜誌に顯はれた傾向の記事、島國的速斷を根據として英國の財政は堅實也、獨逸の財政は危殆に瀕せりと云ふ底の抽象論を試みて居ては將來を測るに於て甚だ危険なる結果を産み出す虞ありと思ふ。英國人如何に公德發達せしめて敵側の事に就て公平無私なる報道を爲すとは信ぜられぬ、否「デフエンス・オブ・ゼ・レルム・アクト」あ

り、新聞檢閲ありて極端に言論の自由を束縛しつゝあるではないか。心ある英國人は斯の如き政府の干渉に對して甚しく不平を抱いて居ることは、英國の新聞雜誌しか讀まなくとも十分に看取し得られるのである。戰爭終つて後數年歐洲諸國を領せる暗雲の散じたる曉、公平無私なる研究者があらゆる材料を蒐集して研究し之を今日行はるゝ歐洲經濟状態の記述と比較したならば或は抱腹絶倒な事柄が續々として見出されるかも知れない。此くの如くんば學問の權威は地に墮ち、學者の妄斷は一世の物笑と化するであらう、大に戒心を要する所である。故に嚴密に學問的立場を維持せんと欲せば、材料の乏しき我邦に在りて歐洲現時の經濟比較論を爲すことは全然之を見合はす可きである。乍去、此くは餘りに學究的となりて寸毫も時務に貢獻する處なき譯であるから、左様な極端な要心は問題外として、扱出来る丈け事實に近く出来る丈け公平無私に英國經濟對抗の前途を考へて見る事は必ずしも無用であるまい。

茲に前途と云つたとして遠き將來の事を豫測する意味ではない、其れは到底出来ない事

であり又た學問上許されないことである。唯此戦争が近き將來に於て終了するものと假定し、扱て其曉に於て英國と獨逸と經濟上の優劣に於て如何の狀態を呈す可きかと、過去と現在の狀態から推察して見るに過ぎない。

二

先づ過去に就て考へて見る。戦争開始の時に至る迄英國の一般の經濟上の比較は今更事新しく述ぶる迄もない事であるが、兩國の依つて立つ財政上、經濟上の根柢如何と見るに、財政上に於ては獨逸は極めて不健全なる根柢の上に立ち、之に反し、英國は健全なる根柢の上に立つて居ることは誰人も否定する事は出来ない。又國の經濟政策の大方針に就て考ふるも同様である。従つて國民經濟の全體に就て獨逸の立場は英國の其れに比して、著しく薄弱であることは否む可からざる事實である。併し乍ら此優劣を以て兩國の國民性に基くものと見るは誤謬であると共に、其が永久的性質を具備するものと考ふるも亦速断である。否今より滿一世紀前の英國の財政經濟狀態は恰も現下の獨逸

の其と殆ど選ぶ所なき程度に於てあつたのである。恰度英國なる世界第一の富強國に對して成上り者たる獨逸が世界の覇を争ふが如く、今より百年前に於ては英國が今日の獨逸地位に在たので、今日の英國に當る者は其當時は和蘭と佛國とであつたのである。英國は此二大強國に對して歐洲の覇を争ふ可く國の運命を賭して戦かつたのである。而して其財政上經濟上の有様から見るに如何にも百年後の今日の獨逸に似て居るのである。即ち佛國に對して開戦した英國に於ては兌換券の兌換を停止し國債の額は驚く可き巨額に達し租税の負擔は甚だ重く國民塗炭の苦を嘗めつゝあつたのである。今日聯合軍側殊に英國が獨逸に向つて責めつゝある所の事の多くは當時の英國が責められつゝあつた所である。而して英國は幸にも此の大戦争に勝つた、勝つて而して今日の英國たるを得たのである。今より恰度百年昔の千八百十五年は實に英國に取つて此大勝利大富強の始まつた年である。恰も百年の後獨逸なる成り上り者が出て來て英國が嘗て和蘭と佛國より奪取した覇權を更に奪ひ去らんとするに至つた。誠に運命に拘へる繩の如しと云ふ可

きである。扱て英國は大戦争に勝ち勝つたが其財政上經濟上の状態は實に慘憺たるものであつた。其等の事實は今茲に管々しく述べ共誰も熟知して居る所である。獨逸の此の度の戦後經驗す可き所は、英國に於てチャント前例があり御手本が備はつて居るのである。

然るに英國は爾後百年の間に此の難關を巧みに切り抜けて遂に今日の如き健全なる財政富める經濟を築き上げるに至つた。されば獨逸と雖も又此英國の前例に倣つて行けば、必ずしも其經濟に於て全然敗者たるの運命を荷て居るとは限らないのである。問題は茲にある。獨逸の戦後(若くは戦時中の)財政状態に於て、百年前の英國の其れと異りて特に危險を包藏する點はないか、其がありとすれば戦後に於て克く一世紀以前の英國の如く巧みに切り抜けること或は望み難きこととなりはせぬか、是れ吾輩が茲に考を加へんと欲する所である。

三

百年前の英國の財政と國民經濟と今日の獨逸の其れ等とを比較する者は容易に彼になくして此に在る一の特種な點を發見するであらう。吾輩は此の一の特種な點を以て英國の彼時になくして獨逸の今日にのみ存する危險と認むるものである。其は何を指して云ふか、曰く獨逸の二重財政此れである。獨逸の國民は各聯邦政府の財政を負擔すると共に帝國の財政をも負擔する、然るに國の財政の重點たる可き直接税は帝國の成立前既に各聯邦に於て其々之れを賦課して居たから新たに出來た帝國は其財政の重點を直接税の上に置くことが出來なかつた。茲に於て二つの結果が生ずる、一つは帝國は主として間接税を以て其財政を維持して行かねばならぬ、此は非常な弱點であると共に更により大なる危險を包藏する、何ぞや、曰く關稅の重課及び之を粧ふ爲めに保護政策を捨て得ぬ事である。國家の支出如何に増大するも之を國民の負擔力と一致せしむるを得ぬ、常に細民の方に重き負擔となる間接消費税に重點を置かねばならぬ、其爲め他方に如何に社會政策を行ふとも、根柢に於て細民を苦しむること愈々重加するを免れぬ。ビス

ワークは此缺點を夙に看取したから、鐵道國有と煙草の專賣とを帝國の手に於て行ひ、財政上の基礎を鞏固ならしめ様と企てたが兩案共に破れた結果、心ならずも關稅政策に重きを置くことゝなつた。是れ彼が自由貿易主義を俄然として捨て、保護政策主義を取るに至つた一つの動機である。聯邦の利益を尊重する以上其財源たる直接税に手を附けることは出来ぬ、さりとて帝國の歲計は年々膨脹する計り、殊に海軍は陸軍と違ひ帝國のものであるから其大擴張は彌が上にも帝國をして財源に苦ましめる外はない。畢竟一方に英國と覇を争ふと云ふ極めて近世的の大野心を包藏しつゝ、他方封建政治の遺つたる聯邦政體を捨てること能はざるより來る事柄で、如何な大政治家と雖も此の二重財政の存する限りは健全なる財政を立てる事は六ヶしいのである。何となれば直接税を財源とするを得ず、間接税のみに仰ぐ以上、左様々々増税計りでやり切れるものでない。於茲乎、國債の額は非常な勢を以て増進するのである。國債の多いこと其事既に大難事であるが之が何時か整理せられ得る見込があるなれば暫時の忍耐も出来るが、獨逸の二

重財政の下に於ては其整理の見込は逆も立たぬ、如此して歲計は膨脹する一方のみで中々以つて緊縮の望はない。是れ實に百年前の英國に見ざる所、均しく財政難に陥りつゝ、英國は終に之を脱するの力があつたが、獨逸に就ては果して如何あらうか見物である。英國が過去百年間に漸次其財政を整理し今日の如き健全の状態に達し得たは其政治家に卓越なる人があつた爲めには相違ないが、若し獨逸の今日の如き事情なりせば果して之を切抜け得たりしか否か俄かに判断し難いのである。第十九世紀に於ける英國財政改革の大勢は一言を以て云へば、財政の重點を國民の負擔力と平行せしめたと云ふ一點に歸着する。換言すれば、財産階級に重く、勞働階級には軽く課税する様にした事である。其れには主たる財源を直接税と生産力を減退せしむる虞なき間接税とに求めたのである。現に此度の大戦に會しても能ふ限り所得税率の引上げ茶の關稅の引上げ等に財源を仰いで居るではないか。是は極めて堅實なる増税方法と云はざるを得ぬ。然るに獨逸に於ては逆も右の如き事は出来ぬ、増税は之を間接税而も國民の生計必需品に課する税、

國民の生産力を殺ぐ底の税に就て爲す外はない、直接税に依る道は殆んどない。而して他方に國の借金は増す計りである、保護政策なる看板の下に實は國民の衣食を奪ふ底の増税を爲しつゝあるのである、是れ實に恐る可き弱點である。

獨逸が我日本の如く思ひ切つて封建制度を廢し能はざることが禍源であつて、之が改まらない限り右の弱點は伴ふものと覺悟せねばならぬ。我々は維新の先輩に向つて實に深く感謝せねばならぬのである。藩閥は如何にも迷惑だが若し藩閥等で止まらないうで、獨逸の如き聯邦制度を少しでも存して居られたら實以て迷惑千萬で獨逸の事を考ふる毎に吾々は日本人と生れ、明治大正の間に人となつた幸運を心から謝せねばならぬ譯である。

四

過去の話は右に止めてさて現在の事に就て少しく考へて見よう。英國は極めて健全なる直接税財政と自由貿易主義國民經濟とを以て獨逸は不健全薄弱なる二重財政と極端なる保護主義の下に保育せられた國民經濟とを以て何れも此度の世界戦争を開始した。即

ち立ち上りに於て、既に英國は經濟上に於て勝味を有し、獨逸は負味を持つて居る譯で、獨逸財政家の苦心は實に察するに餘ある。乍併此點から直ちに演繹して獨逸は早く經濟上に於て疲弊するものと斷言するは早計に失する。何となれば、過去に於て如何にあり又た根柢の状態に於て何とあらう共戦時の事は自ら特別である。殊に未だ交戦後一年も経過せぬ今日に於ては尙更である、三年も五年も繼續すれば根本の病弊は自ら表面に作用を顯はし來るは免れないことと思ふが、一年や二年で直ちに左様なるものと思ふことは出來ぬ。此點は吾輩の前段の叙述と混同せられざらんことを切望せざるを得ぬのである。戦時經濟は平時經濟とは全く異なる状態の下に立つので、開戦早々柏林に於て有名なゾムバルト教授が大演説を試みて、吾邦は今日より自足經濟に入るものと覺悟せねばならぬと絶叫したさうであるが、如何にも其通りと思ふ。財政金融機關の作用は戦時に於ては停止して一切の經濟生活が國家を中心として營するゝことになる。處が國家中心官僚萬能の經濟組織に於ては獨逸には多年の素養がある、少く共英國に比して一日の

長を有して居る。見よ英國に於ける戦時財政經濟の諸施設は悉く是れ獨逸的官僚的たることを、或英國の學者は之を非難して Worst form of bureaucratic socialism (官僚社會主義の最悪の形態) と名づけて居るが之は誇張の言ではない。やれ砂糖の官營專賣の、敵國會社等に對する支拂の差押へだの、外國投資の制限だの、デフエンス、オブ、ゼ、レルム、アクトだの、新聞紙の檢閲だのと、自由主義の本来本山たる英國としては實に驚く可き程の官僚的壓迫が行はれて居るではないか。故に心ある者は「マグナ、カルタ」今那邊にか在ると憤慨して居る。我邦では日英同盟の義に倚る譯だか如何か英國の事とさへ云へば必ず讚めなければならぬものと看做され英人よりも更らにより多く英國最負な説が行はれるが、如何に最負目を以て見ても此頃の英國の政治計りは讚美し兼ねるのである。乍併、これは不得止必要に迫られてやつて居るので即ち平時經濟と戦時經濟とは事體全く異なる所以を明白に説明するものと思ふ。即ち今や英國は全く獨逸の弟子となつたかの如き觀を呈する。基督曰く「弟子は其師に勝ると能はず」と。獨逸の弟子たる英國は

其官僚的施設に於て終に師匠たる獨逸以上に出づるとは出来ぬ。砂糖專賣の失敗に終つたのは明かに之を證して居るではないか。デフエンス、オブ、ゼ、レルム、アクトの運用も恐らく同様の結果を見るであらう。Control of capital issues の如きは全然無効に歸しはせぬかと懸念せらるゝ。論者英國の Emergency measures の巧妙なるを高調する者ありと雖も、他方に幾多の失敗あるとは一向言はないのである。獨逸と英國との現在のみに就て比較して英國の財政は健全なり、獨逸の其は危殆に瀕す等と云ふが、能く裏の裏を考察してから斷定しなくては學者の論として認むることは出来ぬのである。四面敵を受けて奮戦しつゝある獨逸と、今日未だ國力の半をも傾注せず若干の陸兵を而も餘り成績の擧らない弱陸軍を大陸に派して居る英國とを等分に比較する等は間違ひ切つた話である。又た食料の供給に關しても極めて皮相的な表面的な統計のみを基として立論するは迂闊に失するものと思ふ。吾輩は確實な材料を有せぬ今日、獨逸や英國の食料供給の狀態を輕々に論ずる勇氣を有たぬものである。唯だ向後の事實の發展を待つ外はない。唯

此問題に就ても平時經濟の眼を以て戰時經濟を觀察するの不可なるを注意して置たい。官僚的に絶大な政權を以つてして爲し能ふ限りに於ては獨逸は大なる力を有して居る、英國は其眞似は出來ない。而して戰爭が餘り永引かざる限り此種の官權的非常手段は甚だ有效のものたることは、官權集中大嫌の吾々と雖も認めざるを得ぬ。吾々は官權萬能の獨逸を憎まざるを得ずと雖も、而も戰爭と云ふ非常特別の時に際して其が有力のものたるを否定する程「バイアス」を持つてはならぬ。

五

終りに簡単に兩國經濟上の前途に就て一言して擱筆しよう。先づ食料の事に就て近着のエコノミスト所載の記事によるに（悉く信憑す可きか否か判断し兼ねるが）英國に於ては毎年の平準七月相場に對する開戦以來の食料品の騰貴の割合は指數に顯はして、

	千九百十四年			千九百十五年		
	九月	十月	十一月	十二月	一月	
大都會會	一一	一三	一三	一七	一九	
小都會會	九	一一	一二	一五	一一	

であつて本年一月の相場と去年七月の相場とを比較するに百分率にて

	麥粉	パン	魚類	砂糖	鶏卵
大都會會	一八	一八	五一	六九	六二
小都會會	二三	一四	三一	六五	六五

だと云ふ（是は確實な統計と認めて宜しい）。之に對して柏林に於ては七月相場に對し十月は一六・四パーセント、十一月は二〇・九パーセントの騰貴を示して居ると云ふ（本年一月二十三日のエコノミスト）。果して然りとすれば十一月の頃までは柏林は英國に比して著しき騰貴を示して居らぬ（現三月には如何であるか分らぬが）。乍去最近の新聞によると獨逸政府は穀物の徵收を行ひ、又穀物拂下量を減じた云々の記事があるから或は著しき變化を來した次第かも知れぬ。乍併、右の徵收と云ひ又は減食令と云ふは要す

るに官權主義の發動である、愈々食料缺乏する迄官權的な獨逸が拱手して見て居る譯はない、従て右の如き思ひ切つた手段を取つたからとて直ちに食料缺乏の兆候と斷定するは早過ぎる、官權主義は左様にユツクリしたものではない、事前にドシ／＼權力を行使するものと見る方が穩當である。英國でさへ交戦勿々砂糖の專賣を行つたではないか。さてかく官權の發動に於て英獨共々其經濟戰（War on German trade）と英人は云ふ）を繼續するときは如何なる結果を生ず可きかと云ふに、英國の名士某の嗟嘆すらく、吾英國にして官僚主義を行ふこと此くの如く極端なれば、終に官僚主義の株を獨逸より奪ひ、獨逸は戰後に於て英國の舊時の自由主義を取る可く始むる間に、吾國は却て曩の獨逸の轍を履むものとなるであらうと。吾輩も同様に感ずる。英國にして獨逸の弟子入をすること今の如く、而して戰爭の永引くにつけ益々其官僚主義に深入する時は戰爭過ぎて後或は之より脱却するに困難を感じ、他方獨逸は戰爭に負くるも其爲めに發奮して却て二重財政（聯邦を廢するか否か其は分らぬ）の根本的禍源を除いて舊時の英國流の健全なる

經濟政策に歸依するに至ることあらんか、兩國經濟對抗の前途は兵戰の結果如何に拘らず獨逸の勝に歸するに至る可く、反對に獨逸が兵戰に勝つとして其成功に眩惑して益々官僚的保護主義に深入りして根本的病弊を除くことを爲さざれば、戰爭には勝つとも到底十九世紀後半に於ける英國の眞似をすることは出来ない。故に此點より見れば却て獨逸は兵戰に負けた方が國民の利益となるかも知計られない。要は戰時經濟より平時經濟に移り行く時に於ける兩國の遣り方如何にある。戰時經濟丈に就て云へば獨逸の方に強味がある、然し其が却つて平時經濟の禍源となる恐がある。英國は戰時經濟に於ては必ずしも世上信ぜらるゝ如く安心はなり難い、併し百年來養ひ來つた健全なる財政經濟政策を渝へざる限り、經濟上に於ける勝利を確實に得ることが出来ようと云ふとに歸着する。十九世紀初頭より始めて英國が此く健全なる發達を成し遂たのはピット、ピール、ハスキソン、グラッドストーン等大政治家輩出した爲めであるが而も彼等の財政政策の根本を築いたものはアダム・スミスである。スミスの學問研究上より來れる議論を先づび

ツトが金科玉條として之を實際の政治上に施しビール、ハスキソン、グラッドストーン等何れも其方針を一貫したのである。思へばアダム・スミスを有したりし英國は幸なる哉。獨逸にして今後獨逸のアダム・スミスを有し其學說を尊奉する政治家ビットの如きあらば其經濟上の前途は必ず見る可きものがあらう。之に反し、皇帝の御機嫌取りに世界經濟學だの「商業權力政策」だのを唱へる學者斗りである間は其前途は樂觀するを許さない。抑も亦我邦は曩の英國に倣はんとするか將た又今の獨逸に倣はんとするか、政治家學者共に深く三省す可き所である。

附記。本文を草し終りて後接手せる『エコノミスト』二月六日號によれば本年一月に入りて、英國に於ける物價は驚く可き騰貴を示し殊に食料品に於て異常なるが如し。『エコノミスト』は之を portentous rise, monstrous jump と呼べり。

今數字を以て示せば

一九〇一—五年 平均基數
一九一三 第一期
同 第二期

一〇〇
一一三・四
一一一・三

同 第三期
同 第四期
一九一四年

一一三・三
一一九・二

一九一五年
一月
十一月
十二月

一一九・〇
一一八・九
一一八・〇
一一七・五
一一八・〇
一一五・九
一一六・六
一一二・六
一二六・四
一二四・二
一二五・五
一二七・三
一三六・五

にして、基數に比し三割六分五厘、昨年比し約二割同十二月に對し一刻弱の騰貴なり。而して食料品は

穀物及肉類は基数五百に對し七百八十六、其他の食料品は基数三百に對し四百十三の指數を示せり。英國に於ける生活難は驚く可き勢を以て増進しつゝあるものと云ふ可し。

『モノリスト』曰く No one need wonder if an outcry should rise from hundreds of thousands of humble families (P. 219) と。又本文に指摘したる外國投資禁止令の無用に歸す可きことに就ては、同誌同號二百二十六頁に予が所論を確む可き一項あり、敢て英國財政政策論者の一考を促す。

二 第十九世紀の總勘定

—大正四年十月十日恩國大會講演全十一月十一日『第三帝國』掲載—

一 英國思想の中心たる重商主義

私は十九世紀は千八百十五年に始つたと言ふ、其故は、此年に於て、英國が世界の金力を一つ所へ集めて、新らしい時代を開いたからである。十六世紀より十七世紀十八

世紀の三百年に涉つて歐羅巴に於ける金力平均を自國に引付けて世界に重きを占め度いと努力した結果その目的を達することを得たのが此年からのことである。種々の事情より英國の平均は段々危境に陥つたのであるが英國は此の平均を失ふまいと努力した。第十九世紀に於ける政治、哲學、文藝、藝術等悉く此平均の思想が根本を成して居る。凡そ、計器は商賣をするに當つて必要缺くべからざるものである。物を賣るには物を計つて賣る、英吉利人は恰も茶を一斤賣るとか砂糖を二斤賣るとか、或は干した葡萄を三斤賣るといふが如くに世の中を觀察して人の精神を取扱ふのに皆商業的にやつて居つた。平均の中で中心となつて居つたものは所謂重商主義の思想で國を建て、行くにも商人が店を經營して行くやうに考へる、能く士魂商才といふことを云ふが重商主義に於ては、商魂商才であつて、國を經營するのに商人の魂商人の才を用ゐてやつて行くといふことが主義となつて居る。單に英國のみならず歐洲諸國は悉く重商主義に没頭するに至つたけれども、英國を除いてはすべて失敗に歸してしまつたのだ。最も極端に失敗し是

が爲に國を滅ぼすに至つたのは西班牙である。英吉利が今日世界の一等國になつたのは全く重商主義に成功したからである。處が十八世紀の終りにアダム・スミスといふ經濟學者が出て來て重商主義なるものは間違つて居ると非常に攻撃して、此の思想が跡を絶つたといふやうに書物には書いてある。併し、その實、決してそうでないのみならず更に一步を進めてモツと深い大なるものとなつたのである。

重商主義は誠に露骨なもので確かに英吉利は自分の國の利益を計つて居るナと直ぐ眼に見えるやうであつたがそれは拙い、對手が暴を以て來る時には此方も暴を以て向はなければならぬ、彼が禮を以て紳士的に來れば撲り倒すといふ事は出來ない、惡黨ながら紳士の禮義をチャンと守つて紳士的に來れば我も亦矢張り紳士の惡黨になる、例へば電車に乗つた時に印絆纏でも着て居ると此方も用心をして居るが、少し立派な服装をして居ると、ポケットの巾着を掴まれても氣が付かずに平氣で居る「人を見たら泥棒と思へ」とは此の事だ、即ち英吉利の十九世紀に於て完成したる國是とも稱すべきは斯く露

骨なる重商主義より一步進んだもので、從來の如き鎖國主義を排して新に自由主義、開國主義の利益なるを看破して是に移るに至つたのである。

二 佛國の自由平等同胞

恰も此時に於て佛蘭西の革命があつた、佛蘭西人は言葉を拵へることの非常に好きな又巧みな人間で、丁度日本に於て政黨者流の中に言葉を拵へるに上手な者が居て、「憲政擁護」とか「非政友」とか「藩閥打破」とか、或は「非募債主義」とか又は吾々が始終迷惑する「在外正貨」、又は「海軍補充費」などといふやうに言葉の拵へ方が非常に巧い、佛蘭西は日本人の師匠である、彼等は三つ宜いことを唱へた、即「同胞」「自由」「平等」言葉は實に立派だ、處が「自由」「平等」「同胞」の三つは矢張り算盤珠から彈き出して一番利益があるからやるので、從來のやうに外國人を見たら敵と思へといふやうなことではなく、何事も「自由」である、何事も「平等」である、世界皆「同胞」を見るが如しといふ主義を宣言すれば他人は安心する、安心させて而して後自分の利益を得る、英吉利人は之を言現

はして『正直は最上の商略なり』と言つて非常な格言のやうに考へて居る。日本でも能く翻譯をして『時は金なり』などと馬鹿なことを言つて居る、日本人なども大分英吉利を主として居る所の商人主義にかぶれて來た、此事は今度の戦争に就て考へたのでなくして、十數年前から始終私は主張して來たのである、私は決して英吉利が嫌ひではない、日本の次には英吉利を好むのであるが之が爲めに言ひ度いことも我慢する必要はなからうと思ふ。獨逸の經濟學者として第一流とまでは行かぬけれども社會主義に就ては最も深く研究をして居る柏林大學のゾムバルト教授は近頃『英雄と素町人』と題する一書を公にした。素町人とは英吉利を指し、英雄とは獨逸を意味したものである。私は獨逸人でないから悉く此議論に感服はしないが此の書は非常に流行したもので、少くも二萬部以上の出版を見、英國あたりでも盛んに讀まれた書である。私はゾムバルト氏が獨逸を英雄と褒めるとには徹頭徹尾賛成しないが、英吉利を素町人と言ふことは賛成である。

三 成金然たる英國の學界を見よ

和蘭などを舊成金黨とすれば英吉利の思想の中心となつて居る哲學は何所までも新成金黨の思想である。

十六世紀以後の英吉利の哲學、即ち彼のペーコンの哲學の如きはえらいことはえらいか知れないが、彼は人間としては極めて下等である。偉い人は成程決して常識では判斷は出來ぬが、彼は一身上の素行が治まらなかつたのである、偉い人は悉く健全なる事をやるとは云へない、釋迦とか孔子とか基督とか言ふが如き人は別であるが多くの偉い人は完全無缺な人はない、缺點は誰でもあるが、ペーコンの缺點は何人も了知するところでは彼は自己の學問を利用し地位を利用して有ゆる金の爲に仕事をした、彼んな下等な人間は多くその類を見ないところである。其哲學は確かに尊敬に價するものがある。併しペーコンは純哲學者として、また政治哲學者として、社會哲學者として如何なる事をしたか、ペーコンは矢張り素町人根性の哲學者である、私は英吉利のことを特に悪く云ふのではない、今日でもペーコンの哲學は愛讀して居るが、非常に實利的な政治家的な

思想を説いて居る、ペーコンの説を讀むと吾々はどうしても其の感じを免れない、それからジョン・ロツクに至つては和蘭商人根性に満ちて居る、ジョン・ロツクは偉いが非常に町人的の匂ひがする。彼の政治説及び經濟説を書いた本を讀んで見ると此の事は如何にも能く分る。

十九世紀に入つて獨逸にはカントあり佛蘭西にはルソーありて各々其の哲學を代表して居るが、然らば英吉利の思想上の代表者と認むべきものありや、私は斷じて無いと言ひ度い。ヒューム、アダム・スミス等はカントやルソーが獨逸や佛蘭西の代表的思想家であつた如き意味に於ける代表者ではなかつた。吾々は十九世紀の英吉利の代表者はズット下つて後の學者に發見し得るのである。其は即ちベンタムである。その「最大多數の最大幸福説」は全く商人的で營業費を幾ら使つてもそれを幾らに賣つて差引利益が幾らあるといふ如き打算的だ、恰も商人が營業費を使はなければ得られないやうにベンタムの哲學上の幸福は只取るべきものではなくして代價を拂つて取るのである、代價を

少なくして以て最大の幸福を得るといふ主義で「最大多數の最大幸福」である、スペンサーの進化論は商業的の解釋を社會上にも適用せんとしたもので、今日の商業は他人と競争して打負かす、自分の方を安くするといふことが一番主眼である、だから他人より高い生産費を使ひ、他人より仕入直段の高い商人は商業上で成功しない、反對に仕入れる時に同じ物でも安い物を仕入れて他より安い物を拵へることが出来るものが成功する、他より以上の生産費を使つて居るものは何時も競争に倒れるといふことが即ちスペンサーの社會上に當倣めたところである。安いものが勝つ、早いものが勝つ、一番多く叫ぶ奴が勝つ、同じ直段ならば一番餘計廣告する奴が勝つといふ素町人主義である、昔は武士を以て社會の中堅として居つたが、段々それがなくなつて産業社會で成功するものは産業界の大將として最も尊敬せられると云ふ。徳富蘇峰君が嘗て「將來の日本」といふ本を出して當時盛に青年に歡迎されたのは此のスペンサー説の受賣りであつたのである。

四 素町人主義が災する百般の事實を見よ

此思想が一番能く英吉利に於て完成して居る證人は經濟學で是は世界で英吉利が一番發達して居る、他の國のは英吉利人の説を修正したに過ぎない、經濟學を知らない者は英吉利人の耻だ、他の事は知つて居なくつても經濟學は少しは知つて居なければならぬと云ふのは經濟學は町人根性を手つ取り早く分り易くしたものである。經濟學は英國に於て素町人御用の學問（我輩は此を第三階級の哲學と名ける）として最も能く發達したのである。

之に基いて英吉利の政治組織も亦町人的に出来て居る、英吉利に於ける所謂二大政黨政治といふものも實は此の思想の産物である。

國務大臣の彈劾も日本では豫算に關係なくやるが、英吉利では「いふことはない、英吉利では成べく巾着を捉へてさうして叱言を言ふ、外務大臣なり海軍大臣なりの信任を問ふ時に、それに關係した問題に巾着を掴んでやる。丁度阿父さんが倅に小遣を呉れる時のやうに、「阿父さん小遣を下さす」、「宜しやる、やるが併し貴様どうも怠けていか

ぬ」斯ういふのが一番利目があるに相違ないが、是は町人的だ、政黨政治といふものは大變理想的だといふけれども、實は斯の如く商人的に理想的なので政治の取遣が矢張り懸引である。

内閣がどんなことをして居るか、是は探るべきか探るべからざるか、皆決算書を見てやる、だから何事も數で行く、ルーター電報を見ると、英吉利は今や五十萬の兵を送る準備をしつゝある、來年までには三十萬の新兵を徵集し得るだらう、或は聯合軍は何十萬の兵を送る計畫をして居ると、數で驚かして居る。五十萬送つたといふことは云ふが五十萬負けたといふことは云はない、戰爭で負けた時には成たけ通信を短かく兵隊の數を送る時には何十萬、佛蘭西へ印度兵が何十萬上陸したといふ、是れは要する所町人主義である。一度英吉利人の手に掛ると皆コムマリーリズムに化してしまふ、戰爭も矢張り、ビジネスである、英吉利人が戰爭をするには祖國の爲に命を捨るといふことは言ふかも知れぬが、彼等の心の底に入つて見ると、さういふ考へは誠に少ない「戰爭へ出

ると一週間幾ら呉れる」とか「戦争に出れば女房に是だけの金を呉れる」とか言つた様に總てビジネスであるから命を捨てることは更にない、ビジネスである以上は「命あつての物種」だ、命がなければ金があつたつて仕方がない、命を抛つといふ事は英吉利の軍人はしない、英吉利の軍隊の組織の悪いのは色々の缺點があるか知れないが、英吉利の兵隊の弱いののは矢張り戦争をビジネスとして居る、戦争へ出て鐵砲を擔いで居ても彼等は町人たることを忘れない、此「商人根性」といふものが弱い原因を爲して居る、是は皆コムマリーシャリズムの結果である、是は一面に於て非常に宜いものだけれども、英吉利で成功しても必しも他の國で成功するところではない。否、只英吉利にあるものばかりがビジネスであるのみでなく、英吉利から來たものはビジネス的の匂を帶て居る、今日の商業主義に反抗して居るべき筈の社會主義、社會民主主義の一番中心にビジネスの思想が入つて居ることを見れば、他の小さいことは言はなくても證明が立つ。是は何故かといふと、社會民主黨の生命として居る階級制度は労働者と雇主とは兩立しない利害を

持つて居るのであるから假令労働者の利益を進めやうと思つても雇主を動かさなければならぬので商賣忌み敵となつて並び立たぬ、其骨髓は何であるかといふと、労働者と雇主との間に一定の分量を奪ひ取り合ふのである、ソコで利害の衝突が起る、此所に定つたものが一つある、此の箱の中に例へば煙草が五十本ある其五十本を一方で三十本取れば一方は二十本しか取れない、一方が四十本取れば一方は十本しか取れない、其箱の中にあるだけしか取れない、だからどうしたつて利害が相反する、互に多く取らうと争ふ、此素町人根性と戦ひ素町人主義から脱却しやうとする社會主義でさへ其中心に於てはコムマリーシャリズムを有つて居る、又之を金科玉條として居るから之を捨てゝは吾々は成立たぬと今日でも尙ほ考へて居る、併し是は千九百十六年以後にはどうなるか分らない。

最後に英吉利では外交といふこともビジネス視する、外の國を見ること商店が軒に暖簾を掲げて居るが如くに考へて居る。日英同盟は日本に取つてはどうか知れぬが英吉

利には非常に宜いビジネスである、例へば同盟といふことであつても自分の爲に働いて呉れるのでなければ結ばない、英吉利から云ふと、自分の國の兵隊を使ふといふことは英吉利のやうな雇兵であつては一番高く附く、兎に角兵隊になる年齢まで育つた者をムザ／＼戦争で殺されてしまうことは非常に損失になるから他の國に戦かはせる、塞爾比亞でも白耳義でも左様である。さうして同情は非常に注ぐ、何となれば同情には金が要らないからである。

今度の戦争で一番馬鹿を見たのは白耳義と塞爾比亞であらう。其次は露西亞、それから佛蘭西であらう、日本も英吉利の利益を増進する爲めに大分勉強した、英吉利から云ふと己れが一番宜いビジネスをしたのである。即ち英吉利といふ國は其外交を以ても政治を見ても一の株式會社の如く諸方に支店がある、東京の霞ヶ關にも支店があるやうだ、大隈伯でも加藤男でも誰でも英吉利から見ると番頭と思つて居るビジネスが旨く行つて居る限りはさういふことが出来る、尤も英吉利にも素町人的でなく立派な人格を有つて

居る者もあり、申分ない人もあらうが、根性が何處までも町人である。英吉利人の世界觀、或は宇宙觀といふものは是を以て形造られて居るから、是でないものはどうしても頭が上らない、だから是を最も具體的に行なつた英吉利は世界の金融の中心となつたのである。

五 世界各国亦此の潮流に卷込まれんとす

然るに此英吉利流の町人主義は、英吉利獨りに止らない、十九世紀は即ち此町人時代と言つてもよい。獨逸の如き英吉利とは大に事情を異にした國でも次第に此の主義に感化せられつゝあつたのである、戦争前までは日本などよりも多く英吉利流の影響を被つて獨逸人の從來の思想とは非常に異つたことが次第に獨逸へ入つて來た。

ゾムバルトも言つて居るが英吉利人は戰地塹壕へ入つて居ても剃刀を持つことを忘れない、髯などは生へたまゝで戦争をするのではない、風呂に這入る、髯を剃る、モツと他の事も楽しんで、さうして戦争をして勝ちたい、是も一のビジネスだ。昔の相撲を取

るとか劍術とか柔術とか、是は武士的の仕事で身體を鍛えることだ、處が今日のベースボールは一部分は身體を鍛えることであるが、勝負記録、此二つが生命になつて居て、昔の武士の果し合ではない、興行だ、曾て早稲田大學と慶應義塾とがベースボールの試合を三田綱町の慶應義塾大運動場でやつたが、芝の警察署へ願を出した時に「野球開催願」とした、處が開催ではない、「野球興行願」として云はれて非常に幹事は怒つて歸つて來たが、署長の言ふには「錢を取るぢやないか、入場料を取れば興行である」と云つた、勿論是れは興行ではない儲けたい爲めに取るのではない、其日の入費だけを償ふ爲めに取るのであつて已むを得ないことであると思つて居るが、亞米利加邊りでやるのはさうではない。金を取る爲めにやる、それは劍術や柔術だとても金を取る方法であつたかも知れないけれども、金を取る爲めにやることは卑しいことだとした。今日では段々高い入場料を取る、所謂ビジネスだから野球の選手を電車會社などで、卒業すると直ぐに雇つて野球場を拵へる、廣告の爲めに使ふのださうである、是れなどは全く素町

人主義で、教育の神聖を害すること最も甚だしい、是は日本で始めたのではない亞米利加から舶來したものだ。それから記録、帳面を付ける、商人は一錢の金錢を拂つても直ぐ付ける、帳面へ付けたら必らず取り立てる、友達の間でも錢の勘定は別だ、それと同じやうに三尺飛んだソレ記録だ、三尺五寸飛んだ、記録破りだなど、賞めて居る。モウ五寸餘計飛んだら五十錢餘計貰うと言つた風に知らず識らずの間に吾々も記録々々と云つて餘程素町人化せられて來た。

處が之を救ふところの力は今まで何があつたか、基督教は英米に於ては悉く素町人的に化せられて救ふ所ではない、却つて段々其主義が發達して來て居る。何が此の世界の滔々として素町人化して行くことを救ふか殆ど悲觀せざるを得ない、戰爭以後に於ける文明も根本に大なる悲觀を免がれぬ、實に世の中は段々狭くなつて來たのである。

ソコで一番多く悲觀すべき所の状態を知つて居りながら己れを欺いて、人をして素町人主義へ向はしむるに力を盡したのは吾々經濟學者である、素町人主義に比べると之に

應用する哲學などは所謂空理空論で唯常識、常識といふことは即ち商人の身を守る道だ、商人が商賣をするには成るだけ人並外れたとをする、商品の廣告には何をしても構はない、天下の耳目を聳てる様なことをするのが常識と思はれて次第に世の中が押賣的になつて来た。若し此の戦争がなかつたならば中々此の勢ひを底止することは出来ない。今日から云へば十九世紀の思想といふものは如何にも緻密に如何にも完成してゐるやうで曆の上から言へば唯百年であるが、内容から云へば三百年にも五百年にも當ることが出来て、非常なる英傑にあらざる限りは之を打破ることは出来ない、獨逸のニーチエは此の勢ひを打ち破らうと努めたが到底力が及ばない、其他の小さいものはあつたけれどもそれは只部分的の仕事をして得たので、此大きな勢ひを元へ歸し或は正しい方へ導くことは殆ど出来なかつた。

六 盲目的拜英主義より醒めよ

然るに此戦争の爲めに今までは成功の模範として世界の諸國が皆羨んで居つた所の英

吉利が彼の體裁、唯戦争の敗ぢやない、戦争の敗だけならば英吉利は現在陸軍に於て弱いといふことになつて居るから、さう驚くに足らないがそんな事ではない、戦争の結果英吉利は国防條例を發して新聞雑誌の非常な檢閲をやる、英吉利に不利益な記事を決して新聞に出させない、ルーター以下の電報會社を監督して行く。監督と云ふが實は買収してドシ／＼嘘を世界中に電報料を惜まらずして打たせる、敵國人取引禁止令、及び敵國人に當然支拂ふべき所の配當金或は利子等は國家が之を代つて受取つて沒收するところの敵國人の支拂禁止等皆英吉利の所謂自由主義とはまるで違ふ、であるから英吉利人の自由主義を何處までも信仰して居る人は、最早英吉利は獨逸以上の獨逸人になつた、全くプロイセン化してしまつた、非常に憤慨して居るが是は事實である。獨逸以上の官憲主義、今までの自由主義に對して出来ないことをやらなければならぬからやつて居る、好んでやつて居るのではないが、是全く自由主義を看板として居る所の素町人主義の破産と言はずして何ぞ、「株式會社大英帝國」は今將に破産に瀕して居ると云ふ可きである。

併し、和蘭は國が滅んで居ながら長崎の出島に旗を立て、兎も角も獨立國であると思つて居つたやうに、大英帝國が破産状態にありながら、日本では英吉利に在外正貨が四億萬圓あるなど、云ふて居るが即時回収の見込はない又四億萬圓位なくなしても宜い、吾々日本人はまだそんなに素町人になつて居ないから話合に依つては四億萬圓位英吉利に呉れてやつても宜い、四億萬圓よりモツと尊いものを預けてある、即ち日英同盟と稱して日本は事に依ると陸軍の兵隊をも英吉利へまた借さうとして居る、實に危険千萬な話である。

七 十九世紀總勘定としての戦争

私の考では今度の戦争では獨逸が負けるかも知れない、戦争の結末は何人も明言することは出来ないが、獨逸の敗戦となるかも知れぬが、經濟上から見れば、英が勝つても、獨が勝つても、餘り結構なことはない。英が勝てば舊成金國が益々威張ることになつて、其素町人主義は彌々世界を壓倒する、獨が勝てば、新成金國の勢を増して、新

素町人國が一つ殖えて、其が英國を壓へると云ふ丈けである。「商賣忌み敵」と云ふ諺の通り資本的侵略國は幾つもあり得ない。必ず其一が他を亡ぼさんとするに相違ない。英獨なる二箇の大町人は到底兩立しない、何れか一方が他方を倒す迄は其對抗は繼續するものと見なければならぬ。其反對に敗けた方は或は素町人主義の魔道から脱却することになるかも知れぬ。英が敗れば英國に全盛の町人根性は著しく減ずるであらう、獨が敗れば町人根性の世界政策では逆も駄目と悟りを開いて、却つて健全な方針に向ふ様になるかも知れぬ。兩方が勝つと云ふことは有り得ぬから、何れか一方は益々素町人道に驀進し、他方は反對の方向に向ふものと見る可きである。之れが即ち素町人世紀であつた第十九世紀の總勘定である。

二十世紀はどうなるか分らないが要するに今までの素町人主義では最早世界は進んで行けない、吾々の持つて居る政治思想、吾々の持つて居る經濟思想、吾々の持つて居る社會思想、ありと有ゆる吾々の思想といふものは千九百十四年でもつて一段落を告げ

た、是から新らしく元帳を開かなければならぬ。此新らしい元帳は誰の手に歸するか、英吉利が相變らず總勘定元帳を持つか、或は獨逸が持つことになるか、今日では分らぬが、若しも英國が依然として勘定元となるならば世界の改造は著しく遅れることは疑を容れぬ。獨逸が勝つて新町人主義を振り廻されるのも迷惑である。世界の文明の眞の向上發展の爲めには、兩國共勝負なしに引分けとなつて英獨共に素町人主義の非を徹底的に悟得して呉れるのが一番結構である。私は十九世紀の總勘定が此云ふ風に決することを切望して已まないものである。

三 來るべき世界と其の文明

——大正四年十二月談話五年一月一日至七日「東京日々新聞」掲載——

此度の戦争は一般に未だ却々續くと思はれてゐる様であるが、私は平和が極めて突然に來はせぬかと考へてゐる。これは非常に空想の様であるが、表面丈却々體裁の好い強い事を云つてゐる英、獨、佛の内面の事情を見てゐる者には、双方共頻に和を欲してゐる事が想像出来る。

これを英國の方より見て、私は重なる理由として左の三條を上て見たい。

第一は財政上の状態である。今日迄英國は極めて健全な財政々策を取つて來た。即ち戦争の入費全部を出来る丈け直に國民が負擔する様な方法を取つて來たが第一、兌換停止を行はずに持ち耐へて來た事が第二である。尤も英國とてもカレンシー・ノーツなるものを出して居る。併しこれは他の交戦國の不換紙幣に比して今日の所では未だ額が少く、流通券の大部分は兌換である。此二點は、最も骨が折れる事であると同時に、健全なる財政々策の二大支柱である。然るに近來の英國の有様を見るに、流石世界の金融國

たる英國も、左の二つの理由から、最早長く此の健全なる方針を維持し能はぬ事に到りはせぬかと思はれる。

(一) 開戦以來軍費が非常に嵩じて来た。

(二) 金主たる位置にゐる英國が、聯合國たる佛、露、白等への補助は、非常に多額に上つてゐる。

極最近の報道に依れば、國民は上下の別なく、全所得の半分を政府に納めねば、今の有様は維持出来ぬ事になつてゐる。全所得の半、即ち百圓の所得の者が五十圓を出す事は、中以下の階級に取つては不可能と見ねばならぬ。随つて、上流に半分以上或は三分の二までも課せねばならぬ事になる。然るに全収入の半分乃至三分の二を出す事は、上流とても堪へられぬ。又堪へられるとしても、心理上甚だ悪い影響を及ぼすは免れぬ事となる。

故に此等の階級全部が此くの如き財政上の負擔を免れる爲に、此戦争の永續を希望せ

ぬのは明白である。表面強い事を云つてゐても、實際の心事に立ち入ると、大に相違がある事は實に想像が出来る。

第二は軍事上である。近來に至つて英國人は、軍事上勝利を得る事は不可能だと思ふ様になつた事である。英國人がダーネルス海峡攻撃中止を叫んだのは、彼等が如何に自國の陸海軍に信用を置いてゐぬかと云ふ例證である。加之、海峡攻撃は、財政上の大負擔なる上、協同攻撃に参加した各國に、海峡攻撃の爲に又多大の補助を爲ねばならぬ。英國人は之れを馬鹿々々しいと思ふ様に爲つて来た。

第三は國內經濟上の理由である。英國に於ける生活が大變困難となつた。即ち食料、軍需品共に法外に高價と爲つた。故に政府に所得の大部分を徴收された上に、平日より多額の生活費を要する事となる。加之、海上權は有つてゐても、今日の有様では、海外よりの供給には、餘程の困難がある。然し支拂ふ金さへあれば、獨逸よりは餘程得易き事は無論なるも、開戦以來運賃は高價となり、平日は自國の船舶が外國の貨物を運び、

それに依つて得る利益が自國への金貨流入を助け居たるに反して、現在は自國へ流入する運賃は減ずるのみならず、其反對に外國に支拂はねばならぬ状態にある。故に近來英國の新聞雑誌を見ると、何れも極端に人民に對して生活上外國品を使用する事を廢せよと主張してゐる。新聞雑誌の論說記事でなく、大臣や其他の名ある人が、演説や寄書に同様の事を提唱してゐるは實に空前の事である。それが日本に於ての様に、國産獎勵等との積極的な理由でなく、金貨はドン／＼出るし戦争の前途は遠遠に思へる處から、兌換停止の恐れありとして、消極的に熱心に叫んでゐるのである。肉類の使用禁止を叫び野菜類を用ゐる事を勤めてゐるが、これは勿論英國に使用する肉類は大部分外國から供給されるからで、こんなに食物を制限する迄になれば、英國も封鎖中の獨逸と大差はない不自由を味はねばならぬ。

以上三點殊に財政の點より現在の戦ひに要する入費は成る可く公債に依らず、現在國民の所得にて直に支拂はんとする英國の主義は、維持困難とならんとしてゐる。それと同時に、兌換制度の維持も困難となつて來た。

二

然るにこれを獨、佛の状態と比較して見ると、此兩國の取つた財政策即ち最初から兌換停止を斷行してゐた方が、遙に安心なものがある。今戦争を止めれば、云ふ迄もなく英國が遙に安全健全の地位にある。然し此状態を今暫時繼續して行けば、英國は事實上は勿論形式上にも兌換停止の止むなきに至るを免れまい、果して然ることゝなれば戦後遙に不利益な位置に立たねばならなくなる。其理由は、獨佛兩國は、最初より兌換停止を斷行したが、此停止は金貨を失ひ盡しての停止でなく、金貨は持つてゐての停止であれば、戦後の財政整理には大變有利な状態にある。丁度借財ある人が一文なしと爲つて支拂停止を爲しては眞の破産たるより外はないが、當分支拂を待つて貰ひ、他日整理を済まして返済の方法をつけ様と云ふのは未だ始末のつけ様がある。佛獨が取つた政策は此後者の方で、整理の時の準備の爲未だ金貨の有る時に支拂を停止したのである

から、戦争が止めば回復が出来る譯である。反之英國が停止する時は全く又は莫大に金貨を失つた場合と想像す可きである、故に後日の兌換回復は非常な困難に陥る。即ち英國に取つては今が戦争の止め時である。今止める事さへ出来たら、兌換停止前の事逆財政上非常に有利な位置に止まる事が出来、世界の金融國としての面目をも維持して往けるのである。元來英國が世界の第一等國と目されてゐる點は、財政上にあるので、英國が英國たる所以はそこにある。それ又英國目下の苦痛は大きいので、それは財政上の常識發達し、利害の計數に明かな英國人はよく知つてゐる處である。

次に軍費の負擔を全部即刻に支拂ふ主義も、今日の處では餘程怪しくなつて來てゐる。繼續して行くとすれば、英國も獨逸の如く非常に多額の公債を要するのであるが、これも兌換の問題同様に目下では英國は立ち後れの氣味がある。獨逸の様に租税を餘り徴收せず公債を募つて戦争を爲たのと異り、戦争は負け金貨は失ひ、遣り切れなく爲つての公債主義は、成績が悪い事火を觀るより明かである。加ふるに獨逸の様に四面楚歌の間

に立つて、國民は國家死活の大問題と考へればこそ非常な公債も成立させたが、英國々民の意氣込は獨逸國民のそれに比しては半にも行つて居ぬ。況して勝つての上なら別として、見込の無い戦争に多くの金を貢ぐのは、死ぬ病人に藥を吞ませるのと同様、張合のない事夥しい。英國に於ける公債の成績が拙いだらうと云ふ事は、現に英國の識者も憂へてゐる處で、これは世界の金融國たる英國の體面にかゝる問題で、英國たるもの如何なる事情あつても獨逸程のものさへ出来ぬとあつては、頗る體裁を損ずる事となる。

三

英國の方面は大略斯の有様で、表面の體裁は別として、四圍の事情は戦争終結を促してゐるが、他方獨逸側に就ても左の點をあげて見たい。

第一、獨逸の軍事上の成績は世に知られてゐる通り、多く云ふを要せぬが、然し續つて考へて見るに、人間の數のみは之を如何とも爲る事は出来ぬ。如何に獨逸人が優れてゐても、生れ立の赤子は兵士になる事は出来ぬ。即ち兵士補充は段々困難となつて行

く。況して戦線擴張しては困難は増す許りで、軍事上より考へてこれは獨逸の最も難む處で有らねばならぬ。又戦ひは事實勝つかも知れぬが、戦争の長くなるにつれ後顧の憂は益々大きくなる許りである。

第二、獨逸が財政上困難してゐると云ふ事は、屢々傳へられてゐる處で、現在英國や我國に於ても、左様考へられてゐる様であるが、これは聊か想像違いで、現在は獨逸は未だ行詰るほどには困つてはゐぬ。然し獨逸が困る事は實に戦争後に起つて來るのである。此點が英國と異なる處で、前にも云つた通り、英國は開戦以來健全な財政々策を取つて來た故、今多大の困難はあつても、現在の狀態さへ持續出來れば、戦後の回復力は大きなもので、苦痛少く舊態に復する事が出来る。例へば安月給取が如何に困つても得た丈けの金で持ち耐へて行く決心でコツ／＼やつて來たのと、借金政策で所謂遺線を持ち越して來たのとは、今度餘裕が出來て多小樂な境遇に入るとしても、前者が容易に其新しい境遇の恩恵に浴し得るに反して、後者は却々左様は行かぬと同様、獨逸は全く借金

政策を取つて來たのであれば、戦争後は頗る困る。現に今要してゐる入費は、財政上將來の國民に負擔させてあるので、現在は比較的豊であり、財政上の負擔も他國に比しては遙に輕いかも知れぬ。故に現在では別に不平も起らず、先々無事にやつて行けてゐるが、前途の事を考へれば、實に寒心すべき事が多くある。それは兎も角、目前獨逸政府は困つてはゐぬ。公債募集は今迄出來て來た。今も出來る見込は充分にある。獨逸政府に取つては全く公債募集の出來なくなる時はないと思ふ。實に獨逸政府は千九百十四年即ち昨年九月に四十五億萬麻克、今年二月に約百億萬麻克、去る九月には百廿億萬麻克、此合計二百六十五億萬麻克ばかりの公債を募入し得てゐる。之に對して英國が公債として募つた額は今日迄九十億萬圓、即ち百八十億萬麻克許りにしか當らぬ位のものである。之を英獨の富の程度に比べると、實に大變な相違であるが、獨逸は尙此上第四回公債として百億萬麻克を募らうとしてゐると云ふ事であるが、私の考へでは無論之も出來る、否第五回の募集を爲る時があつても、成立する事と思ふ。處がこれは金が有つての事で

はない、金はなくとも公債募集が出来るのである。

四

然らば金がなくて公債は如何にして成立して行くかと云へば、政府が募集した金は又直接政府がこれを費やして民間に落ちる。民間に落ちたのを又再び回収するので、其有様は鹿角菜を出したり食つたりして行つた昔話の伊勢参りと同様である。事の實際を云つて見れば政府は生産した食用品、軍需品を代價なくして民間から徴収する。英國では所得の半を金で出してゐるが獨逸では事實は生産した物品を無代で政府に取られてゐる。代價は後日支拂ふ事に約束してある。此方法なら國民が生産を續ける限りは公債の募集が出来る譯で、金の有無の問題ではない。

此の様な非常方法は、獨逸國民が國家存亡の懸る大切の時と思へばこそ以新舊膽の決心で出来るのである。決して生やさしい覺悟で出来るものではない。然るに近來獨逸の新聞雜誌の調子より判斷すれば、獨逸國民の此決心も幾分の緩みを生じた事が推察出來

る。何故と云へば、一は元來非常覺悟なるものは、長時日續けられるものではない。二には、獨逸は既に勝つてゐる。開戦當時は全く獨逸は亡びるかも知れぬと云ふ事は、不言不語の間に國民の心に觸れてゐた。それ故平日は想像も及ばぬ覺悟も出來た。それが今日となつて見れば其憂は取除かれ、國民は勝つた事を充分に否事實以上に報道されて居るので、殉國の覺悟は聊か緩んで來たと思ふ、即ち非常手段に訴ふる獨逸一流の亡國的財政策は之を維持するに愈よ困難を感じる事と思ふ。

第三、は經濟上の事情が戦争の永續を許さぬ。食料問題に就いても、英國及び我國の推算には餘程遠算がある。英國あたりで云ふには、獨逸は非常に窮してゐる、伯林あたりの女達は示威運動を行つて、「パンを與へよ、然らずば死を與へよ」と叫びつゝありと云ふがこれは獨逸國民の心理を知らぬ捏造説に過ぎぬ。又獨逸の食料供給の狀態を知らぬ説に外ならぬ。云ふ迄もなく食料には困難はしてゐる。然し次の二點は實際の狀態上英國及我國等が想像してゐるより餘程樂なものである事をよく示してゐる。

(一) 獨逸は平素でも凡ての食料が缺乏してゐるのではない。只生活の程度が高くなり、今迄はライ麥、馬鈴薯等を常食としてゐた百姓が、これらを止して小麥を食ふ様になつた。即ち黒麵麩を喰べるのを止しても白麵麩を喰べたので、白麵麩に要する小麥が不足してゐた。然るに一方ライ麥は有り餘つてゐる。故に小麥を止してライ麥を用ゐる事になれば其不足は苦痛でない。又例へば大麥が不足しても、これはピールの原料、牛馬の食料にも非常に多額が取られてゐるのであれば、人間の食料問題には關係はない。勿論多くの壯丁が外征すれば、田地が荒れてライ麥も生産額が減ずるし、在來露西亞より輸入した物は來ず、これらも影響はあるかも知れぬ。然し近來の報道を見れば、外間の考への様には減じてゐぬ。

前に云つた様にライ麥及小麥の消費は、平素食料でなく工業用、牛馬其他の家畜の飼料にも費ふのであるが、扱其割合は如何になつてゐるか云へば、最近の調査では一人一年に要する食穀は二百三十八基瓦で、其中人間の要する分は百六十六基瓦と云ふ事

である。然るに戦争が始まつた爲に獨逸に在つた外國人は交戦國民は勿論、米人其他の中立國人も大部分は去つて終つた。其數約二百萬と見て大差ない、六千八百萬あつた獨逸の人口は今六千六百萬となつた。之に一人百六十六基瓦の食穀を要するとして、千三百萬噸の食穀があればよいのであるが、昨年獨逸の收穫は千五百萬噸餘の見積で結局二百萬噸の餘裕を生じてゐた譯になる。今年の收穫も確實ではないが、餘り著しい減收は無いと云はれてゐる。これが事實に近いとすれば、極端な食料缺乏に苦しんでゐるとは云へぬであらう。

(二) 巴爾幹諸國が獨の勢力範圍となつた結果は、獨逸國內に食料を入れる餘地を生じて來た。又露西亞の占領地、並に佛、白、塞にも占領地があり、獨逸流の非常手段を用ゐれば、此等の地方からも幾何かの食料は取れるであらう。即ち平時の獨逸とは食物供給の範圍が廣くなつた譯である。

(三) 獨逸は開戦當初から食料品取締に就いては周到綿密な手段を取つた、數十の食料品

取締規則と云ふものを設けて、食料の供給を調節して居る。最近に至つては六月に帝國穀物所と云ふ大機關を設け、全國のライ麥と小麥とは收穫と共に直に政府の手に徴發して、營業部をして各地方自治團體と協力して分配の事に當らせてゐる。これは全くの處官僚主義の獨逸だから出来るので、英國であつたら逆もこんなことは出来なかつたのである。官僚主義は種々の弊害もあるが、一面には斯る便宜もある。

右の有様であれば、獨逸が饑餓に迫つて、此戦争は終結するであらうと云ふ想像が當つて居ぬ事は明白である。然し經濟上からも現時の戦ひを此以上に續ける事は困難が殖へる許りで、随つて國民の不滿も發して來るのである。況んや此戦争が永引けば食料供給の困難は彌々増して來るに相違ない。其時になつて戦争を罷めようとなれば、獨逸は非常に不利の地位に陥るは明かである、或は國內人心に非常な異變が起るかも知れぬ。前述の手段は國民に非常な決心覺悟ありて行はれるもので、これが弛めば不平の聲が高まるは云ふを待たぬ事である。即ち獨逸から云つても戦争を止めるのは、軍事上の大

成功の時が好時期で、此上もつと勝てると思ふ者もあるかも知れぬが、責任者乃至國政者の間では、これは餘程考へられて居る問題に相違ない。

大略右の有様で、佛露は暫時おきて、兩大關の英獨兩國が、事實上戦争を繼續仕様とする決心が薄らいで來たと思ふ。即ち此度の戦争は吾々の豫想外に突然起つたが、同様に其結末も「盗人の夜來るが如く」忽然として來りはせぬかと思はる。

五

全く、戦争が一時も早く終結する事は、世界の文明上から願はしい事で、此戦争が繼續さればされる程、經濟上、財政上、道徳上弊害は益多くなる許りで、然らば根本的に英獨間の利害衝突の解決が出來、永遠の平和が來るか云へば、平和は來ても一時的で、又戦争が起るかも知れない。絶対に戦争がなくなる迄戦争を繼續せよと云ふのは、犬と犬とを噛み合はして双方共斃るゝを待つが如し。大局には何等の利益もない丈けでなく、其爲には多數の人を殺し富を費やし文明を退歩させる許りである。獨逸の軍國主

義は憎む可きである。乍併これを亡ぼして終ふ事の出来ぬのは言ふまでもない、獨逸を亡して終ふ事は少しも好くない。文明に貢献する點では、獨逸には實に大きな力がある。此力は新しい文明の建設には大きな働きを爲す力である。

云ふ迄もなく此戦争は繼續して行つても聯合軍が勝つ見込はない。又獨逸が大に勝つ事となると戦勝國として横暴を逞うし世界に跋扈するに至るであらう。何事でも優勢にはそれに伴ふ横暴がある、現在我々は英國の跋扈に悩まされて居る。英國の専横暴戻から脱することは眞のコスモポリタンとして我々の切に冀つてゐる處である。然るに今英國が敗れ獨逸が大に勝つとなると、吾等は英の横暴を脱すると共に獨の専横を迎へねばならなくなる。即ち前門に虎を逐ふも後門 狼 を迎ふる事となる。これは獨人に取つては願はしい事に相違ないが、獨人でない吾等には一箇國が横暴を働くは堪へられない事である。其意味から或一國が餘り勝つのは困る。同様に經濟上から云つても或一國が餘り富むのは困る。英國は世界の金融國として凡ゆる金權を掌握してゐたので、便

利は便利であつたが、同時に他の迷惑は一方ならぬものがあつた。吾々は獨逸が英國の位置をとつて代る事となるのは、コスモポリタンとして飽く迄も望まぬ。英國も獨逸も米國も日本も、横暴をはたらかぬ程度に強くもなり、又富みもして欲しいと云ふのが吾等の希望である。

此度の戦争は實に世界の一大厄事には相違なかつたが、右の意味から云へば、英國の横暴を減じ、其重みを獨逸、米國、日本等に分つ結果より誠に結構なものであつたと云はねばならぬ。獨り經濟上のみでなく、又世界文明の上に進歩を來す事と思ふ。此等の點から私は戦後の世界文明の前途を頗る樂觀してゐる。併し乍ら此樂觀は若し獨逸が今日以上に勝つと爲ると維持が出来まいと思ふ。即ち世界はより悪くなると見ねばなるまい。故に英獨兩國に取つても今が和解の最好時機と思ふが、世界文明の上から云つても目下を以て最好時機と云つても好いと思ふ。

六

さて平和が来るとして戦後の歐洲文明は如何なるであらうか、コレハ無論獨逸の勝利現在の程度にて止まるか將た亦更により大なる勝利を得るかによつて多少の差異はある可きは勿論である、併し乍ら大體に於て英國の功利哲學を中心として築かれた現在の文明に著しき變化が起る可きことは今より逆睹するに難からぬ、英國の功利哲學は過去に於ては大なる役目を盡した。英國をして今日の偉大を成さしめたもの其功利主義の効與つて大なるは疑ひを容れぬ、併し乍ら其は既に過去に屬する。既に戦前に於てもグラッドストーン流の自由主義の維持し得られず著しくロイド・チオルヂズムに傾いて來たことは識者の否定せざる處であるが、此變遷は此度の大戦によつて著しく促進せられたに相違ない、功利哲學より生れた合理主義其が經濟上に顯はれた資本主義、營利主義、拜金宗、町人主義(何れも粗同一事を意味す)は凡ての生活の内容を評定する文化價値を貨幣價値に還元して考へる。コレハ英國の強みであると共に此度の大戦に於て英國を無爲無能ならしめた大原因である、憲法政治も實は貨幣價値の政治である、豫算案を

押さへて置いてソコ人民の參政權を最も有効に行使する、豫算案は先づ下院の議に上すと云ふことは憲法政治の妙諦と云はれて居るがコレが即ち參政權の内容を貨幣價値で緊縛することを顯はして居る、コレが悪く墮落すれば拜金の利己主義となる、兵隊を募集するにも物質的報酬を高唱する様になる。而して戦争に負ける様になつた、自由主義と云ふも實は金持の自由主義(ゲルド・リベラリズムと獨逸人は笑ふ)個人主義も金持の個人主義、否政黨も金持の政黨と云ふ有様になつて居る、金錢の事に甚だ汚かつた大哲學者ベーコンを英國人は餘り笑ふ譯には行かぬ、ベーコンが其恩人エセツキス伯爵を賣つた非行はマコーレの痛罵によつて人皆知つて居るが英國の日英同盟に於ける最近の態度は全然ベーコン的ではないか、倫敦の大英博物館は英人の誇りとする所であるが、其貴重なる陳列品の或物は弱き南歐亞細亞諸民族から奪ひ取つて來たもので云はゞ贖品の陳列館である、大なる誇りと共に大なる耻をさらして居るもので我神社佛閣に於ける分捕武器の陳列とは全く異なる性質の戦利品ではないか。獨逸が若し大勝するならば今度

は大獨博物館てふ罪惡陳列館が出来ても知れぬ、然し戦ひが今已めば吾文明は唯一の大英博物館丈で免れ得るかも知れぬ(ルーヴルは暫く置く)。英國の資本主義には大なる功績がある、否世界をして今日あらしむるものは其賜物と云つても宜しい、併しなからこれは既に過去に屬する。獨逸は既に著しく此點英國にかぶれては來たが、此度の戦ひによつて大に覺醒したこと、信ずる、かくて資本主義、個人主義の力の甚だ疑はれると共に従來の個人的社會主義も亦其力を失ふことと思ふ。其代り此等に代つて社會的社會主義(或程度迄は國家社會主義の形をとつて)が著しく勢力を得るかと思ふ。即ち無政府主義サンチカリズムに導く所の社會主義は衰へてインターナショナル抜きのマルクス主義(詳しく説明せねば誤解が起るかも知れぬが)若くはロイド・チオルヂズムが勢を得るかと思ふ。獨逸でも英國でも現在は殆ど一の社會主義國たるのである、此が何等の影響なくして戦ひ終ると共に消滅しようとは思へぬ。十九世紀の初頭大哲學者フイヒテは鎖國論を著はして彼の理想國を描出した。後にチエリネン現はれて孤立國論

(此頃邦譯が出た)を著はした、ゾムバルトは近く「英」と町人なる小冊子に於て再び同様の事を主張して居る、固よりゾ氏の説の多くは取るに足らぬ戦争中毒論であるが、フイヒテ流の考へは或は向後多少具體的となるかも知れぬ。ケムプエルが我徳川時代の鎖國状態に敬服した鎖國論は邦人の知る所であるが彼も獨逸人である。無限なる世界經濟的思想は此度の戦ひによつて苦き經驗を嘗めた、其一部たる英國の自由貿易主義も危いものである、或度迄の封鎖と或度迄の社會主義化とは懸て近き將來の歐洲の大勢となるかも知れぬ。此社會に於ては貨幣價値を以て文化價値の内容とする現狀は維持せられず又維持するの必要なきは言ふまでもない、かくして經濟上に於ては保護熱が大に昂まるかも知れぬ、少くとも農産品殊に食料品の自給と云ふことには大に重きが置かれ、予等が學師ブレンタノ先生と共に極力主張し來つた自由貿易説は實際に於て大に疑はれることとなるかと思ふ。而して思想上文藝上に於ても亦極端なる一元主義進化論萬能主義は衰へはせぬかと思ふ。プラグマチズムは此意味に於て一方大に勢力を得ると共に他方

著しき變化を經來りはせぬか（凡ての學問が著しく尊重せられ又大に盛になると丈は英獨共に疑ひを容れぬ）。英國の經驗哲學は著しく影響を受けるであらう、但斯く云へばとてニーチエ流の思想が大に行はれるとは考へぬ。金の力に對して人の力、悟性偏重に對して意力の尊重、個人の活動に對して團體組織の力が力説せらるゝやうになりはせぬか。而して社會問題の解決には確に一の大なる刺戟が與へられる、戦後財政の負擔重くなるにつれて直稅主義對間稅主義の争ひが盛んになり、其模様によりては勞働階級を刺戟すること更に一層を増し、社會的運動の面目が著しく變化して來るかも知れぬ。資本家萬能企業家全盛の時代の弊が顯著となれば、此が實際上影響なしには居られまい。予は此等の事が起るとも必ずしも悲觀するには及ばぬと信ずる、唯其過渡は甚困難であらう、併し世界の文明は歩一歩向上することは期して待つべしと思ふ。

四 ロムバード・ストリート本位の

戰時經濟論を笑ふ

—大正六年四月一日「理財評論」掲載—

貨幣と富とを混同したとて、アダム・スミスの爲めに激しき非難を蒙つたのは、所謂マルカンチル、システムであるが、スミス以後に完成した英國經濟學は、貨幣價值と富とを混同するの誤りに陥ることが甚だ多い。其の最も著しい例は此度の大戦争に就て、英國流の經濟學者が獨逸を觀察する上に於て顯はれて居る。獨逸が貨幣價值の上の比較に於て、英國に劣る著しいものなることは言ふ迄もない。所謂金融市場本位の眼から見れば、獨逸は經濟上（實は貨幣價值の比較上）到底英國に對抗することの出來ないものである。然し金融市場本位の觀察は平時に於てすら經濟生活の一切を盡しては居らぬ、

況んや戦時経済に於てをや。戦時経済に於ては金融市場は國の經濟生活の上に於て著しく其重要を減じて仕舞つた。金融の緩急金利の高低は平素に於ける程の重要を戦時經濟に於ては有せぬ、否極端に云へば、戦時經濟は金融市場の上に超越するものである。故に吾輩は嘗つて云つた、戦時までは「金の經濟」が國の經濟生活を支配して居た、戦時に於ては「人と物との經濟」が「金の經濟」を驅逐すると。

二

英獨を比較して貨幣價値の數字に顯れた優劣のみを以て勝敗が極まると考へて居た論者は、獨逸は疾くの昔に經濟上に於て立行なくなつて居る可き筈である、其が今日まで持耐へて來たことは實に不思議千萬なりとして、種々牽強附會の説を下して、此難問を釋かうとして居るが、終に成效せず、獨逸は一の怪物なりとの結論に到達する。然るに獨逸は怪物でも何でも無い、英國流の貨幣價値本位の經濟論コン却つて二十世紀の化物である。此の化物觀から出立するときは四面悉く敵を受け、外國からの貨物の供給

の殆んど全く絶たれて居る獨逸が未だ食料難の極度に達せず、軍需品難の極度に達せず、而して一切の軍費を内國公債を以て支辨して居るのは、誠に以て不可思議千萬の事と思へるが、我々から見れば不思議でも何でも無い、却つて英國が食料難の極度に達せざるこそ不思議と云ふ可きである。ダニエル・デフォアのロビンソン・クルソー物語に面白うことが書いてある一寸引いて見よう。

I smiled myself at the sight of this money. "Drugi!" said I aloud, "What art thou good for? thou art not worth to me, no, not the taking off the ground: one of those knives is worth all this heap: I have no manner of use for thee".

「予は此の貨幣を見たとき、微笑して聲高く叫んだ、無用の長物よ、汝に何の用かある、汝は我に取りて何の價値もない、否汝は地より拾ひ上げる勞にも値せぬ、此小刀一挺でも、山の如く積んだ貨幣に價する、予は汝貨幣に對しては、何等の用も持たぬ」と平素貨幣價値の蓄積の莫大なるを誇つて居る英國も、クルソーの如く絶海の孤島に漂

泊したる今日、其累積した貨幣價值は Ding に均しい、何等直接の用を爲さぬ。クルーソーに取つては金銀の累積よりも一挺の小刀の方が遙かに有用である、戦時經濟に於ては貨幣價值の蓄積は却つて厄介なものともなる。其れよりも一挺の小刀一箇の生活必需品の方が遙かに尙いのである。累積した貨幣價值は場合によつては却つて累となる。而して之を恃とする謬見は實際上に甚しい弊害を惹起す。劍橋大學教授にしてマーシアル先生の後任者たるビグー教授が此頃「戦争の經濟及財政」なる一小冊子を著した趣意は實に此の金融市場本位の英國人の經濟觀の根柢深き謬想を匡正するにありと思ふ。我々から見れば何でもないのであるが、英國人に取つてはビグー氏が態々一書を著して之を匡正する必要ありと思ふ程、此種謬想は普及して居るのであるが、我邦でも此の謬れる英國經濟思想ロムバード・ストリートを經濟學の郷關と心得る底の思想が多く存して居る。従つて英國人の多數と共に獨逸の經濟上の強みを諒解することの出来ない人も若干存する様である。開戦當時獨逸は兵戰には勝つても經濟に於て間もなく倒れるか

ら、此戰は數ヶ月を出でずして獨逸の敗戦を以て終局するだらうの、獨逸は食料難の爲めに一年以内に降を乞ふに至るだらうのと、實に馬鹿げ切つた豫言をした擔板漢さへあつたのである。昔なら其人々は今頃は坊主になつて居らねばならぬ筈であるが、大正の御代の難有さ髪を生やし髯を生して今尙ほ論壇に濶歩して居て、不相替拜英的の愚論を繰返へして居る、何んと滑稽な次第ではないか。

三

覆て憎まれ口を叩くことは已めて、手取り早く獨逸の經濟力を示す可き一事實をあげて見ようなれば、ソレは昨年十月に募集した第五回軍事公債の成績である。先づフランスフルテル・ツアイトング及ベルリール・ターゲブラット兩新聞によつて第一回以來の軍事公債募集の成績を比較して見ると實に左の如くである。

應募金額 (單位萬克)	應募人員數				
	第一回 一九一四年九月	第二回 一九一五年三月	第三回 一九一五年九月	第四回 一九一六年三月	第五回 一九一六年十月五日/切
100—	三三三、二二二	四三三、二二二	九八四、三五六	二、四六六、二一八	一、七九四、〇八四
100—	二四一、〇〇〇	六六一、四七〇	八五八、三三九	九六七、九三九	六八、〇三七
100—	四三三、一四三	六六〇、七七六	九一八、五九三	八八五、九四一	六三、四四四
100—	四三三、一四三	四一八、八六一	五三〇、一七六	四六八、七三四	三〇、八六三
100—	一五七、五九一	三六一、四九九	四三三、六三六	三四七、七三三	二四三、八七三
100—	五六、四三六	一三〇、九〇三	一四七、五九三	二二、九二七	九三、一八七
100—	一九、三三三	四六、一〇五	五三、四四五	四、一五六	四〇、五七一
100—	一一、五六四	二六、四〇七	三三、八四〇	四〇、三六一	二八、五〇〇
100—	三、六二九	七、七四三	一〇、九二〇	九、一〇〇	九、七四八
100—	二、〇〇〇	四、六一一	七、〇七四	六、三〇八	七、八七〇
100—	一、〇〇〇	三、三三三	八、三三三	七、〇	一、〇〇〇
100—	二二〇	三三三	三三〇	三、二七九、六四五	三、八〇九、九七六
合計	一、一七七、三三三	二、六九一、〇六六	三、九六六、四一八	三、二七九、六四五	三、八〇九、九七六

同上金額表 單位百萬萬克

應募金額 (單位萬克)	同上金額表				
	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回
100—	二六	七	一三〇	三〇一	一五四
100—	一一一	二五五	五六九	七〇七	二九三
100—	五六七	七三三	八四四	七九七	三三三
100—	四三三	七三三	九二八	七九七	三三〇
100—	五七九	一三三四	一五六三	三三四	九二一
100—	四三三	一〇三七	一三〇一	九〇七	七六八
100—	三三七	七四三	八五六	六六六	六五二
100—	三〇〇	九三六	一、二六七	九八〇	九八二
100—	二〇〇	六四八	八五〇	七四〇	八二〇
100—	一三三	四四八	一、七六六	一、三二一	一、七二〇
100—	三六七	四四〇	六九三	六四二	八五三
100—	二六七	四四〇	六九三	六四二	八五三
100—	二六七	四四〇	六九三	六四二	八五三
100—	二六七	四四〇	六九三	六四二	八五三
100—	二六七	四四〇	六九三	六四二	八五三
100—	二六七	四四〇	六九三	六四二	八五三
100—	二六七	四四〇	六九三	六四二	八五三
合計	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

應募人員に就て云へば第一回より第四回に至るまで最少額應募高人員の數は漸次に著しく増加して居る、即ち二百麻克以下の應募者第一回には二十三萬人であるが、第二回には四十五萬、第三回には九十八萬、第四回には實に無慮二百四十萬人の多きに達して居る。第五回は著しく減じて百八十萬人となつて居るが、其れでも第四回を除いては前後五回中の最多數を示して居る。金額に於ても同様で此種の最少額應募者の應募總額第一回には三千六百萬麻克であつたのが、漸次七千百萬、一億三千萬、二億百萬となり、第五回には一億五千四百萬麻克となつて居る。即ち第四回を除いては第五回は最多額を示めて居るのである。

而して五百麻克に至るまでの應募は第五回は第四回に對して人員數は何れも減じて居て五萬百麻克以上は第五回の方が第四回に對して人員數が増して居る。應募金額に就て見れば二萬麻克迄は同じく第五回の方が第四回に對して減じて居る。其以上は第五回の方が殖えて居る。殊に最高額應募者の應募金額は十八億が二十四億五千萬許りとなつて

居るのである。

四

兎に角獨逸の下民が非常に困つて居るものならば、二百麻克以下と云ふ如き少額の應募者數が非常に減ず可きであるのに、第四回まで漸々増して來て、第五回と雖も第四回を除いては最多數を示して居ると云ふことは、不思議と云はねばならぬ。百七十九萬四千人と云ふ多數の國民が公債の募に應じ、全體に於て一億五千四百萬麻克と云ふ金額が此等下流社會からの應募高であると云ふ一事は、獨逸の下民が極端な窮狀に陥つて居らぬことを示すものと云はねばならぬ。無論其に就て強制的手段も行はれたらうし、非常に無理な事を敢てしたかも知れぬ、其は我々の知り能はざる所であるが、顯はれて居る事實は即ち右の通りである。

四面敵に包圍せられて非常な窮境に陥つて居る獨逸が其公債應募に於て此くの如き成績をあげて、第四回には五百三十萬人近く、第五回には三百八十萬人の國民が政府軍事

公債の募に應じたと云ふことは、其裏面の消息は別として、兎に角驚歎す可き現象で、英國流のロムバード・ストリート本位の金融財政論では到底解釋し能はざる一事實ではないか。

五

吾輩今茲に經濟原論を講釋する積を持つものでないから、貨幣價值の經濟觀の全體を評論することは敢てせぬが、戦時經濟の現象だけは少くとも此種の經濟觀を以て律することの出來ぬことを力説せんと欲するのである。平時に於ては生産せられ流通せられ(交換せられ、分配せられる)又た消費せられる富なるものは、貨幣價值の態を取つて顯はれて來るのが常態たるは勿論である。從て貨幣價值に就て窺知した所はやがて生産、流通、消費の實相と粗ぼ一致するものと見る可きである。コレとても精確に云ふときは決して中つて居らぬことは、ピグー氏が Wealth and welfare と云ふ大著述に於て近頃評論して居る通りである。我々の經濟生活は直接に貨幣價值となつて現はれざる多くの項目

によつて支配せらるゝ、否間接にも貨幣價值に關連せしめ能はざる多くの事項が重大な影響を有する。例へば純自足、又は半自足經濟を營んで居る農民を始め多數の人民の經濟生活の有様は、貨幣價值比較の上へ少しも現はれて來ぬのである。國全體として見ても英吉利の様に其最小農民迄が殆んど純流通生活に入つて居る國と、獨逸の如き又は我邦の如き農民其他に自足經濟を營むもの少からざる國とは、貨幣價值の上には現はれて來る面目が甚だ違ふ。英國の貿易高が何億、獨逸、日本の其が何億と云ふことは實は比較を超越する事實である、我邦たりとも農民が自足經濟を捨て、悉く流通經濟に入り込んで來れば、貿易高は著しく増進するに相違ないが、其は決して經濟生活の比例的上進を意味せぬ、國富の比例的増加を意味せぬのである。手近な例を以て説明して見れば我輩は年三百圓の俸給を以つて一家を經濟して居るが、我友のA氏は俸給は同じく一ヶ年三百圓だが親讓りの土地家屋があつて其處に住まひ、又た親讓りの家具什器が澤山あつて其等のものを買ふを要せぬ、吾輩は茶碗一つ箸一ぜんまでも一々三百圓の内から錢を拂

つて買はねばならぬとすると、我輩とA氏との経済状態は餘程差別があるものでA氏は樂に暮して行けるが、我輩の生活は中々苦しいと云ふ事があり得る。然るに貨幣価値の比較の上ではA氏も三百圓の所得者我輩も同じく三百圓の所得者であると云つた様な事と同一である。英獨の比較には此道理が其儘に當はまるのである。此の道理を無視してかゝる貨幣価値本位論では逆も獨逸の戦時経済状態の真相を窺ふことは出来ぬ。ロムバード・ストリート本位の経済論は戦時経済の大事實に對して落第したものと斷ずる外はない。英國人なら兎に角、我邦の識者にして此種の謬論に囚はれて居るのは實に笑止千萬な話ではないか。此頃少しく感ずる所あり、愚論を陳じて理財評論創刊を祝するの辭に代ふること爾り。

五 愚なる經濟戰論

—大正六年四月「新日本」掲載—

巴里經濟會議の決議は、我國に於ても大體に於て之を實行する方針を定めて、當局者に於て著々其施設に従事して居る趣きであるが、我國の大多數は之を是認して居るかの如くである、我輩は豫てより之に對して反對意見を有つてゐるものである。

此頃大藏省に於て戦時關係經濟財政書類の展覽會を開いて居る、是は同省の黒田參事官が洋行した際に苦心して蒐集せられたものであつて、非常に豊富な材料である。政府に於ても之を官府の間に私せずして、廣く公開して研究者の閱覽を許されると云ふことは甚だ公明親切な處置であるが、其展覽會に陳列されたものの中に、經濟戰に關係する書類が可なり澤山ある。其中に我輩は端なく我輩の舊師なるミュンヘン大學のブレン

タノ教授の一小冊子を見ることを得た、是は昨年の六月十五日先生が態々中立國なる瑞西のキューリツヒに赴いて、瑞西人に對して爲された一つの講話の草稿であるが、此講話が獨逸に於ては非常な反響を惹起して、其大要が瑞西の新聞に掲げられると共に、獨逸中の新聞と云ふ新聞は殆ど皆筆を揃へて先生の説を駁撃して居る。ブレンタノ先生の講演の題は「商業戰の狂愚」Der Wahnsinn der Handelsfeindseligkeit と云ふので、獨逸も亦聯合國側も、商業上に於て戰後にまで涉つて敵對行爲を繼續して行かうと考へて居るのは大なる誤りであると云ふことを極力痛論せられて居るので、而して戰爭の原因としても獨逸が近年極端なる保護政策を採つて、自國の門戸を閉鎖して他國の産物を取入れることを大に阻んだことが、此度の大戰爭を惹起した有力なる原因の一つであると云ふことを極力主張して居られる、恐らく斯の如き議論を主張するのは目下の獨逸に於ては先生一人であらう。色々な理由を以て獨逸側を辯護する者もある、又獨逸の方にも非のあることを認める獨逸の學者も可成あるけれども、保護政策を以て歐洲大戰の一原因

と爲す人はブレンタノ先生一人であらう。斯の如き議論が獨逸の有力なる學者の中にあると云ふことは、恐らく聯合國の方に於ては意外な感爲すことであらうと思はれる。ブレンタノ先生は元來自由貿易論者である。此度の戰爭の爲に從來の自由貿易論と云ふものは著しい變化を蒙つたことは吾々は認めざるを得ないが、先生は依然として其説を維持して居つて、殆ど舉國を敵としてまでも相變らず自由貿易論を主張して居られるのは、學問上の所信に忠なる實に驚くべきこと、言はなければならぬ。今獨逸に於て所謂中歐關稅同盟なる説が大に盛である。それは先生は其立場からして必ずしも反對しないが、其關稅同盟なるもの、存在の理由を非常に高い保護税を課する極端なる保護政策を採用することに依つてやらうと云ふのならば、是は更に又新しい戰爭を惹起する原因になる外はない。又聯合國側に於て所謂經濟戰と稱して獨逸に對抗する以上は少くとも獨逸に對しては禁止的の税を課するなり、或は高き關稅を課するやうになるであらうが、斯の如くして行けば世界の平和杯と云ふことは到底夢想することも出来なく、

戰爭に戰爭を重ねて止まる所を知らない。此度の戰爭は決して願はしい戰爭でないが、此戰爭の爲に戦後當分長く平和が維持せられるならば其代價として之を忍ぶとしても、此戰爭が却て更により大なる戰爭を起す原因となり、それが爲に經濟戰なるものを繼續して行くと云ふことになつては、人類文明の一大危機であるとして絶叫して居られる。我輩は必ずしも先生の説を其儘に今日に於ては採用するものではなくして、所謂自由貿易主義と云ふものは此度の戰爭の爲に鐵火の洗禮を受けたものであると信じて居る。少なくとも食料供給と云ふことに就ては自由貿易主義一點張では到底安全を期せられないと云ふことに至つては疑がないことと思つて居る。併ながら反對に所謂經濟戰なるものを戦後にまで繼續してやつて行かうと云ふ如きは是は事實として不可能のことであるが、此不可能の方法を強いてやらうとすれば、元來の目的は達することが甚だ少なくして、是が爲に惹起す所の餘弊の方が遙に多いことは疑ないと思ふ。戰時中に於て獨逸側を經濟上に苦しめるが爲に色々の設備をすると云ふことは、是は戰爭に伴ふ所の施

設であるから中には已むを得ないものもあるし、又有害無用のものもあるが、戦後にまでも亘つて兵戈の戦熄んで尙經濟上に於て經濟戰を繼續すべしと云ふことは人類の文明の一大危険と看做す外はない。又そんなことは事實出來得べき筈のものでない。

二

殊に我國の地位を考へて見ると、我國は將來主として支那を經濟上に誘掖指導すると云ふ大任を有つて居るのであつて、此支那誘掖の爲には歐羅巴、亞米利加の諸國の助力を何處迄も受けなければならぬ。其助力は今日の所謂聯合國だけに止まらずして、獨逸側と雖も之に寄與すべきものは決して拒むべき筈のものではない。然るに若し聯合國が鞏固なる同盟を造つて獨逸側に對抗して、聯合國だけを包圍する所の高き關稅の壁を築くとなれば支那は果して何れに入るべきか。今傳ふる所に依れば支那を聯合國に引入る運動が盛であるが、支那が果して聯合國側に加擔するか否かはまだ未定の問題であるが、支那の立場として言へば聯合國側に入ることは必ずしも國の利益とは考へられない。

支那が聯合國側に加擔すれば是は同じ聯合國に於て、申さば今の壁の中に共通することが出来るが、偕其聯合國の中には支那に對しては様々に異つたる利害を有つて居る國がある。我國と亞米利加と、英吉利と露亞西と決して同一の利害を有つて居ると云ふ譯でなく、時として此利害の一致が六ヶ敷いことが起るに相違ない。然る場合に於てどうして之を處理して行くか。却つて是が他日紛亂の基を築く虞がないとは言へない。況んや支那にして聯合國側に加擔しない場合に於ては獨塊も支那に來つて經濟上の施設をすることを拒むことは出来ない。さうすると支那は聯合國對獨塊の混戰場となつて、之を經濟上に於て誘掖指導すると云ふことは出来ないことになつて仕舞ふ。政治上に於ては飽迄も支那の獨立を尊重して、苟も其主權を妨げ傷けるやうな嫌のあるとは斷じてしないと云ふことが我國の國是であると言ふは信じてゐる。又我國が先になつて他の列強をして支那の主權に指を染めしめないように、支那の獨立を傷けないやうにさせる責任があつて、或は是が爲には我國は多少の犠牲を拂つてまでもやらなければならぬ道徳上の

義務を有つて居ること考へる。其反對に經濟上に於ては今日の儘の支那では到底獨力を以て開發して行くことは六ヶ敷い。幣制の整理、交通機關の設備、中央銀行の制度、關稅の制度、其他色々のことにて於て内國の經濟、行政に於て支那は大に日本の助力を受けなければならぬのである。我國が此助力を與へるに當つては歐羅巴の或一部分に與し、他の一部分を敵として世界の中に更に小さな世界を造つて、其一員となつて居ると云ふことは非常に我國の活動を妨げ、延いて支那に對する我國の助力の價値を減ずることになる外はないと思ふ。

此度の戰爭の爲に英吉利も經濟上、財政上に可なりの打撃を蒙つたとは雖も、戰爭以後に於て英吉利は相變らず世界の富國として、強國として進んで行くことは疑ない、亞米利加が益々進んで行くことも疑ない。斯の如く各國が進んで行く間に於て四億の人口を有する支那が何時迄も今日の狀態に於てあると云ふことは考ふべからざることである。支那自身が覺醒したからと云つて、其覺醒を現實すべき所の實力を未だ有つて居

ない、其實力を支那に與へなければならぬ。其與ふるものは世界の各國皆其持てる所の長所を以てしなければならぬのである。其等の長所を利用するに就て茲に組織を造り、茲に人才を植ゑると云ふことは主として日本の任でなければならぬ。此點から考へて見ても歐羅巴の現交戰國が敵國に對する所の一種の感情からして、戦後に涉つてまでも敵對關係を繼續して行くべしと云ふ主張が餘程の累を爲すことと考へなければならぬ。假りに主張としては宜いとしても、實際は中々主張通り行くものでない。感情の上にて世界を二分し、三分して仕舞つて、借其曉に於て之を改めやうと云つた所が是は甚だ困難なことである。今獨逸に於ては獨逸關稅同盟の議論が甚だ盛である、是は或程度迄の實行を見るかも知れないが、此獨逸關稅同盟論の中堅とも云ふべきものはナウマンと云ふ人の中歐論と云ふ書物である。ナウマンの趣意は世界に於ける小さな國は最早獨立の存在を爲すことが段々困難になつて来る。幾多の大きな國が起つて来る、彼は之を超國家と名けて居る。即ち第一に來るのは大英帝國である、次には亞米利加合衆國

である、次には露西亞である、而して第四として中歐國即ち獨逸奧太利を中心とした所の歐羅巴諸國、若し佛蘭西にして此中歐國に加入せんとなれば決して是は拒むべきでないといふと獨逸人なるナウマンは主張して居る。今の状態では無論是は問題にはならないけれども、併ながら何時迄も今日の敵對感情が繼續して居るものでないといふれば、他日或は佛蘭西が之に入り來るかも知れないと彼は言つて居るのである。而して第五に於て彼は日本、支那に於て更に一つの超國家が出來るか出來ないか、是は大なる疑問であると云つて居るが、吾々は之を疑問とせず必ず近き將來に於ける理想とす可きであると考へて居るのである。

其超國家なるものは決して今日の聯合國の同盟と云ふが如き排外的のものであつてはならぬと思ふ。聯合國が排外的のものであり得ない如くに、ナウマンの主張する所の中歐國と雖も、若しそれが眞に出來るものとすれば排外的なる關稅政策を以て唯中歐國だけて以て自足經濟を立てると云ふやうなことは到底出來ない。唯經濟上に於て共通の設

備を造つて、共同一致して互に經濟上の進歩を圖ると云ふことに歸すべきであらう。此意味に於て吾々は日本と支那が相合して關稅上に於ても、財政上に於ても、貿易上に於てもナウマンの所謂超國家、政治上に於ては各々獨立した國であるが、經濟上に於て密接なる聯絡のある所の一つの組合が出来得べき筈と考へて居る。併ながら排外的な、鎖國的な關稅政策を以てしたならば到底斯の如きものは出来ない。此點から見ても今日の意味に於ての經濟戰と云ふことを繼續して行かうと云ふ考は大なる妨げとなること、言はなければならぬ。

三

戰爭の爲に歐羅巴諸國は非常な打撃を受けた。戰後は之を恢復する爲に非常な努力を要することは言ふまでもないが、それには先財政上に於て軍備の負擔と云ふものをどうかして輕減する法を考へなければならぬ。然るに經濟戰を繼續して行けば其結果再び兵戈戰が起ることを十分覺悟しなければならぬ。即ち軍備は之を縮少するどころでない、

益々擴張して國防の爲に益々餘計な費用を使はなければならぬ。多額なる公債を負擔して、其元利の償還の爲に國民の負擔が非常に増加した上に持つて來て、更に軍備の負擔が増大すると云ふことは到底堪へ得られないことである。戰後如何にして講和が來り、講和の條件がどう云ふ風に定まるにしても、一度講和が成立した以上は出来るだけ長く世界の平和を維持して行く工夫が必要である。それには經濟戰と云ふ考は全然これを棄てなければならぬ。唯戰時中の一つの機宜の方法として一種の對敵行爲とするならば是は是認すべきものであるが、それにしても随分有害無用にして他日に禍を貽すやうなことがある。講和一度成立したならば夫等の一切の設備は之を一掃して仕舞ひ軍國主義的の設備を成るだけ減するやうにしなければならぬのである。殊に我國としては此趨勢に向つて大に力を添へなければならぬ。戰爭の爲に亞米利加なり我國なりは一時の利益を占めたと云ふけれども、此利益の反面には聯合諸國の非常なる犠牲負擔、又敵側の非常な苦痛と云ふものを伴つて居るものであつて、人類全體の上から差引いて非常

な損があつたのである。若しブレンタノ先生の説の如く獨逸の極端な保護政策が此戰爭の原因であるとするれば、所謂經濟戰なるものを繼續して行つたら更により大なる戰爭を挑發する憂のあることを認めなければならぬ。我輩はブレンタノ先生の如く獨逸の保護政策が直接に戰爭を挑發したとは考へない。併ながら獨逸の所謂軍國主義なるものは必ずしも兵備の上のみでない、必ずしも外交政策のみでなくして、經濟政策の上にも所謂軍國主義なるものが蔓つて居つたと云ふことは之を認めなければならぬ。是が爲に世界諸國の間に種々な面倒を惹起し、感情を悪くし、國と國との睨合ふことを鋭くしたことは認めざるを得ないのである。若し果して然りとするならば經濟戰と云ふ思想は出来るだけ早く勘定を付けて仕舞ふことに努力こそすべけれ、我國が進んで經濟戰をより鋭くすることには力を貸すなど、云ふことは甚だ間違つたこと、言はなければならぬのである。特に此論を以て『新日本』の求めに應ずるは、聊か考へた結果である。

六 英國的經濟思想の末路

——大正六年十一月『大日本』掲載——

一 貨幣本位の英國の苦痛

歐洲の經濟は之を約言すれば、戰爭前迄は總て金の經濟を主とし、物の經濟は總て之に附隨して居るに過ぎなかつた。金の經濟は即ち商品生産の經濟である、總ての商品が金に換へて賣買せられる、故に商品を生産することが富國の要諦なりと信ぜられた。國家としても成るべく多くの商品を製造して外國に賣ることが利益であるとせられ、國際關係も亦各自國の販路擴張の爲めには、武力に訴ふることを敢て辭せなかつたのである。植民政策といふ事も亦此意味より言へば販路擴張の方法手段に外ならなかつた。何故に此く金の經濟が歐洲を支配することになつたかと言へば、それは要するに人間の勞働が悉く金に換へて賣買せらるゝからである、昔は人間の勞働を金錢に見積ることが出

來なかつた、然るに今日はその尊き働きを金に換へることが容易である。歐洲の經濟に於ては如何なる働きと雖も之を金錢に見積り金に換へて賣買するのである。即ち勞働者は一日、一週、一箇月間等の賃金を得て勞働を資本家に賣り、資本家は此買ひたる勞働を以て商品を製造し之を賣つて多大なる利益を得つゝあるのである。故に今日迄の商品生産時代は即ち貨幣經濟時代であつて、金の經濟の極致に達して居つた。

然るに歐洲戰爭の經驗は、斯の如き金の經濟は危険極まるものなることを教へた。英國が今日二進も三進も致し兼ねて居るのは、金の經濟のみを恃んで居たからである。之に反し獨逸が依然として奮闘を續けて居るのは、金の經濟一方のみならず物の經濟にも亦力を入れて居たからである。戰爭は金の經濟の機關を停止して仕舞つた。英國が今日兌換制度を停止せざるは唯體裁上の話であつて、其實は大に制限を加へ、曾て世界に誇れる金の自由市場なるものは最早英國に於て之を見る事が出来ない。國際的に既に其意味を喪つて居る。然るに一方軍需品なり食料なり原料なりは外國から購求せなければ

ならぬ。英國は平和時代に於て莫大なる金を世界に貸して居るが、彼の希臘神話のミダスの神が一度び金槌を揮ふ所、周圍の物を悉く黄金と化せしめたけれども、遂には衣る物もなく食ふ物もなく、黄金の裡に斃死したと云ふ話と同様、金を以て鐵と化し食料と化することが出来ず、富める國にてありながら、物資の大不足を感じ、食料品は大缺乏を告げ、著るしい危険状態に陥つて居る。

二 改造せられたる經濟の原則

今日迄の經濟學は主として英國の學問であつた。獨逸佛蘭西と言つても要するに附けたりで、十八世紀に於けるアダム・スミスの經濟學建設以來、他の學問と違つて英國の斯學が覇を稱し、從つて經濟上の原則は悉く英國を本位として來たのである。獨逸の經濟學勃興以來、商業政策の上に於ては英國流の自由貿易を駁する論者も出て來たのであるが、それでも原理原則は依然渝らず、即ち金の經濟を本位として見て居つた。然るに此度の戰爭は根本的に經濟の原理原則を改造せしむるものである。改造の點は必ずしも金

の經濟を全然捨てることでは無いが、之と共に物の經濟及人の經濟を進めて對等の地位に立たしめることで近著『國民經濟講話』に於ても之を力説した次第である。英國は元來自由民權の國と誇つて居るが、金の爲めには人の經濟を無視し、労働者には賃金を與ふればそれで宜しいとして居る。社會政策があつても雇傭契約を本としてそれ以外の問題は總て當人共の責任であるとして居る、此等は實に大間違の政策である。平時に労働者を涵養する一作用は之を戰時に強大なる軍隊と化せしむるに在るのである。國民兵制の目的はたゞ訓練のみにて達することが出来ない、戰時に強き兵士は必ずや平時に於て人間たる生活の充實せる者である。日本の軍隊や獨逸の軍隊が強いといふことは、人間としての總ての働きを金の上に換へないといふ點に在る。然るに英國に於ては兵役を以て金に換へる奉仕なりとの思想に支配せられて居る。募兵の状態を見れば一目瞭然である、給金が少なければ決して兵士とならない。どうで金で賣つた労働であるから、賣つた高以外には決して使用しない。彼等は唯だ身體の働きを賣つたのみであつて、命や魂ま

でも賣つたのではない。是れ金の經濟を本位として人を無視する著るしき點であつて、今日如何に英兵が戦つても獨軍に勝てる氣遣ひは無いのである。世人は日本や獨逸を軍國主義など、言つて惡し様に論ずるが、成る程軍國主義も惡しき點のみを拾つて來れば限りもあるまい、けれども軍國主義が少くとも人間の働きを金錢化して仕舞はないことは、卑近なる英國思想に比して遙かに人類の理想に近いと言はねばならぬ。日本人は聯合國の尻馬に乗つて軍國主義の打破などを唱へる必要は少しも無い。金の經濟を本位とせる英國は、金さへかければ何にても買へる、世界は實に英國の爲めに生産するものなりと思つて居たが、今日は左様は行かないのである。今日迄の世界が英國に都合よく出來て居たといふのも、畢竟過去に於て英國が世界に於て有らゆる侵略掠奪を爲し、之を自己の權力の下に置いたからである。ロムバード・ストリートの繁榮は過去に於ける英國の一種の軍國主義の賜である。英國は自國の爲めに都合が悪ければ權力を集中して他國に壓迫を加ふることを常套手段とし、曩に希臘を經濟上壓迫して聯合國に加はらしめ、

又葡萄牙をして獨立國か何か分らぬ位に英國の爲めに盡力せしめて居る。彼のメチウエ
ン條約の主義は決して過去の事實に非ずして現在英國の採用せる事實である。メチウエ
ン條約主義とは商業政策の上に於て、強國が弱國を全然自己の利益の爲めに働く様に、
貿易政策上の手段を以て壓迫することを指すのである。英國は今日迄一方に自由民權を
標榜しつゝ他方には盛んにメチウエ主義を應用し、金さへ出せば何にても得られるの
であるが、之は英國の地位に在りてこそ始めて出來た藝當で、未だ遽に他國の追隨を許さ
ざる所である。然るに今や此の如き英國の特權は漸次破壊せられ、金の經濟に於て全然
行詰つて來たのである。是れ實に經濟の原則に一大變化を來たしつゝある所以である。

三 英國食料問題の危機

獨逸が現に潜水艇戰を續行しつゝあるに對し、英國が食料問題に如何に困難を感じつ
つあるかを研究するも亦今日の急務である。世間では獨逸の潜水艇戰を目して單なる紙
上封鎖に過ぎずと做し、之を輕視せる傾きもあるけれども是れ大なる誤りである。今日

日本にて英國を解釋するよりも、ヨリ以上に英國に於ては自國を悲觀しつゝある。其證
據には近來エコノミストとか、ステーチストとかの經濟雜誌が悉く悲觀的論説を掲
げ、無智なる軍人と喋べる外能なき淺見政治家とに國を任せたる結果今日の苦境に陥れる
ものなることを毎號繰返して論じて居るに徴しても明かである。獨逸潜水艇戰は實に英
國民をして自國の眞地位を了解せしめたが、特に彼等に覺醒を與へたものは食料問題で
ある。而して此形勢の儘引續いて推移したならば、戰爭以來騰貴せる物價は益々昂騰し
て遂に行詰りの状態に達するであらう。今英國の物資を食料品原料品の二に大別するな
らば、原料品は食料品程には騰貴して居らない。而して食料品中最も騰貴せるは植物性
食料である。今試みに開戦前なる一九一四年六月三十日と、最近の調査たる一九一七年
八月三十一日との物價指數(サウエルベック式)を比較すると、物價の總指數は平均一
六・五%騰貴せるが、食料品の騰貴は平均數以上なる一二・三%に上り、原料品は平均
數以下なる一一・七%に上つて居る。而して此等の騰貴せる食料品を植物性(穀物、野

菜)動物性(肉類、乳、バター、チーズ等)其他の食料(砂糖、コーヒ、茶等)に三別し、開戦前と昨年十二月三十一日現在との騰貴率を見ると實に左の如くである。

植物性食料	一六〇・三%
動物性食料	七二・六%
其他の食料	八三・四%

今年に至りては更に騰貴し、植物性食料に至りて特に甚だしい(英人と雖も主食物は穀物野菜であつて、中流以上の者は肉食をするが大多数の下流民は矢張麵麩を澤山食つて居るのである)。之を見ても英國が今日如何に食料缺乏に困難しつゝあるかを知ることが出来る。而して其原因が船腹不足し運賃暴騰せるに在ることは毫も疑無き所である。

更に運賃の暴騰に關する數字を擧げんに、一九一三年より昨年に至る四箇年平均運賃は左の如くである。

米國大西洋岸より英國への穀物一噸運賃	一九一三年 七・一〇	一九一四年 三三・一〇	一九一五年 七九・〇〇	一九一六年 七四・〇六
同上 棉花	三〇・〇〇	九〇・〇〇	二六二・〇六	二六〇・〇〇
南米より英國への總運賃	一一・〇〇	四五・〇〇	一一〇・〇〇	一四五・〇〇
印度より同上	一八・〇〇	二二・〇〇	一一一・〇三	二三〇・〇〇
一箇年平均	一六・一一	四七・〇八	一一八・〇二	一七七・〇四

英國民の一般が物價騰貴に困難しつゝあることは言ふ迄も無いが、殊に運賃の膨脹の爲めに物の價格の騰貴せしことが其一大原因になつて居る。労働者は生活品騰貴と共に賃錢も亦増加するから一概に困難を感じて居るとは言はれないが、定額收入者は困る一方である。國全體から言つても食料品が平均以上に著しく騰貴せることは、確に其缺乏を意味して居るのである。而して此の如く食料缺乏は獨逸潜水艇戰の結果にのみ歸する譯には行くまいが、併しながら之が爲めに船腹不足し航海危険なるに由ることは勿論である。英國の政治家軍人は、決して英國の食料缺乏に困れるものに非ざることを屢々保證して居るのであるが、其屢々の辯明こそ英國民の憂が一層強く食料問題に在るこ

とを證明するものではあるまいか。所謂火の無き處に煙は揚らず。英國が今日の盡經過したならば其困難は戦争の敗北よりも一層痛切なるものがあるであらう。故に英國としては何とかして早く戦争の結末を付けねばならぬ譯で、此點より言へば米國の参戦は英國の歓迎する所であり、日本にも亦更に仲間に深入させ度いに相違無いのである。

四 米國禁輸と日本の對策

以上我輩は英國に就て英國的經濟思想の誤謬なることを指摘したのであるが、更に之を我日本の上に當て箴めて考察するならば最近米國の禁輸問題がある。初め米國が鐵材の輸出禁止を實行するや、我國に於ては之に對して幾多の樂觀說も行はれたのであるが、我輩一斷じて駄目であると思つた。若し此禁輸を解かんと欲せば、解禁より以上の大なる損害を忍び犠牲を拂はねばならぬことを信じたのである。到底外交談判などで追付く話ではない。何となれば米國が鐵を禁止し金を禁止したといふことは、決して此等の物資が國內に不足して居るからでは無い。實は米國が我儘の沙汰であつて、自己の利益の

爲めに之を斷行したのである。金も盛に流入するし鐵も餘る程持つて居つて、英國の禁輸とは其性質を異にして居る。而して日本の要求は其極めて一部分である。然るを突飛好きなる米國が禁輸したといふことは、確かに日本との衝突位は辭せずとの意氣込を以て懸つて居るのである。故に日本に於ても米國をして解禁せしめんが爲めには、米國と兵火相見ゆるの覺悟を以て懸らねば到底困難である。けれども幾ら何でも鐵と金との爲めに戦争をすることは出来ないとしたならば、我々は今日に於て自給策を考へねばならぬ。即ち自給策とは米國の呉れない物の自給を工夫することである。又米國へ商品を出しても、先方から輸入があれば兎に角、左に非ざる限りは代金を受取ることが出来なから勢ひ貿易は一方に傾かざるを得ない。故に此際出來得るならば、買はないと共に賣らないといふ二様の覺悟を要するのである。

先づ米國より買はないで濟す様にせねばならぬのは鐵である。日本の方法としては自國の有らゆる鐵山(朝鮮滿州共)を開發すると共に、之れ丈けでは到底見込が立たぬから、

南支那に在る鐵鑛に對し其經營を集中することに努力せねばならぬ。之は日本の存立上已むを得ざることで、即ち自衛上必要なる大問題である。決して侵略的意義を有せず、政治上の占領に非ざることを明かにし、日支兩國經濟的提携の意味に於て鐵材を供給して呉れる様にせねばならぬ。之に對して我より相當の代價を拂はざる可からざるは勿論である。金は工業材として入用ではあるが無くても我慢の出来る品である、吾人の生活には大して必要でなく言はば贅澤品である、醫療用に之を要するならば、在來の物を鑄潰しても濟む譯である。元來我國に金の必要なるは本位制度を維持せんが爲めである。けれども之は現に大藏省令として金の輸出禁止、鑄潰禁止となつて居る、外國よりの輸入が無くとも根本的に其基礎を危くせしむるものではない。鐵とは譯が違ふのである。一方に於ては賣る方を賣らないで濟ますとが必要である。生絲、茶、羽二重此等は或は米國より輸入禁止さるゝかも知れない。代價に決濟の道無くば貿易は自ら制限せられる。元來輸出は決して輸出そのものが吾人の目的ではない、輸入したいから出すのであ

る。絹布などは米國人に着せるより日本人が着た方が宜いのである。自國に産する物を用ゐてはならぬといふ理由は無い。一體輸出奨勵といふ事は、我輩がよく比喩することであるが、自家にて造つた旨い饅頭を自分の小供等には少しも食はせないで他人に與へるが如きものである。成る程米國への輸出が止まつたならば生絲の價格は下落するであらう。けれども法外の價格は有り様が無いのであつて、國民の消費に應ずる價格は必ずや維持するに相違ない。故に生絲業が全然廢滅して仕舞ふが如きことは斷じて無い、徳川幕府の鎖國時代に在りても絹工業は存在して居つたのである。生絲商人から言へば憂ふべきことであるかも知れないけれども、日本國家全體から言へば決して切迫したる問題では無いのである。我國民は獨逸國民が三年間の惡戰苦闘に堪へて來たことを思つたならば、セメテ獨逸の半分丈の辛い思をして何でもあるまい。鐵といひ、金といひ、生絲といひ、其他何の禁輸にしても、周章狼狽有らゆる手段を盡し、多大なる犠牲を拂つて哀求懇願至らざる無さが如きは決して國家の體面を維持する所以では無い。又實際の

利益上から言つても愚の極致である。我輩は固より米國の解禁を希望するも、我より拂ふ代價は相當のものなることを要求する。鐵の輸出禁止を解いて貰はんが爲めに、我船を大西洋に廻航し、聯合軍の軍用に供せんとするが如きことあらば、其代價は餘りに大なりと謂はなければならぬ。若し夫れ路傍傳ふる所の風説たる、我軍の歐洲出兵を餘義なくせしむるが如きことあらんには、是れ血を以て鐵に換ふる所以であつて、此の如き鐵血交換の商賣は我輩の斷じて反對を表明する所である。經濟上の利害は一國として固より重大には相違ないが、必ずしも一國最高の利害では無い。吾人は經濟上の利害よりも、國民の精神的獨立を以て遙かに貴重なるものと信じて疑はない。世に若し國民の精神的獨立を無視し、國民の血を以て鐵に換ゆることが方今の急務であるかの如く論ずる輩あらば、そは要するに日本も亦英國の素町人根性に墮落しつゝあるものと斷言せざるを得ない、而して其根性の爲めに如何に英國が困難しつゝあるかの實物教訓を忘却する者である。

七 戦後の世界と姉崎博士

—大正六年十一月明治大學雄辯會講演同十二月六日改記同七年二月「雄辯」掲載—

姉崎文學博士は、過般高商學生大會の折、戦後の世界と題し試みられたる講演を、更らに一文に綴りて中央公論に寄せ、又た雄辯誌上にも猶ほ同意味の一文を掲げしめられた。戦後の世界が如何なるかのみに没頭して、戦後の世界を如何するかの經綸を等閑に附するの意氣地なきことたるに付ては、予輩は全く博士の高論に同感であつて、世上餘り此事に心を留むる人のなき折柄、博士が猛然と起つて痛論せられたことを甚だ多とし、博士の思調の高きに轉た欽仰の念を惹起さずして已む能はざるものである。然るに博士が其結論を説明せらるゝに用ゐられた例證や論程には、承服し能はざるものが多々ある。其中でも、十七世紀以降軍國主義的思想と人道的思想と並び存して今日に及んだが、其創設者は一はホップスで、一はグローシアスであると云はれたのは、政治學史なり哲學

史なりの上から云へば、全然事實を誤り傳へるものと確信する。假りに一步を譲つて、博士主張の如くホッブスが悪魔的軍國主義的論者の巨擘でありとするならば、博士が大に歎美せらるゝ英國は、悪魔の國軍國主義の國と云はねばならぬ。何となれば、英國今日の政治思想經濟思想法律思想を今に至つて大體上支配して居るものはペンタムであることは、誰も許す處であるが、ペンタムは實にホッブスの政治法律哲學思想を根據として居るものである。即ち英國は今日に於ても、ホッブスの説の影響を受けて居るのである。ホッブスは實に英人で、思想の上に於ては生粹の英人、殊に十七世紀英國思想の代表者であるのである。其反對に、博士が人道主義の開祖と看做さるゝグローシアスは、當時英國の最大敵國であつた和蘭の人である。而してグローシアスの國際法上の處女作とも云ふ可く其傑作の一たる『海の自由』は、當時に在つては西班牙の海權獨占到抗議すると共に、後世に於ける影響の上に於ては英國の海賊行爲に對する抗議として有力なものである。而してグローシアスの唱導した『海の自由』主義に、今日迄毎時も妨害を加

へ來り、海上に於ける私有財産の神聖を認めざらんとしつゝあつたは、實に博士が正義人道の國と歎美せらるゝ英國であることは、盲目的拜英論者ならざるものゝ一様に認むる所、否英人すらも公平な學者は之を認めて居るのである。英人の謠ふ歌に、

You count the What, and not the Now!

If I have ever navigated,

War, Trade and Piracy, I now

Are three in one, and can't be separated.

とある。實に英國は戦争と貿易と海賊とを三位一體の神として仕へ來つたのである。

ベッキーは、ウトレヒトの平和(一七一三年)以降、奴隸貿易が英國政策の中心目的なりと云へ明言して居るではないか(英國史)。シーリーも亦云ふ、

To England the war is throughout an industry, a way to wealth, the most thriving business, the most profitable investment.

「英國に取つては、戦争は徹頭徹尾一の産業である、富を得る一の道である、最も繁昌する商賣である、最も利益多き投資である。」

だからカントが、英人は個人としては愛す可きも、國としては「諸國中最も侵略的にして挑戰的の國」なりと云つて居るのは、誣ひた言でないのである。グリーンも云ふ The horrors and iniquity of the slave-trade, the ruin and degradation of Africa, which it brought about, the oppression of the negro himself, had till now moved no pity among Englishmen (「奴隷貿易の惨害と罪惡之が爲めに來れる亞弗利加の衰頹と墮落、黒奴の壓迫等は今日に至るまで英國人の間に何等憐愍の情を惹起さしめたることなし」と。さればグローシアスの唱へた國際道德の教に最も背いたものは、實に英國であつたと斷言せざるを得ぬのである。姉崎博士は、政治學史の罪人たるのみならず、實に政治史、外交史、商業史、植民史、奴隷貿易史を全然無視するものではないか。

而して博士は、戦後の世界を如何するかを経綸に就ては、米國のウキルソン大統領の宣告に追従す可しと様に云はるゝが、是れ實に空想の甚しいものである。ウキルソンの宣言は美しいと云ふが、其中に許す可からざる暴言がある。即ち獨逸の國民をして其主權者に反逆せしめるのが參戰の大目的であると云ふ一事是れである。此くの如きは、日本の國是と絶對的に容れぬ。日本は他國の政體變更朝憲紛亂を目的として、獨逸に宣戰したのではない。我々は己れの欲せざる所を人に施さず。若しウキルソンが同一の事を日本に迫つたら如何。我々日本人は一人の取除なく、ウキルソンを憎むに相違ない。否、ウキルソンは民主主義の名の下に大なるオートクラシーを行ひつゝあるものである。近くはコロムビア大學のカッテル及ダナ兩教授が平和論を唱へた爲めに、職を追はれた如き、我日本の大學に同一の事が起つたら、姉崎博士の如きは、必ず極力之に抗議せらるゝことと思ふ。否、然らざる可からざる事である。ペリアド教授は米國參戰の熱心なる主張者である。然れども大學教授の言論の壓迫を不都合なりとして、去十月九日限り、コロムビア大學政治學教授の職を抛つた。其辭表を讀みて、我等は實に壓迫せ

れたる未見の僚友に對して、深甚の同情を禁じ能はぬものである。米國はウキルソンの下に於て、其大學教授の言論の自由をすら奪ふほどに、今や金權的軍國主義の深みに陥つて居るのである。其ウキルソンの宣言を取つて、日本の國是とせよとは驚く可き謬想である。日本には日本の國是がある。日本の參戰には日本の理由がある。我々日本人は外國の大統領の教を待たずとも、自ら就く可き道を知つて居る。誤れる政治學史より出立せる博士は、現下の政治事情に就ても、亦全く誤つた觀察に陥つて居る。猶ほ博士の駁撃を待つて、吾輩は別にグローシアス及ホツプスの學說に就て博士説の誤れるとを一々に立證し、又た英國は十七世紀以來、決して正義人道の國でなかつたこと、米國の現在には口に自由と道徳とを唱へつゝあるも、實は最も憎む可き金權政治、而して金權的軍國主義の彌々勢力を得つゝある國たることを一々に論述したいと思ふ。戦後の世界を如何するかの理想の必要なるは博士説の如し。然し其理想は單なる空想ではいけない、現實の上に立脚するものでなければならぬ。而して日本は日本自らの理想を有す可きである。

外國の大統領、而も僅小の鐵を與ふるに對し、無法千萬なる船腹の供給を要求する如き者の空言に隨喜の涙を流すなどは、却つて國を危ふするものである。日本は現實の上に立脚せねばならぬ。日本は日本として世界を左右する覺悟を有たねばならぬ。念佛を唱へるもの必ずしも皆佛ではない。否鬼でも時としては空念佛を唱へることがある。我等は鬼の念佛に渴仰する底の迂愚に陥つてはならぬ。果して誤れりや否や謹んで教を待つ。博士願はくば本郷臺の高處より降り下り、端的に過般の論旨を以て、予が誤謬を極撃せられよ、至囑。

八 ホツプスとグローシアスとを論じて

姉崎博士の空想的世界觀を排す

— 大正七年二月十日按訂談話筆記同三月「中外」掲載 —

一 事實の觀察より出發す

ヨーロッパの大戦は、我々日本人にも幾多の考ふべき問題を與へた。現に聯合與國の指導者が戦争の目的に關して、公言しつゝある所に對して、我國が果して如何なる態度を採るべきかは、日本人の前に置かれたる大問題である。然るに帝國議會に於いて尾崎行雄氏が之れを質問したるに拘らず、政府は遂に、之れに對して何等明白なる答辯を與へない。此の問題を政治上の議論としたのは、法學博士高橋作衛氏である。氏は前議會、貴族院に於いて、大要次ぎの如き質問を發した。

「ヨーロッパでは、此の戦争は、オートクラシーに對するデモクラシーの戦争であると言つて居るが、我が政府も亦此の趣旨を認むるか」

之れに對する寺内首相の答辯は、不得要領の甚だしいものであつた。當時は是れ以上追究されずに終つたが、有識者は疑を強めた。今回の尾崎氏の質問は、政治上の意味を離れても重要なものである。我々が何の爲めに戦争し、何を目的とするかに關して、

明確な思想が缺けて居る。此の點に關しては「新しい意味のデモクラシー」及び「何の爲に戦ふ」の二文に論じて置いたから、此所では略して置くが、我輩は、オートクラシー侵略主義、武力主義を全然斥けるものであつて、本論も又た其出立點からするものである事を讀者に記憶して置いて貰ひ度いからである。

我輩が流行の空想的世界観を排するは、決して武力主義を謳歌する所以でもなければ、オートクラシーを謳歌する所以でもない。然し乍ら、オートクラシーと云ひ、デモクラシーと云ふも、議論のみの問題ではない。名は美であつても、其の實の具はらないものは、斥けなければならぬ。デモクラシーが世界の大勢である事は疑ひがないが、此の戦争で、直ちに世界が悉く民主化せられるなど、云ふ事は、到底考ふべからざる事である。

又、オートクラシー、軍國主義として斥けられる所も其の内容を詳査すれば、必ずしも然らざるものが、幾らもあると思ふ。此の意味に於いて、現實に實際の事實の觀察を出發點として論を進めなければならぬ、唯名目形式に拘泥した空論は、全然之を一擲せ

ねばならぬ、是れが我輩の根本的出立點である。

二 此の立場より挑戦す

近來、戦争に關聯して、特に戦後の世界観に就いて、有識者から、種々の意見が發表せられた。中に就いて、吉野作造博士と姉崎正治博士との一二の論文は、尤も注目すべきものであると考へる。吉野博士の所説に對しては、随分批評もある様であるが、専門以外の我輩が、別に批評する必要が無いと考へるから、此所では、専ら姉崎博士の議論に就いて考察する。

姉崎博士の議論は吉野博士のそれとは異り、具體的な問題には觸れて居ない。其代りに哲學的、文學的立場から深く考へたものであつて、其の正否は別として、大いに注意を要する議論であると信ずる。然るに、此の重要な意義のある議論中、甚だしい誤謬と見るべき思想が存して居るが、ひとり姉崎博士のみならず、他にそれと同様の事を考ふるものも少なからず見受けられる。故に博士一人のみならず、博士によつて代表せらる

一派の學者識者に對して、我輩の立場から、敢て戦を挑むのである。併し單純なる解釋相違などの問題ではないから我輩は一切言葉答めを避けて敢てしない。従つて、言葉答めの批評にも答辯はしない。我輩が誤謬であるとするのは、單なる言ひ現はし、言ひ廻はしに關する事ではない。抑も姉崎博士一派の物の見方が空想的である事を指摘して之を排斥したいと思ふのである。

我々は、從來、國際關係に就いて、空想に支配せられて來た。今度の戦争に際して、我邦の識者は過去の長い空想を排して、現實的に目覺めて來た筈であるに拘らず、なほ尠からず空想が存して居るのは憂ふべき事であると深く信じて居る。是れ我輩が「大日本」一月號 後段を「雄辯」二月號 前段を 等に此問題に就て論じたのを以て足れりとせず、更らに論歩を進めて、多少學問的に此事を茲に論ずる次第である。

三 現代政治哲學の支配者

姉崎博士の議論中主要なるものは、「中央公論」大正六年十一月號所載「戦後の世界がど

うなるか、をどうするか」であつて、「雄辯」其他の雑誌にも同様の趣旨を繰り返したものが掲載されて居るが、我輩は、主として、右の「戦後の世界がどうなるか、をどうするか」に就いて評論して見る。

博士曰く「現代の世界を以て單に競争の世の中と見、而して今後も亦さうだと考へる人は、今世界の大勢を支配して居る西洋文明が常に十九世紀の如き競争のみで進んで来たのかと考へて見るべきである。十九世紀は、商工業の國際競争、又資本と労働との衝突を主題として来たが、その前の十八世紀には、人類天賦の權利を高潮した理性主義を實行した時代もあつた。文明は常に變轉し又は發達する。十九世紀の競争時代の行き詰りが、今の戦争に破裂したのを見て、二十世紀の文明が、必ず十九世紀と同軌道を走ると考へるのは、人間の思想と文明とは運動のある事を無視した考である」と。博士はまた曰く「十七世紀の三十年戦争は、ヨーロッパ大陸を焦土にした。數百の諸侯が入り亂れて戦ひ、戦つた結局は、大體佛蘭西文明が世を支配するに至つた。然し國勢の消

長といふ事よりも、——今日から顧みて重大事であつたのは、三十年の戦亂に、或は驚き、或は悲み、或は又深く考へた思想界に、二大勢力の出た事である。即ち一は「人間と人間とはやはり狼と狼」とだ」Homo homini lupusだといふ暴力謳歌と、一は戦闘殺戮の慘に拘らず、人道には義もあり理もあるといふ思想と、此二つ、一はホッパスが之を代表し、一はグロチウスが之を代表した。ホッパスの思想は、十九世紀になつて、ダウキンの進化説を誤解し曲解した勢力本位の帝國主義となり、グロチウスの正義は、その後の戦亂毎に、主義と條規とを充實して、正義尊重の流となつて、今日に及んだ」と。

我輩の先づ十分に評論したいのは、此の點である。博士は十七世紀の、即ち三十年戦争以降、狼の如く咬み合ふ事を以て人生と見ると云ふホッパスの思想と、戦闘殺戮の慘に拘らず、人道には義もあり、理もあると云ふグローシアスの思想の二つが世界を支配して來たと云はれる。博士は此の論文を發表する前、高商學生大會の講演に於いても、

ホッブスを惡魔的思想の代表者と云ひ、グローシアスを天使的思想の代表者と云はれた。吾輩は其講演を拜聴して博士の暴論に一驚を喫したのである。

成程、歐羅巴の政治思想界に、ホッブスとグローシアスとが對抗し來りしは、事實である。併し、十七世紀から今日まで、兩者が同じ勢力を以て對抗して來たとするのは、誤りである。表面的に對抗したのは、十七世紀當時に止まり、其後のホッブスとグローシアスとは、方面違ひになつて居る。其の舞臺は同一ではない。然るに姉崎博士は、同一舞臺にあるかの如くに二人を對立せしめた。是れが、姉崎博士の間違ひの一つである。蓋し、グローシアスは、國際法では泰斗であるが、其の政治哲學は寧ろ淺薄であつて、ホッブスが歐洲の政治思想を支配した意味で、政治思想を支配したものでは、決してない。ホッブスは哲學者として知られて居るが、殊に彼の政治哲學は、今日大いに勢力を得て居る。今日の如何なる政治哲學も彼の影響を脱し得ない。故に、姉崎博士の言ふが如く、ホッブスの思想が惡魔的であり、其の政治哲學が「人間と人間とはやはり狼」と

「狼だ」と云ふ暴力謳歌であるとすれば、歐洲今日の政治哲學は、惡魔、狼の政治哲學によつて支配せられて居ると言はなければならぬ。否、姉崎博士が、正義と人道の理想が行はれたと云ふ十八世紀は、十七世紀にもまさりてホッブスの影響を受けて居る。其大思想家はカントを始め深くホッブスに學んで居る。博士の言はれた様にグローシアスの勝利ではなくして、寧ろホッブスの勝利である。是れは具體的事實であつて、我輩一個の解釋ではない。

今日、英國の政治思想の根帯を爲すもの、英國の法理哲學を支配するもの、英國の學問中の學問と言はれて居る經濟學の基礎となつて居るものは、「ユリタリタリアニズム」(功利主義)である。「ユリタリタリアニズム」に對する解釋は、時代に從つて異つて來たが、近來ラシユダール(Rushdall, Theory of good and evil)の採る所の説の如きも、其の根帯は「ユリタリタリアニズム」である。此の「ユリタリタリアニズム」が、米國に入つて近年流行した「ブラグマチズム」の根帯の一を形づくつた事も亦疑ひがない。英國の實際

哲学、倫理學より始めて社會學、法律學、經濟學に至るまで、なほ「ユートリアニズム」の影響を受けて居る事は、明々白々の事實である。

扱て「ユートリアニズム」は何人が唱へ出したものであるかと云ふに、それがペンタムである事は、人の知る所である。ペンタムは、其の著書中に於いて、ホッブスを攻撃することに努めて居るが、安んぞ知らん、其の思想は、其の攻撃して止まなかつたホッブスより來て居るのである。ホッブスは實にペンタムの思想上の父である。是れは我輩の私言ではない。多くの學者の言ふところである。獨逸の學者の説は、姉崎博士が軍國主義國家の學者として斥けられるかも知れないから、特に英米學者の所説のみを引用する。

ベルファスト大學教授ウィリアム・グラハムは其の「ホッブスよりメーソンに至る英國政治哲學」(一千九百十四年第四版)に於いて、「ホッブス以後の英國の道德及び政治に関する學説及び思想にして、直接にホッブスの影響を受くるか、又は、其の説の重なるもの

に於いてホッブスによつて先立たれないものは一人もないと言つてよろしい。カライールの君主論、パークの政治論は殆んど其の全部をホッブスに見出す事が出来る。蓋し、ホッブスの著書は、道德及び政治上の知識の寶庫であつて、有力なる識者は、其の思想を彼に負ふ事を公言する事を厭ひ、彼を攻撃する事に力を盡したに拘らず、其の實際に於いては、其の思想を彼に負ふこと最も多いのである。殊にペンタムに至つては、其の最善の思想は、是れをホッブスより得來つて居るにも拘らず、彼は、ホッブスを引用する時には必ず之れを攻撃する爲にして、ホッブスに負ふ所ある旨は之れを公言せず。ひとりオースチンのみは極めて公平であつて、ホッブスに負ふ所多き旨を公言して居ると言つて居る。

次に、米國學者の例を擧ぐれば、コロムビア大學歴史及び政治哲學教授ダニングは其の著「ルイテルよりモンテスキューに至る政治學說史」(一千九百十三年ニュー・ヨーク出版)第三百三頁に於いて、「ホッブスは、本國たる英國に於いては、十九世紀に至るまで

は、寧ろ閑却せられて居つた。十九世紀に至つて、論理的思想家は、彼の唱へた所の原則は、専制君主政治にも當てはまると共に、專制的議會(Absolute Parliament)の目的にも全然當てはまるものである事を見出すに至つて、英國に於いても、認識せらるゝに至つた。之れに反して、大陸に於いては、ホッブスの大傑作「レヴィアサン」現はれて以來、絶えず政治上の學問に於いて卓越したる地位を有し來たつた。嘗に合理派の學者のみならず、カトリック神學者さへも、深くホッブスの研究法に依頼して居つた。固よりグロースアスも亦多くの刺戟の源ではあつた、併し乍ら、自然法なるもの、範圍が、其の後の哲學者の研究によつて擴張せらるゝに従つて、グローシアスの影響は、主として其の方面に擴まつて行つた。之れに反して、純正政治學說の研究に心を潜むる者にとつては、ホッブスが常に指導的權威であつた」と言つて居る。

更に米國の一例を引く。米國第一流の法律學者の共同著述に係り、米國の法律學界近來の大産物と見做して宜し所の「歐洲大陸法制史叢書」(Continental Legal History

Series)十六卷中、「世界大法律學者列傳」ホッブスの項に曰く「ホッブスは、英國をして考へるべく始めしめた學者であつて、最もいゝ意味に於ける近世的學者である。吾々はホッブスを目して、最も深い意味に於ける所の大法律學者であると云ふ事を拒む事は出来ない。其哲學的影響に於いては、彼の事業と彼の思想とは、適かにロック及ビルソーの思想を超越し、彼等朽つるとも、ホッブスは朽つる事無かるべきものである。蓋し、ロックもルソーもホッブスの如く深き思索をなさなかつたからである。思想家否豫言者としてのホッブスの影響は、向後増すとも決して減する事がないであらう。又曰く、「彼は最も深遠なる典型の法律學者であつた。何んとなれば、彼は、彼以後の歐洲中に於いて、社會に永久的作用を有する所の社會關係法律を立論したものであるからである。彼の唱へた所の法理は、彼が現存して居つた社會の性質を最も深く觀察した結果である。而して永い時期に亘つて實際の法律上の制度の進化を研究したものである。獨逸の大哲學者カントは、純正哲學の方面に於て、深くデヴキッド・ヒュームの影響を受けた如く、其の

法律及び政治哲學に於ては、最も深くホッブスの影響を受けたものである。

以上我輩は獨逸の學者の所論を引くことを避けて、姉崎博士の毛嫌ひせられざるべき英、米の學者の所説のみを引いたが、獨逸の學者の言ふ所も、大同小異である。ブルンチユリでもロバート・フオン・モールでも、歐洲の政治哲學の發達を研究した人は、古今往來ホッブスの如く深く、政治哲學の發達に影響を及ぼしたものの、無い事を、何れも皆認めて居る。此の意味に於ては、彼は、政治、法律の學問の社會に於てはマキアヴェリイ（も又た甚だ誤解せられ妄斷せられて居る）に優る地位を有して居る。彼一度現はれて以來其の學説は大陸に於ては、間斷なく行はれて居つたが、英國に於ては長く閑却されて居つた。處が十九世紀初頭以來彼の影響は、英國に於ても著しく加はつて來た。而して、其の産物は、實にペンタムの政治學説是れである。ペンタムは、今日の英米の思想界に偉大な關係を有して居る。然らば、姉崎博士があらゆる機會に於て、正義、人道の本案本元であるかの如く嘆美せられつゝある英米二國は、此の狼哲學者、

惡魔道の鼓吹者たるホッブスの思想によつて著しく支配せられて居るものと言はなければならぬ。

他方に於いて、姉崎博士が、人道主義の鼓吹者、天の使なりと推讃せらるゝグローシアスは何れの國の人であるか。彼は英國人に非ずして、當時英國とは烈しい競争者、好敵手であつた和蘭の人である。其の思想は、如何なるものであるか。右に擧げた自然法と社會契約の思想であつて、其の國際法の方面に於ける貢獻の重大なることは云ふまでもないが、政治哲學の上には、彼は獨創の貢獻を爲したものでなく、ポードン、スアレヅ、バークレー等の説を受け繼いだに過ぎぬ、即ち彼の影響は寧ろ反動的であつて、主權を以て一の私權なりとした爲めに、政治思想に一大紛亂を興へた謗を免れぬのである。其惡影響は今日にまで全くは跡を絶たぬ。彼は其國際法を直に國內法に拉き來つて、國と國とは契約上の對等者たる如く、國內に於ける主權者と治者との關係も一に全く契約關係であるとした。彼は多少其異同を辯じたが、其は何の役にも立たなかつた。

又た國內の個人と個人との関係も國と國との關係に全く均しきものと思はしめた。これは政治思想の紛亂であつて、ホッブスの理路整然たるとは到底同日の談ではない。

四 グロージアスの思想

姉崎博士が、人道主義を鼓吹したと言はれるグロージアスは、如何なる著述をなして居るかと言ふに、彼が十七八歳の時に著はしたと稱せられる所の「雅典、羅馬、バタビヤ比較論」『Parallelon rerum publicorum, liber tertius de moribus ingenioque populorum Atheniensium Romanorum Batavorum. "1600-1602" 法學通論』Inleiding tot de hollandsche Regtsgeleerdheyt, 1631 及彼の二大著述と稱せられたる「自由海論」『Mare liberum. 1609. 戦争と平和』『De Jure belli et pacis. 1625 等がある。其他にも數多くあるが今は論及せぬ。

右の内、「雅典、羅馬、バタビヤ比較論」と「法學通論」とは、此の論に關係が無いから省略して、彼が一生の二大著述に就いて少しく言つて見れば、一千六百九年の「自由海論」(千六百四年頃執筆したと云ふ)は、ホルトガルの海上專横に對して、和蘭の權利を主張したものである。其の内容は、國際法上公海は、總ての人に向かつて自由たるべきものである。然るに、ホルトガルは、公海を獨占して、東インドの通商貿易を專有して居るのは不當であると論じたものである。ホルトガルが、第一發見の權利、第二法王の特許、第三戦争によつて得たる權利、第四先占權、第五時効若しくは慣習等を論據として東インドの航海、貿易の獨占權を主張したのに對して、各種の論證を以て、此等は何等の理由とならない事を論じたものである。此の書は、カーネギー平和獎勵財團の國際法部で、一昨一千九百十六年原文と對照して英譯を附加して出版してあるから、何人も見る事が出来る。

當時和蘭は、航海、貿易に於いて勃興時代に際して居つて、ホルトガルとスペインとの獨占權の爲めに、著しく壓迫を感じて居つた。和蘭の幾多の學者は、自國の爲に、其の海權、商權を主張した。經濟學者として、グロージアスにも優る位の影響のあつたウセリンクスの如きも其一人であつた。此のスペイン對和蘭の争ひは、今日、英國が海權を

掌握して居るのに對して、漸々勃興しつゝある獨逸が之を争ふのと同じである。當時のホルトガル、スペインは今日の英國であり、當時の和蘭は今日の獨逸である。そこで和蘭は、商權、海權の擴張の爲めに、東インド會社なるものを設け、營利事業の形式殊に最初の株式會社形式に於いて、此會社が近世の株式會社なるもの、濫觴なることに就ては拙著「株式會社研究」を見られたし國家の利益の擴張を計つて居つたが、其の障害をなすものは、ホルトガル、スペインの海上の霸權であつた。尤も、和蘭にも此の造り口を非難して、公明正大の議論を唱へる人もあつた。即ちオルデンバルネフェルトと云ふ大政治家の如きは、極力東インド會社の利權擄掠方針を非難して、商業自由の原則に反し、結局和蘭の國威の失墜の原因となるものであると論じた。併し乍ら、和蘭の國論は、之れに耳を假さず東インド會社の利權擄掠政策を可とし、あらゆる特權を之に附與し、極端なる保護を加へ、如何なる術策を弄する事をも認められた。是れ恰も英國の東インド會社が印度貿易を獨占したと同様で、和蘭の東インド會社は其藍本である。英國の東印度會社は千六百年に設立せられたが、千六百十三年に至つて、和

蘭東印度會社の眞似をして、株式會社に改造したのである。而して英、蘭兩印度會社は、國家に代つて、他國侵略、商權、利權争奪の大事業を遂行した一種變體の商事會社である。世界の二大海賊機關である此の蘭英の兩東インド會社に倣つて、西インド會社の設立を主張したものは、ウセリンクスであつた。スペインは、此西インド會社に對して極力妨害を加へた。所が、スペインと平和の關係にあつては、西インド會社の設立が困難である。そこで、ウセリンクスを始め、西インド會社設立主張者は、皆極端なる開戦論を唱へた。即ちスペインに對して戦争を斷行し、國交斷絶を機會として西インド會社を設立すべしと主張したのである。東インド會社の成立したのは一千六百二年であつたが、一千六百六年、西インド會社も將に成立せんとした。然るに、スペインは、和蘭に講和を申込んだ。若し講和が成立すれば、西インド會社の設立は行き惱みとなるので、ウセリンクス一派は、極力講和の成立を妨げた。當時に於いても、國際間に正義の標榜が行はれたが、其の實際は商賣に支配されて居つたのである。それでスペインは和議の條件

中、西インド貿易の権利を割譲せざるのみならず東インド貿易に對する権利を認める事さへも承諾しなかつた。茲に於いて、單なる外交上の談判以外種々な手段に訴へる必要を感じた。殊に、スペインが、法理及宗教上の論據からインド貿易はスペインが獨占すべきものであると主張した議論は、甚だ有力であつた。スペインの學者の論法は法理上なかく巧妙であつて、之れを打破する事は容易でなかつた。殊に、何人も知る如く、ローマ法王が其の敎書を以て、世界を二分して其の一半をスペインに、一半をホルトガルに與へたので、東インドはホルトガルに屬し、西インドはスペインに屬するものとなつて居た。當時法王の敎書は、非常な權威であつたから、これに基く議論を打ち破るのは骨の折れる事であつた。ウセリンクスは専らスペインの権力下にある西印度との貿易權を得る爲めに開戦を主張したが、和蘭東印度會社は東印度に對しては、ホルトガルを敵として法理上宗教上の論據を打破する必要を感じた。其所で、和蘭政府と協議して、法理上、教理上、ホルトガルが東インド貿易を獨占する理由なきことを、世界に訴ふる

を有力なる一方法と考ふるに至つた。

當時、スペインとホルトガルとは、一國王の下に在つて、和蘭は、スペインとは交戦關係にあつたが、ホルトガルとは形式的には交戦關係にはなかつた。而して、東インドに對するホルトガルの權利を打破する事が出来れば西インドに對するスペインの權利をも打破する事が出来るわけである。其所で、此の大事業を擔任するに足る學者を物色した結果、當時二十六歳の壯年ながら、國內有數の學者として名高かつたユーゴ・グローシアス(和蘭流に發音すれば、ハローチー)が其の選に當つた。グローシアス此の依頼を受けて、其の椽大の筆を振つたものが即ち「自由海論」である。其の引證該博精確、其の論法銳利森嚴、到底打破し難いものであつたが爲めに、此の書一度出でて、ホルトガルの海權獨占が其の理由なき事、漸く世界に認めらるるに至つた。即ち、グローシアスの此の著述は、空想的產物ではない。國家當面の實際問題を無視した學者の閑事業ではない。最も重大なる國家の利權に關する問題を解釋する爲めに著はされたものである。其

の結果は、和蘭の商權擴張に役立つものである。尤も、和蘭の爲めにするると云つても、眞理を枉げたものではない。併し乍ら、其の著作の動機は國家の爲めに、其の利益を具體的に主張せんとするにあつた事は事實である。

『十七世紀和蘭經濟學 說一覽』參照を乞ふ

尙ほ是等當時の事情及び學者の議論等に就いては 拙著『經濟學考證』三二三頁より三六二頁に至る

姉崎博士の言はるゝ如く、商工業上の國際競争が、遂に今度の大戰を生み出したと云ふ事は、確に一部の眞理であるが、グローシアスの思想を目して、全然國際上の經濟競争を無視して、只正義、人道のみを主張したものであるとする事の大なる誤謬である事は、此の事實によつて、適確に證明される。實にグローシアスは、當時の世界經濟競争に於ける和蘭の地位を鞏固にするに、與つて最も力のある人であつた。彼は空想的な世界観を喋々した人ではない。世界全體の利害から言へば和蘭のインド貿易を獨占するの不可なるは、ホルトガルが之れを獨占するの不可なる、毫も異なる所はない。グローシアスは、祖國の實際的利益を離れて、抽象的に海の自由を主張したものでは、決して無

い。彼をしてホルトガルの學者たらしめば、果して彼の如き海の自由論を唱へたであらうか。否、彼にして和蘭の學者で無かつたならば等しく海の自由を主張するにしても、現に彼の著書中に於けるが如く、和蘭の爲めに辯護する事は爲さなかつたであらう。而して、是れは、決してグローシアスを累するものではない。彼が和蘭人として、和蘭の爲めに計つた事は、尊重すべき行爲である。若しも、和蘭の人でありながら、ホルトガルの爲めに辯護したとしたならば、何人も之れに與する者が無かつたであらう。日本の具體的利益を度外視して、幾多の事件に於いて日本の利益を踏み躪りつゝある所の米國の大統領の教書に日本人であり乍ら、隨喜の涙を流すが如きは、決して、「自由海論」を著した時のグローシアスの心事ではなかつたのである。

次ぎのグローシアスの大著述たる『戰爭と平和』は、其序文中に断はつてあるが如く、或る特別なる問題に就いて發心したものであるもなければ、ある特殊の問題を取り扱ふ爲めに書いたものでもなく、廣く、自然法、殊に戰爭に於ける權利に就いて立論したもので

ある。此の著に關しては、曩きに引いたダニングの説を見よう。ダニング曰く、「グローシアスの『戦争と平和』は、國際法の學問を建設したるものたる事疑がないが、其の法理論、其の國家論に至つては、微弱なるものである。否、彼にはオリヂナリチイも認められない。何となれば、彼の説は、彼以前に説かれたるものが少なくない」此の事は、カ
ンが「グローシアスの先驅者」なる著述中既に詳論した所であるが、これは獨逸の學者の説であるから遠慮する。ダニングはまた曰く、「グローシアス以前に、同説があるに拘らず、グローシアスがひとり盛名を擅まにしたのは、運のいゝ人であつたと言はなければならぬが、斯くまでグローシアスの著書を有名ならしめた原因は、三つある。第一は、彼の人格の高潔であつたこと、第二は、彼の神學上の意見の甚だ自由であつた事、第三は、其の文章及び論述の方法の甚だ宜しきを得たる事是れである」と是れは、ひとりダニングのみならず、グローシアスの著述を一讀し、而して其の前後の類似の説をなした學者の著書を參考したものは、大抵同様に考へて居る。グローシアスと言へば、國際法の泰斗であつて、「戦争と平和」と言へば、經濟學に於けるアダム・ス

ミスの「國富論」の如く、讀んだ事の無い者まで賞讃する。併し乍ら、之を一讀すると、其の印象は著しく變つて來なければならぬ。思想は兎に角、形式は煩雜であつて、卒讀に堪えない。大著述には相違ないが、實際我々の讀んだ所、普通に言ふ所の大著述とは大いに趣を異にする。是れに由つて見れば、口を極めてグローシアスの「戦争と平和」を賞讃する人の中には、實は自分で讀んだ事の無い人があるらしい。元來「戦争と平和」はラテン語であつて、褒めるにも、譏るにも、原文を讀む事は、容易でない。英譯も數種あるが、善譯は殆んど無い。比較的善いと言はれて居るのは、ホエーウエルの譯本であるが、原文の全部を譯出したものではなく、著しく縮めたものであつて、それだけでは不十分である。而してグローシアスの説が、幾分か我々に解りよくなつて居るのは、佛譯者たるバルバイラック氏の極めて周到丁寧なる註譯があるからである。グローシアス自身の註釋に至つては、甚だ煩雜である。本文中には、古代中世の無數の學者の説を縱横無盡に引用して、是れ亦煩雜を極め、殆んど本論の趣旨の捕捉し難い點が多い。我

輩は、ラランの原文は十分に了解する事が出来ないから、一千七百三十八年ロンドン版
英譯と、右に言ふホエーウエルの摘譯とを對照して、一千七百三十八年版の讀むに堪え
ない事を覺えた。他國の譯書では獨逸譯は暫く措き、一七五九年ライデン版バルバイラ
ツクールの佛譯は、全文を譯出したものであるが、是れは實に、甚だ錯雜したものである。
姉崎博士は、正義、人道の思想の代表者として、グローシアスを擧げた。博士は、果
して此の煩雜なる「戦争と平和」の何れの部分に如何なる文字を見出されたのであらう
か。詳しくは書いてないから、我輩には分らないが、想ふに、大體に就いて言はれたの
であらうと思ふ。

ホッブスの一生の大著述は「レウィアサン」(古代に棲息したと云はる、巨獸の名)と稱
する一篇の國家論である。是れは通俗版がイクラもあつて(例へば此項ではEveryman's
Libraryにもある)誰人も容易に手にすることが出来るものである。我輩は其原版の初印
本(千六百五十一年倫敦アンドルー・クルック開板)を倫敦で入手して、所藏して居る。

其他彼の著書は大抵モールスウオース編纂のホッブス全集に収録せられて居る(倫敦千
八百四十五年版、全部十一冊の大部より成る)。モールスウオースはホッブスを敬慕する
餘り此の出版を企てたのである。

五、グ、ホニ氏の自然法論

さて、姉崎博士は詳しくは出所をあげて居らぬが、ホッブスを以て「人間と人間とはや
はり狼と狼だ」と云ふ暴力謳歌の思想の代表者であると言ひ、グローシアスを以て、
正義、人道の思想の代表であると言つたのは、恐らく次の點を誤解若しくは曲解せられ
たものであらう。グローシアスもホッブスも共に、自然法を認めて居る。併し其自然の
状態なるものに關する二人の見解は全然異つて居る。グローシアスの自然の解釋は、獨
創の考へではない。彼以前、スアレツ既に唱へ、他の學者も亦唱へた所に、彼自身の言
葉を着せて現はしたものである。

彼は總ての法律を、自然法と人爲法とに區別した。彼は自然法は理性の支配するもの

であるとして、此の方面を研究した。而して、彼に従へば、此の理性の支配する自然法は神自身と雖も、是れを變へる事が出来ないものである。乃ち、人は自然にして理性の支配して居る法を有して居る。總ての法律は是れから出立して来る。然るに、古代以來多くの學者が戦争と自然法とは兩立しない、一度戦争が起れば總ての法律、權利、正義が停止すると言つたのは謬見である。彼は、エニアスが「彼等は、武器に訴へて、正義に訴へず」と言へるを引き、ホレリウスが「權利を無視して總て武器によつて要求を貫かんとせり」と言へるを引き、戦争と法律とは兩立せずと言ふが如くに説けるを難じて、戦争と法律とは兩立すると論じて居る。而して彼は「ユリテリテ」を以て法律、正義、權利の淵源なりとする説を極力斥けてホレリウスが *utilitas iusti prope mater et aequi* (ユリテリテ) は正義と權利の母なり」と云つたのを駁して權利の母即ち自然法の母は人性である、人性は他の欲望なくとも社交を求むるものである、法律の母は相互の契約に依る義務是である、而して相互の契約は自然法から湧き出るものであるから、自然は法律の

祖母とも云ふ可きである。即ち(一)人性(二)自然法(三)人爲の法律と云ふ順である。利用は唯だ之を助けるに過ぎないものであると。ホエーウエル版卷一序論四十九頁

之に反して、ホッブスは、天然の状態に於いては、人は互に相疾視して不斷に争闘するものであると説いて居る。ホッブスに従へば、此の状態に於いては、人間最大の目的たる平和、安全が得られない。そこで、人間は社會契約を立てた。茲に於いて始めて法律あり、權利があるのである。其淵源は「ユリテリテ」に在ると主張して居る。是れ即ちベンタム功利説の根柢を爲すものである。ジエームス・ミルやグロウトやモールスウオースも亦其の感化を受けたものである。

姉崎博士が、ホッブスは「人間と人間とはやはり狼と狼だ」と主張したと言はれたのは、此の點からであらう。

併し乍ら、ホッブスは、現代の社會状態に就いて、人は不斷に争闘すると言つたのではない。まして現在の社會に於いて、人間は争闘しなければならぬと主張したのではない。

い。暴力を謳歌したのでは斷じてない。反對に社會を打破すれば、斯の如き忌む可き状態に陥るから、それは不可であると言つたのである。此の立場から、唱へたものは、後世に誤解せられたる彼の專制政治論である。彼は如何なる專制政治も、人と人と常に相戦ふ自然の状態には優ると言つたのである。然しながらホッブスの重きを置いた所は、是れにあらずして、彼にある。換言すれば、ホッブスは、人間と人間とが、狼と狼との如く、咬み合ふのを最も深く恐れたのである。彼は、人間が社會を作る最大動機は、死を恐れる事是れであると説いて居る。積極的に人間を動かす動機は、生命の安全と平和とであると言つて居る。死を恐れ平和の裡に生存を安全ならしめんとする念が、最も強く人間を支配するからこそ、社會契約が成立し、而して、社會が永久に維持せられて行くのであると説いて居る。即ち、人生を以て狼の咬み合ひの如くせざらんとする事が、ホッブスに従へば、社會存在の根本義である。而して此説は殆んど其儘十八世紀の終に於て極力「永遠の平和」を主張し、又ルソーの思想を喜んで取つたカントによつて

繰返されて居る。カントは特に「ホッブスを駁す」と云ふ一文を著はして居るが、奚ぞ知んカントの國家哲學の根柢は殆んど皆ホッブスに在る。此事他日機會あらば詳論せんと思ふ。否カントの「合法性」(Legality)「道徳性」(Morality)との區別も其着想はホッブスから來て居るのである。カントは道徳律以外のもの、混ぜざるを道徳性と云ひ、其混ざるもの(即ち人爲的法の入るもの)を合法性として對立せしめて居る事は、誰も知る所であるが、ホッブスは其反對に「所謂自然法なるものは眞正の法にあらず」(Conclusions or theories concerning what conduceth to the conservation and defence)なりと云ひ、嚴正の意にて云ふ法とは the word of him that by right hath command over others なりと云つて居る。『レヴィアサン』第一編第十五章初版本の第八十頁然るにグロージアスの自然法と稱するものは、實に斯の如き「結論」、「定理」丈の力もないもので、詮ずる所、彼自身の所信、一家言たるに外ならぬものである。故に之を他に強請する能はず、否其の解釋は各人勝手に附し得るのであつて、ダンニングは左の如く云つて居る。「グロージアスは自然法と國際法とを區別せんと勉めたるに拘らず、彼の失

敗は始めから明々白々である。而して其論を更らに詳細に展開して行くに及んで其失敗たることは益々疑ふ可からざる所となる」第七百七十五頁 又た曰く、「グロージアスの確定永久なる自然法なるものは、單に彼の個人的理想——疑もなく賢く且つ高尚なれども、純然主観的なる——を表現するに過ぎざるものなることは、彼の自然法の淵源及分類の論述に徴して一の疑を容れず」百六十頁 而してカントが如何に深くホッブスの影響を受けたかは、彼が國家の起源は人性の利己的、非社會的動機に在りとし、ホッブスが、*bellum hominum est bellum omnium in omnes* (人間の常態は凡てに於ける凡ての人の戦争である)と云つたの *belli status* (戦争の状態である)と改めれば正しいと云つて居るのを見て知り得る Deber den Gemeinspruch, Haltenen Neutayn 版カント全集第六卷第百九十四頁及三百二十一頁を見よ 此の戦争状態を免れんが爲に人間は社會契約によつて國家を作る、即ち人間が法律と強制とを甘受するは此の戦争状態を避けんが爲めである。但し其社會契約は、カントは之を歴史上の實際事實とは認めず、一の理性概念として認めて之を一の先天的要件として論理的、形式的に説いて居るのである。

六 グロージアスの國家論は基礎薄弱

姉崎博士が、此のホッブスを以て、狼の咬み合ひ主義を鼓吹するものであると言ひ、暴力謳歌思想の代表者であると言ふに至つては、誤解どころではない、曲解であり、妄斷の甚だしきものであると言はざるを得ない。殊に十八世紀には人類天賦の權利を高潮した理性主義の時代も在つたとて、其最大の思想家たるカントを無視せられたのは、甚だ以て宜しからざることである。

而して、此のホッブスの説と、姉崎博士の所謂正義、人道の思想の代表者、天の使たるグロージアスの説と、何れが徹底的に哲理的に、社會の永續性、安全性を打ち立てたかと言へば、それは無論ホッブスであつて、グロージアスではない。何んとなれば、グロージアスの説は、之れを學理的に論じ詰めて行けば、どうしても矛盾に陥らざるを得ないからである。低級なる頭腦は、それでも満足するかも知れないが、少し物事を徹底

的に考へるものは、グローシアスの國家論では安心が出来ない。思想の動搖を免れない。而して此動搖は實際に起つた。

グローシアスは、自然の狀態に正義があると言ふ。それは望ましい事には相違ない。併し乍ら、實際の事實とは、大に遠ざかつて居る。グローシアスは「ドメスチック・インスタンクト」(社交本能)「キンドレッド・フィリング」(同胞感情)を有するを以て、人類の特性だと言つて、子供でさへも、ブルタークの言つた様に、他人に善事を爲さんとする素質を有して居る。是れが、社會組織の動機である。而して是れが、自然法の淵源であると言つて居る。

併し乍ら、此の見解が一般的に主張し得ることは、社會學現在の立場から言つて争ふ事の出来ない所である。而してグローシアスは、斯くの如く、自然法から出發しながら、社會契約を認めて居る。彼は明言しては居ないが、自然法から出るものは社會であり、社會から出て来るものは、國家であると考へて居るのである。此の考は學問上の

混雜を惹き起して蛇蜂取らずに終るのである。而して彼の自然法論が彼の獨創でないが如く、彼の社會契約説も亦其の獨創でない二つの別々の説をつぎ合せたものである。

グローシアスは、自然法を分けて、純正自然法と特有自然法の二つとして居る。純正自然法とは、總ての政治上の制度に先だつて居る本來の狀態であり、特有自然法とは、政治上の制度が十分に發達した後の狀態である。而して、彼はまた自然法と國際法とを區別して居るが、此の二つの分類は、何れも不徹底的のものであること、前に引いたダニンングの言の通りである。實際、どれが純正自然法か、どれが特有自然法か、之れを分つ可き標準がない。自然法と國際法とを區別すべき標準も亦曖昧である。ダニンングは此の區分法を以て失敗と斷じ、其の論法を評して自殺的であると言つて居る。而して之れを國家論に應用するに至つて、此の破綻は益々顯著である。即ち、國家並に主權の起源及び存在の理由を、自然法から説明するか、社會契約から説明するか、不分明である。而してグローシアスはまた、主權を以て財産權の如き私權と見、讓渡、分割が出来

ると言つて居る。最高の権利であり乍ら、拘束の出来るものであり、單位であり乍ら、分つ事の出来るものであると云ふ事は、どうしても矛盾と云ふ外はない。故にグローシアスの思想から出立する時は、國家の本質、主權の本質に關して幾多の疑問の生ずる事を免れない。實際、或は專制政府維持論ともなり、又反對に革命鼓吹論ともなつたのである。

尤も、グローシアスの國家主權論は「戦争と平和」中にあつては、寧ろ付けたりのものに相違ない。彼の主として打立てんとした所は、國際法の法規であり、戦争に於ける正義であつて、此の點に就いては、彼の功績絶大である事は、疑を容れない。併し戦争に於ける正義、國際法理の出立點は、國家の主權である。此の根本が明確でなければ、國家と國家、主權と主權との衝突に方つて、何が正義であるかの標準が定まらないわけである。故に、彼の學說の影響を受けて居る大陸の政治思想は、常に動搖を免れなかつた。グローシアスが國際法を打ち立てた功績は偉大であるが、他面に於いては、歐洲

の政治思想を紛亂せしめたと云ふ譏を、全然免れるわけには行かない。

グローシアスは又神の旨と云ふ事を論じて居る。そこで起るのは「神の旨」と「君主の命令」とが衝突した場合にはどうするかと云ふ實際の大問題である。ホッブスは契約は人間同志しか出来ぬ、人と獸と契約を結ぶ能はざる如くに、又人と神とも契約を結ぶことは出来ぬ。故に神との契約を口實にして、坊主が、國家主權に容喙することは不都合である。と斷言して、教權と政權との間に、明なる分界を立てた。而してグローシアスの所謂自然法なるものは萬人の見解が一致するものではない。自然法と云ふものは、畢竟學者の解釋に外ならない。學者の解釋は、人によつて異つて来る。それであるから、自然法と國際法との區別も不分明である。若し人ありて、我は之れを「神の旨」と信ずと云ひ、或は、我は之れを自然法と信ずと言つても、何人も之れを否定する權利を有つて居ない。人々が各々其の信ずる所の「自然法」若しくは「神の旨」なるものを以て、國家の法律に對抗し君主の命令に對抗する時、何人が何によつて其の正否を判斷するのであるか。

ホッブスは明かに其最後の判断者は主権者と其の法律あるのみと断言して曖昧を許さない。此の状態は、国際間にあつても同様である。或る一國が、「自然法」「神の旨」を振りかざして他國に臨む時、相手の國は、何によつて、如何にして其の然らざるを證明し得るか。現に英米國は正義人道は自國の専賣に屬し、敵方は一から十まで非理を敢てするものだとして居る。英米人ならざる我々は誰か鳥の雌雄を知らんやと云ひ度くなるではないか。

凡そ、グローシアスの所説に關して、斯くの如き類を挙げれば、僕を更ゆるも盡さないのである。然るに、姉崎博士は是れを以て、正義、人道の思想を一貫して主張したと言ひ、「グロチウスの正義は、その後の戦亂毎に、主義と條規とを充實して、正義尊重の流となつて、今日に及んだ」と言はれる、其の一貫したものは、果して何んであるか、餘りに空漠であつて、學問上受け取れない説である。

七 ホッブスの國家論の基礎

之れに反して、ホッブスの學説に至つては、無論認つて居る點も少なくないが、一貫徹底した理論を、政治社會に與へたものである。大陸に於いてホッブスの學説に従ふものは少なくとも一貫した主張を立て得た。英國に於いては、十九世紀以降彼の説が更めて認められる様になつた。其れ以後英國の政治哲學には少なくとも動搖しない基礎が與へられたのである。今「レヴィアサン」に現はれた彼の思想の大體を取つて言つて見る。ホッブスの説に従へば、人間は自然の状態に於いては、殆んど相等しい。アリストテレスは、人間には支配する人間と、支配される人間とあると云つたが、夫れは間違ひである。如何に愚かな人間でも、悉く人に治められなければ生存して行けないものはない。賢愚、才不才の差はあるが、大體に就いて見れば、五十歩百歩の差である。人間は大抵平等のものと見なければならぬ。斯く平等で、力が互角であるから、自然の状態では、人間は相争ふのである(bellum omnium in omnes)。而して、人間をして争はしめる原因は三つある。第一は競争、(Competition)第二は怯懦(Diffidence)第三は名譽心(Glory)であ

る(カントも同じくHabsucht, Herrschucht, Ehrsuchtに云つて居る)。夫れであるから、自然の状態に放任して置けば、人間は絶えず争闘する。然るにまた、人間は理性を具有して居る。此の理性から、自然法が起る。根本的理性は、各人は、之れを得るの望みある限り平和を得るに力むべきものであり、反對に之れを得る望みなき時は、戦争の力を求め、之を用ひ得るものであると云ふ事である。以下ホツプスは、自然法たるものを列挙すること十四、其の一切の最根本的の自然法は、聖書の言葉借りて言へば、「人に爲らんと欲する事は、其の如く人に爲せ」と云ふ事である。併し最も適切に言へば、「己の欲せざる所は人に施すな」(Do not that to another which thou wouldst not have done to thyself.)云ふ事である。羅馬人の言を借れば quod tibi fieri non vis, alteri ne feceris 是である。是れは云ふ迄もなく孔子の言其儘である。即ち、人は其生存の維持が最大目的である。従つて起る義務は、人の生存を妨げない事である。併し人は自然法によつて得る權利を放棄し譲渡し得る。但、己の生存を害すべき權利を他人に譲渡する事は出来な

汝吾を殺すを得べしと云ふ權利は譲渡する事を得る。併し、汝吾を殺さんとする時、吾抵抗せざるべしとは約束する事を得ない。何となれば、生きる事が最高目的であつて殺すものを防ぐ事は、人間存在の根本義であるからである。然るに、人あつて吾を殺さんとする時、吾之れを防がざるべしと約束する事は、人間たる事を放棄する事であるから其れは不可能である。ホツプスは又曰く、吾々は夜寝る時、寢室の戸に鍵を懸け、外出する時、机の抽出に鍵を懸けるではないか。吾々の生存を保證する爲め社會を作つて、其の中に住んで居り乍らまだ安心せず、寝るに鍵を懸け、家庭の内には己の愛する所の妻子、信任する僕婢しか居なくても、僅の金錢を入れた抽出に鍵をかける。人が、安全の上にも安全を欲する事が是れでもわかる。(此の點から言へば、日本人の如きは猜疑心の少ない樂天的の人間である)。

ホツプスは更に論を進めて曰く、權利を互に他に譲り合ふ事を、契約と云ふ。其の一方が直ちに譲渡して置いて、他方が他日を期する場合、之れをコツナント(約束)と云ふ。

社會は、此のコッナントによつて出來たものである。即ち、自然の状態に於いては、競争、怯懦、名譽心の爲めに、争闘が絶えない。之れを免れる爲めには、「コッナント」を結んで社會を作らなければならぬのである。

彼は、次いで、人類のみが社會を作る理由を六つ擧げて居る。第一、人間は相互に嫉妬と憎惡、即ち名譽と權威とを競争する事から起る。獸類の間には是れがない。第二、獸類の間では、個々の利益と全體の利益とが一致する。人間は然らず、従つて争が絶へない。第三、人間には理性があつて、各人皆他人の言動を批評し、己を以て他より賢しとする。従つて衝突が起る。獸類には、それが無い。第四、獸類は互に意志を表明する事が出來ない。従つて善を惡に、惡を善に見せしむる事が出來ない。人間はそれが出來る。そこで争が起る。第五、獸類にあつては、故意に他を傷る(Injury)と、無意識に他に損害を加へる(Damage)との區別がない。人間には其が出來る。第六、獸類は合意する時、自然的にしか出來ない。人間は人爲的にも合意が出來る。人爲的合意を有効ならし

むる爲には、社會が必要である。是等六つが人間に限つて、社會の必要なる所以である。而して、コッナントは、獸類とも結べず、神とも結べない。人間同志の間にしか結べないと。彼が斯く言つた事は、「神の旨」なりと稱して、主權に干渉せる者を一擧にして打破した所以である。ホッブスの一大功績は、教會が「神の旨」と稱して、政治に干與して居つた途を杜絶した事である。是れ「神の旨」を説いたグロージアスの遠く及ばざる所である。

八 ホッブスの徹底的の主權論

扱て以上の必要から人間は社會を作るが、是れは、社會契約である。コッナントである。人間は、寄つてたかつて生存を安全にする爲めに、自己の有する權利を、或る一人なり、多數者なりに、譲り渡す。是れによつて、多數者の意志が一人の意志となり、多數の人格が、一人の人格となる。其の統一の意志、統一の人格の創造者は、各人である。故に、其創造された人格は、各人の人格である。それを毀損する事は、各人己の人格を毀損する事である。即ち、各人は己を治むる所の權利を一人若しくは一團體に譲與した

ものであつて、各人の讓與を受けた統一の人格が、國家でありコンモン・ウエルスである。彼は此を「レヴィアサン」と名くるのである。而して、此の人格を負擔するものが主権者であつて、主権を有すと稱し、之れに對して、權利を讓與したるものを臣民と稱する。主権は社會契約によつて出來たものではなく、社會契約によつて社會が成立して後に出來たものである。故に主権者は社會契約によつて廢することの出來ぬものである。此の社會契約と主権の發生との關係の説明は、ホッブス特有のものであつて、ルーンズの社會契約説とも異り、殊にグロージアスとは迥かに異つて居る。主権が社會契約によつて出來たものとすれば、約束を廢棄すれば、主権は消滅するわけである。各人合意の上主権を廢する事は合理的であるわけである。然るに、ホッブスに従へば、社會契約によつて出來たものは、コムモン・ウエルス（社會）であつて、主権ではない、故に社會契約によつて、此の主権を廢する事を得ない。主権を廢すると云ふ事は、自己を廢すると云ふ事である。主権者が一自然人である場合には、社會契約によつて之れを廢するを得

るかに考へられるが、ホッブスに従へば、之れは謬である。主権者は必ずしも一自然人たるを要しない。古代ローマに於けるが如く、全ローマ人（ポポ・ロ・ロマノ）が主権者である事もある。此の主権者を廢すると云ふ事は、ローマ人全體を廢すと云ふ事である。各人が各自を亡ぼす事である。是れは自然法が許さない。即ち、社會全體の自殺である。斯くの如き事は不可能である。主権者が一自然人であつても、其の理は變らない。主権は、社會各人が、各人の特有の權利を一人格に統一したものである。故に、人が理性的動物である限り主権者を廢する事は出來ないのである。之を敢てすれば、理性的存在を滅することになる。

斯く論ずる事によつて、ホッブスは、あらゆる革命を否定した。此の點で、ホッブスは極端なる獨裁政治の主張者であると見られて居る。併しホッブスは明白に、主権は one man（即ち Monarchy）でも又は one assembly of men（即ち Aristocracy）でも S^overeign また右のポポ・ロ・ロマノの例の如く、全人民が主権者（即ち Democracy）であつても S^overeign

云つて居る。決して獨裁君主政治のみを主張したのではない。主権者が一人であると、全人民であるによつて、主権の性質は寸毫も異ならない、只政體の異ひが起るばかりであると説いて居る。主権者が一人であれば、政體はモナアキであり、アツセンブリーであれば、アリストクラシーであり、全人民であればデモクラシーである。政體には此の三つしか無い。混合體はない。少數政治、オリガシー、テラニーと云ふが如きは、單に感情上の問題に過ぎないと説いて居る。

但し、ホッブス自ら、三種の政體中モナアキを最も優つて居るとして、詳しく其理由を論じて居る。ホッブスを誹るものは、之を以て、時の王朝に媚びたものであると云ひ、又た彼は専制政治の鼓吹者であると云つて居る。此は元より評するものゝ自由であるが、ホッブスにあつては、其の第一目的は、主権を鞏固にする事であつた。何となれば、彼は主権の鞏固を以て、人間生存の最大目的たる生活の安全と平和とを維持する根本的必要條件と認めて居つたからである。即ち、之を以て、各人が、自己の權利を國

家に譲り渡すと云ふ當初の目的を、最も完全に實現する所以であると考へたからである。而して、當時にあつては、モナアキと云ふ政體が、主権の鞏固を實現する所以であると信じて居つたのである。此の點を混同するのは、誤解に非ざれば曲解である。ホッブスは何處までも理性を中心とする徹底を尊んだ。グローシアスの様な混亂した折衷説を唱へたものではない。彼の説は、之れをデモクラシーに當てはめれば、最も徹底してアブリユート・デモクラシー説ともなる。是れ即ち、ダニングが、ホッブスの説を、アブリユート・パリアメントにも全く適應する事が出来る事を英國人が十九世紀に至つて覺つたと云ふ所以である。

然るに、頭の悪い後世の學者は、此の理論の精妙なるを看破し得ず、彼を以て専制獨裁のみを主張した學者の如く言ふのである。其の一例を擧げる。『ゲルソンよりグローシアスに至る政治思想の研究』(一千九百十六年、ロンドン)と云ふ本に於てフィツギスと云ふ人は、其二百二十三頁に、「ホッブスは、あらゆる倫理學說中、最も下等なるものを、

宗教に對する非歴史的輕蔑と結び付けて、專制政治の最も一般的なるものを辯護した』と云ふ様な愚論を吐いて居る。姉崎博士は此の種の低能學者の愚説を、恐らく其まゝ取次いだのではないか。我々は西洋の學者だとして、愚論を吐く人は澤山あることを忘れてはならぬ。然し斯る愚論は、ひとりフィッギスに限らない。ホッブスの著書を読んだ事なくして、耳のみに頼る人には、斯くの如き間違ひが甚だ多い。故に、誤傳せられたるホッブスの説が或は姉崎博士の云はるゝ如く、惡魔的作用をなした事はあるかも知れない。併し、それは千古の大學者たるホッブス其の人の罪ではない。耳學問の徒が、ホッブスを知らずして、之れを罵るは尙ほ恕すべしとするも、苟も日本の文科大學教授であり乍ら、哲學者としてイギリス第一と言はなければならぬホッブスに對して、全然事實に相違した誹謗を加へる事は學問上の一大曲事と言はなければならぬ。

ハクスレーは、眞に哲學を學ばんと欲するものは、ギリシヤ、ローマ、フランス、ドイツの學者の著を讀むに及ばない。イギリスの學者だけで充分である。イギリスでは、

ホッブス、バークレー、ヒューム三人の著書を讀すれば、それで充分であると言つて居る。是れは少しく極端であるが、大體に於いて當を得たる言として受け取らなければならぬ。ホッブスは、英國の眞の哲學者の筆頭に來るものである。其の説には固より今日から云へば謬が少くないが、之れに、惡魔的學者、狼の咬み合ひを鼓吹する學者と云ふが如き批評を加へるのは、以ての外である。我々の共同の學問上の大恩人を罵倒する事斯くの如き以上、姉崎博士は、多少なりとも學問に興味を有する我々から、如何なる惡口雜言をも甘受しなければならぬ運命を自ら招いたものである。

九 姉崎博士の答辯を求む

過去の學者に對して、全然妄斷、曲解とも言ふべき評論を加へた姉崎博士は、現在の問題に關しても又た見脱がす可からざる空想に耽つて居る。過去を知らない博士は、現在をも知つて居ない。然れば、『戦後の世界がどうなる、をどうするか』と言つて未來を談じて、甚だしき謬想に陥つたのは、寧ろ或は當然である。

姉崎博士は、戦後の世界が「どうなるか」を考へるよりも『どうするか』を考へなければならぬと言ふ。併し、『どうなるか』に就いても、博士の考へのある所が其の論文中に散見する。即ち博士は、狼の咬み合ひの如き十九世紀は、此の戦争で終を告げ、戦後の世界は、グロトシアスの正義、人道が世界を支配する様になり、此の度の戦争の如きは、蹶を断つ様になるか、若しくは容易に起らない様になるに至るであらうと考へて居る様である。従つて、此方針に向つて國是を立つ可く、ウキルソンの教書を人類獨立の宣言として奉戴せよと云ふ。併し是れは、大謬想と言ふべきものである。此の點に關しては、吉野博士の論ぜらるゝ所、姉崎博士よりも、適かに傾聴に値ひする。即ち、戦後の世界が著しくデモクラチックになると言ふ事、是れは少くも一部分は認めなければならぬのである。但しイギリス、アメリカが著しくデモクラチックになると言ふ事は、容易に斷言することを許されぬ。

戦後の世界が著しく平和的になると言ふは、空想的である事は、英國に於いてさへ

も有力者が之れを論じて居る。手近い例を擧げて見れば、昨年十二月十五日ロンドン發行ステーチストに、其の數日前パーミンガムに於ける前首相アスキスの演説を評して、アスキスの演説中甚だしい間違がある。アスキス氏は、米國のウキルソン大統領と共に、戦後は永く戦争が起らない様になるであらうと言つたが、左様な空想を基礎として、英國の國策を立てるのは、間違ひであると論じて居る。ステーチストは、有力なる雜誌で、決して軍國主義を鼓吹するものではない。苟も現實の世界を見て居る者にとつては、戦後、人道、正義の思想のみが歐洲諸國を支配する様になるべしなどは到底考へられない。我々も理想として此事を熱望するに於いては決して人後に墜つるものではない。併し理想は理想である。現實ではない。殊に日本の如き地位にある國が、左様な空想的 세계觀に基いて、今後の世界に處して行くとするれば、姉崎博士の言ふが如く『國家の存在の意義は全く無である』。米國の大統領が美しい文字を臚列した教書を發したからとて、それを米國の眞意と思ふのは、大きな間違ひである。本文の始めに、我輩は、今度

の戦争は、オートクラシーとデモクラシーとの戦争と見られないこともないと言つたが、其の意味は、吉野博士、姉崎博士の解釋とは異つて居る。オートクラシーが獨逸側、デモクラシーは聯合國側とするのは、間違ひである。今日、世界最大のオートクラットはロイド・デヨードである。近來ウケルンも亦其弟子入をして、大オートクラットたらんとしつゝある。大統領の権限を擴張する如きは其の一證である。最近米國から歸つた人に聞くに、米國の軍國化は驚くべきものがある。英米の勝利は、却つて世界の軍國化をすゝめ、從來形式的になりとも、デモクラチックであつた國をして、更に甚だしくオートクラチックたらしむるに相違ない。此の點から言へば、英米が勝利者とならない方が優しである。我輩がオートクラシーの征伐と云ふのは、第一に露西亞に起つた、第二に獨逸に於いて著しく起りつゝある運動を指すのである。戦争の當事者の區別と、オートクラシー對デモクラシーの區別とは、全然別問題である。獨逸がオートクラシーの權化で無いが如く、英米もデモクラシーの權化ではない。若し英米がデモクラシーの

權化であるならば、今日の戦争の状態は、甚だ悲觀すべきものである。何んとなれば、オートクラシーの權化が勝つて、デモクラシーの權化が負けて居るからである。聯合國側に勝味がありとすればそれはロイド・ジョージの演説や、米國大統領の教書の文句の上の勝利であつて、獨逸は確かに演説負けをして居るとは言へる。乍併真正のデモクラシーは演説や教書で實現されるものではない。我輩は曾つて開戦後間もなく小野塚博士の軍國主義論を評する一文中に斯う云ふ事を書いた。此の戦争が軍國主義退治の爲めに起つたものとするならば、先づ第一に征伐せられなければならぬ國は、獨逸ではなくして露西亞である。而して、此の論法を推し詰めて行けば、我日本の如きも、征伐者の仲間へ入るよりも、寧ろ被征伐者の仲間へ入るべき國であると。此の議論に對しては小野塚博士も如何にも其の通りであると語られた。然るに其の後、如何であつたか。軍國主義の第一の巢窟であつた露西亞に於いて、軍國主義、オートクラシーが全く倒れたのである。是れが、オートクラシー對デモクラシーの戦争の齎らした最大産物である。戦争

の勝負よりは、此の方が過かに重大事である。

第二の重大事は、ヘルトリングが宰相となると共に獨逸に於いて、不十分ながらも責任内閣若しくは政黨内閣の實現に近づくべく始めた事である。最近の大同盟罷工の真相は不明であるが、恐らく獨逸に於ける軍國主義者に對する一大示威運動であらう。斯くして獨逸は歩一歩づゝ其のオートクラシーを打破して、デモクラチックになりつゝある。是れは、戦争の勝利よりも過かに大なる結果と言つて宜しいと思ふ。

然るに其の反對に、英米兩國に於いては、デモクラシー逆轉の事實が着々現はれて居る。戦後の世界と言つても何時からを戦後と言ふ時期とするかによつて異つて來るが、若し露西亞、獨逸間の單獨講和が成立し、延ひて聯合諸國間に近く講和が成立するものとすれば、オートクラシー對デモクラシーの戦争は、露西亞、獨逸に於いては後者の勝利を見、英米兩國に於いては、前者の勝利を見ると云ふ様な、甚だ不思議な結果を呈するわけである。而して、我日本が主として接觸する國家は、英米二國である。然らば戦

後に對する日本の國策は、之れを出立點としなければならぬ。即ち狼の咬み合は寧ろ是れより始まるので、あつてグローシアスの正義人道の支配する時代は、容易に來るものではない。我々は姉崎博士と共に、ウエルソン大統領の空言を臚列した教書に感嘆の涙を流すが如き餘裕は、寸毫も有しない。無論『世界を敵として戦へ覺悟と準備』などは必要でない。併し乍ら、過去に於ては世界の最大陸賊國兼海賊國であつた英國や、近く島や布哇を併呑した米國から我國に對して起り來るべき問題が、如何なる性質のものに屬するかは、殊に細心の注意を要するのである。姉崎博士は、『何の爲に、何の目的で、如何なる主義で、世界を敵としなければならぬか。此を考へずして、只覺悟と準備をするのは愚の極』で、辨慶の七つ道具に等しいと言つて笑はれたが、我々は、何の爲めにも、何の目的を以ても、何の主義によつても、世界を敵として戦ふなど、云ふ事は、到底爲し得べからざる、また有り得べからざる事と確信して居る。我々はオートクラシーの支配する時、オートクラシーが我國を壓迫する時、之れと戦はなければならぬ。他國

の軍國主義が我邦を脅すときは之と戦はねばならぬ。是れは國の外たると内たると、獨逸たると、英吉利たると、アメリカたるとを問はない。而して單に正義、人道云々の空言空想の爲めには、決して戦つてはならぬものであると確信する。

換言すれば、グローシアスがホルトガルの海權、商權の獨占到對して、和蘭の國權を擁護した如くに、日本の國權を阻害する獨占者があれば、それと戦はなければならぬ、其の戦は、決して兵火の戦のみを意味しない。グローシアスの如く、或は筆を以て、或は舌を以て戦はなければならぬ。

其れと同時に、今後の世界に處して、國の内外を問はず、學問を無視し、理性を蔑にして曖昧、不徹底、矛盾を極めた謬説を奉ずるものは、之れを退治しなければならぬ。其の説の内容は別として、我々は理性の判斷、道理の徹底を尊重する事、ホツプスの如くでなければならぬ。此の意味に於いて我邦現在に於て我々が戦はなければならぬものは姉崎博士の説の如き即ち其一であると、我輩は深く信じて居る。あらゆる場合、力の

及ぶ限り、斯くの如き謬説を根本的に破壊するまで奮闘努力する事が、學問に従事する我等當面の急務であると信ずる。他方には津村秀松氏の如く算盤玉の打算の上から歐洲出兵は尙早也、交戦兩側が戦ひ疲れ切つた時を待つて、出兵して一獲の利を得よと云ふが如き、成金の素町人論も極力排斥せねばならぬと信ずる。

又外に在つては、ウキルソンの様に、あらゆる機會に於いて、日本の利益を無視する事を敢てし乍ら、字引中にありとあらゆる人道、正義の關係語彙を駢列して、世界の人心を迷はしめつゝあるが如きをも、排斥するに力を盡さなければならぬと信ずる。小國の尊重、國民自主權の尊重を高唱し、敵側に對しては、其の各國民が主權者を取捨することを助く可しと主張する彼ウキルソンは布哇を合併し、菲島を合併するときに果して其國民の意思を米國が少しでも參酌したかを自問自答せねばならぬ。小國を尊重す可しとする彼は、今や米國を鎖國せんとしつゝあるのではないか。此れによつて最も迷惑するものは實に我日本ではないか。されば姉崎博士は其空想を以て我日本人を教ゆる暇を轉

じて、先づ海を渡つて米國に赴き、ウキルソンに面會して、彼の面前で、眞に徹底した正義人道論を披瀝して極力其矛盾、其撞着、其空言を指摘し、彼をして翻然として悔改めしめるに盡力せられた方が、國の爲めになる。又た世界の爲めになる。我々日本人は姉崎博士の教訓を要しないのみならず、寧ろ甚だ迷惑を感じるものである。思ふに學者にも内國向と輸出向とあるようである。姉崎博士の如きは最も優秀なる輸出向殊に米國向の思想を懐かる、學者であるから、同胞の教訓は、之を他の人々に譲つて、博士は主として米國人殊にウキルソン氏の教化に力を盡されんとを希望する。若し然らずして、依然として其の空想的 세계觀を以て、我々日本人を教化せられんとするならば、我輩の以上の駁論に對して十分なる答辯を惠まれんことを切望する。元來我輩は執拗な論争は甚だ好まざるものであり、殊に博士の學問に對しては甚大な敬意を有して居るものであるが、此の問題に就ては、例を破つて何處迄も執念深く博士の議論を攻めて攻め盡さねば已む能はざるものである。妄言罪死に方る。

念の爲め本文に引用したグロシナス及ホッパス著書中今我輩の座右にあるもの、原題を附記して、責明をせしむ。

(A) グロシナスの著書

- (1) Hugonis Grotii, De Jure Belli et Pacis. Libri Tres. accompanied by an abridged translation by J. Whewell. Cambridge 1853. 3. Vols.
 - (2) The Rights of War and Peace in three books. Translated into English to which are added all the large notes of Mr. J. Barbeyrac. London. 1738. 1 vol.
 - (3) Le droit de la guerre et de la paix par H. Grotius. Nouvelle traduction par J. Barbeyrac. A Laite. 1759. 2 Vols.
 - (4) The freedom of the Seas by H. Grotius. translated by R. v. D. Magottin and edited by J. B. Scott. New York. 1916. 1 vol.
- (B) ホッパスの著書
- (1) Leviathan, or the Matter, Form, and Power of a Commonwealth Ecclesiastical and Civil. By Thomas Hobbes of Malmesbury. London. 1651. 1 vol.
 - (2) The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury, now first collected and edited by Sir W. Molesworth. London. 1845. 11 vols.

九 大戦が暴露せる獨逸の弱點

— 大正六年十二月談話同七年一月「中外」掲載 —

一 國家としての弱點

【間接税に基く獨逸の財政】獨逸の國家としての弱點を明かにする爲めには、どうしても獨逸帝國の組織を論じなければならぬ。獨逸帝國の最大弱點は、其帝國の組織上、財政の基礎甚だ薄弱であると云ふ一事である。各聯邦は成立既に久しいが、獨逸帝國其のものは、建國日尙淺く、財源の確なものを有して居ない。其の確なもの、殊に直接税は、各聯邦が徴收し得るだけとつて居る。同一の租税を二重に課することは、國家財政の性質上出来ない事である。そこで帝國の財政は、専ら間接税によるより外に仕方がない。是れが、小國が國務の少ない國家ならば、甚だしい弊害はない。併し、今日の如き大なる獨逸帝國では、事甚だ困難である。

國家の財政上間接税と直接税との利害得失は、英吉利、佛蘭西が、十七世紀から十八世紀に亘つて様々に經驗した所である。佛蘭西の經濟財政論が學問として起つて來たのは、煩雜なる間接税があつた爲めである。佛蘭西の國運が伸展して歐洲第一の強國となるに及んで、間接税の弊害が百出した。之れを根本的に矯正せんとする事が動機となつて、起つて來たのがフランソア・ケネー等のフキジオクラット(重農主義者)の學說である。此の學派の根本的主張たる單一税論は、税を單一にし、直接税中の地税を以て國家の財政の基礎とする事であつた。此の議論は遂に行はれなかつたが、是れが動機となつて、國家財政の基礎が間接税から直接税に進むに至つた。併しながら今日と雖も、佛蘭西の直接税主義は徹底して居ない。

英吉利も佛蘭西と同様、間接税よりも直接税に重きを置いて居る。英吉利には、十八世紀の末から十九世紀に亘つて、不思議と云ふべき程、政治家中にピット、ビール、ハスキソン、グラッドストーン等の卓れたる財政家が輩出し、而して數十年の財政整理の大

事業は、グラッドストーンに至つて大成した。そして、國家の基礎は、直接税に移つた。

英吉利の所得税制度は、理想的とは言へないが、餘程理想に近いものである。英吉利國民は、之れを制定した大政治家の手腕に對して未永く感謝しなければならぬ。併し、是れは、最初から斯うなる様に豫想されて居つたものではない。所得税は、當初戦時非常特別税として新設せられたものであつた。是れが平時であつたならば、民權の發達した英吉利にあつては、國民の異議を買つて、到底賦課し難かつたであらうが、戦時であるから斷行が出来たのである。是れが、今日では、英國財政の大黒柱となつて居るのである。

英國は、他の點には幾多の缺陷があるが、其の財政の根本的基礎が所得税の上に立つて居ると云ふ一事は、實に非常の強味である。英國では、金持が跋扈して居るが、併し跋扈するだけ國家の財政の大部分を負擔して居ると云つてもいい。而して、例の自由貿易で、間接税の種目が甚だ少いので、下層民の財政上の分擔は他國に比すれば遙かに少ないのである。此の點にして變らざる限り、此度の戦争に於けるが如き財政上の大負擔があつても、英國の財政の前途は甚しく悲觀するを要しない。

〔戦争前に於ける財政の弱點〕此の英國の強味は即ち獨逸の弱點である。獨逸帝國の財政は、此の理想的な直接税による事が全然不可能である。地稅、所得稅、營業稅等の直接税は、皆各聯邦の課する税である。尤もプロイセンでは地租を全廢して地方税として居るが、兎に角帝國の税にはなつて居ない。近代に及んで、ライヒスエルプシアフツ・ストイエル(帝國相續税)、資本利益稅等の直接税を賦課する議があつて既に一部行はれて居るが、何れにしても、重なる財源にはなつて居ないものである。故に獨逸帝國の大なる財政は、基礎甚だ薄弱なる間接税による外はない。間接税は、多く下層民の負擔に歸する。小國は姑く措き、大國の財政が之れに依つて立つのは、基礎が薄弱である。

ピスマークは、獨逸の大帝國を建設した時、此の弱點に打克つ財政々策を立てた、一つは煙草專賣であり、二つは鐵道國有策である。是れが實行されれば、大なる財源が出

來る譯で、實に名案であつた。然るに前者は民間の反對が猛烈であつて、遂に成立しなかつた。後者は、私設鐵道の買収が出来た。併し、其の買収者は、獨逸帝國に非ずして各聯邦であつた。今日の國有鐵道の第一は、プロイセン王國の國有鐵道である。他の大きな聯邦も、各々鐵道を國有して居る。バイエルン、ウルテンベルヒ、バーデン等には夫れ、國有鐵道がある。獨逸帝國から言へば、此の企ては、自ら肥えんとして、却つて他を肥やした結果に終つて居る。つまり聯邦の爲め、好箇の財源を與へたのである。其所でビスマークは已むを得ず、海關稅を主とする財政策を立てた。此政策は、ビスマークが其れ迄執つて來た自由貿易主義と兩立しないものである。一千八百七十七年まで、漸次進行しつゝあつた自由貿易主義を、俄然一擲し、一千八百七十九年鐵輸入稅を課したのを始めとして、保護主義を執るに至つた。此は戰爭前まで繼續して來た。

此の保護主義は、實は主として帝國政府が好箇の財源を得る手段であつて、本來の動機は内國の産業を發達せしむる爲めでなかつた。根本に此の動機があるのを忘れては、

獨逸の保護主義は解することが出来ない。輸入稅の賦課が、内國産業の保護を目的とすれば輸入の減少を期しなければならぬ。輸入が減少すれば海關稅收入が減少して帝國の財源を得る事が出来なくなる。帝國の財源を充實せしめんとすれば、輸入が多くなければならぬ。輸入稅を課して、輸入の多きを望むのは、保護政策ではない。獨逸の保護政策には、此の根本的矛盾がある。薄弱なる帝國の財政は、これを維持する爲めに、斯の大矛盾に陥つて居る。而して、建國以來、帝國の仕事は著しく増大したが就中最も大仕掛けなものは、海軍擴張であつた。此の財源は海關稅其の他の間接稅である。然るに海關稅も、其の金額が全部帝國の收入となるのではない。帝國はある部分だけ收めて、他は各聯邦の人口數に應じて、夫れ、割り返さなければならぬ。是れをコンチンゲンチールング(Kontingentierung)と名づける。而して、獨逸の國民は、帝國の財政、聯邦の財政の二重の財政を負担して居る。英、佛、日本とは全く事態が異つて居る。英、佛、日本では如何に重稅であると云つても、國家稅、地方稅のみであるが、獨逸國民は、聯

税、^①邦 邦 地方税の上に帝國税をも負擔しなければならぬ。而して、其の租税は、租稅力ある財産階級が主として負擔して居るのではない。納稅力の乏しい中流以下が負擔して居る。夫れであるから、獨逸の海軍が擴張せられ、ばせらるゝに従つて、國家の地位が高まれば高まるに従つて、下層民の負擔は愈々増加する。

【戦後に來るべき社會的不安】是が戦争前に於ける、財政上から見た獨逸の弱點であり、英國の強味である。佛國は其の中間にあると言つてもいい。

所が戦争が勃發した。英、獨、佛共に非常に借金した。各國政府は、戦後に至つて、元利を支拂はなければならぬ。併し、三國共内國債であつて、外國債は甚だ少ない。獨逸の如きは全く外債が無い。今後とも獨逸は外國から借り得る見込はない。最近まで明かになつて居る所、獨逸は七回公債を募集して居る。第七回の結果は未詳であるが、全部内債である。尤も、英、佛、二國の借金も、主として内債であるが、同じ内債であつても之れを償却する場合に生ずる事態に至つては、全く別である。

公債を償却する爲めには、増税しなければならぬ、租税は、國民一般が負擔するのであるが、英國に至つては、財産階級が其の重なる部分を負擔するに反して、獨逸に在つては、大部分を負擔するものは、中流以下の下層民である。公債償却の爲めに、獨逸の下層民は、大なる負擔を忍ばなければならぬ。然るに、公債の元利支拂高の大部分は財産階級の懐に入つて、下層民の手には歸つて來ない。何故となれば、公債に應じた人数は、下層民も多いが、金高は財産階級の方が多からである。戦後に公債の始末をした所で、獨逸帝國の國富が減るわけではない。問題は其の富の在り所が變る點、即ち國民一般に増税して一部少数者の手に運ぶ點にある。此の點に於いて、英國と餘程違ふ、嘗さへ國民に取つて不都合な經濟状態は、戦後愈々不都合になる。(尤も英國と雖も今後戦争が永引き、公債高が増大すれば獨逸の状態に近づいて來る可きは勿論である) 英、佛も勿論増税しなければならぬ。併し、今日の所では英國の租税の大なる負擔者は、財産階級であるから、財産階級から收めた租税を以つて、財産階級が所有して居る

公債を償却する姿であつて、云はゞ出ず入らずである。唯だ名目が變るだけである。極端に言へば、租税と借金と帳消することも出来なくはないのである。右手からとつて左手に返へすのである。然るに、獨逸に在つては、租税をとられるものは財産のない多數の下層民、其れを以つて公債の償却を受けるものは、少數の財産階級である。

獨逸戰時公債の結果に就て第五回までの結果を見ると、獨逸の公債應募者の五分の三は、千マルク以下の應募者であるが、其の金額に至つては、公債總額中僅か百分の六にしか當つて居らない。即ち、公債元利總額中、下層民に返るものは、僅か百分の六であつて、餘の九十四は、公債應募者中五分の二に過ぎない少數財産家の手に歸するのである。八 償債却の割合はまだわからないが、國富の大部分が、少數者のものとなる事は明らかである。戰後に於ける下層民、労働者の負擔は、英佛に於いても最大問題であるが、獨逸に於いては、より大なる問題である。巧みに調理すればいざ知らず、戰前同様の財政方針を踏襲して行くものとするれば、獨逸の下層民は、手も足も出ない事になる。戰

争中の苦痛も甚だしかつたであらうが、戰後の此の苦痛は更に一層大きいであらう。

従つて、此の點のみから見ても、獨逸の社會的不安は、著しく増大して來るものと考へる。論じて茲まで來ると獨逸の社會としての弱點が明瞭となる。

二 社會としての弱點

【國中の國、社會中の社會】獨逸の社會は、斯くの如き國家の下に立つて居る。其の根本的特色は、大なる社會的不安と云ふ事である。

此の度の戰爭中、社會民主黨の多數派は、政府と肝膽相照し、忠實なる從僕の態をなして居るが、是れは此の戰爭を以てカイゼルの野心より出たものと考へず、獨逸國民の戰爭であると信ずるが爲めである。のみならず、社會民主黨は、今日立派な一個の政黨である。政黨たる以上、社會上、政治上着々其の主張を實行しなければ、存在の理由がない。始めから戰爭に反對し、輿論に背き去れば、戰後の經營に參與する事が出来ない。一切の經綸から除外される。是れは、政黨としての自殺的行爲である。今、仲間入りを

して、いざ戦後の經營と云ふ場合に、其の主張を貫かんとするのは、政黨としての立場に立つ以上は、當然の行爲である。稍々不倫の譬ではあるが、社會民主黨の態度は、犬養國民黨總理の外交調査會に入つたのと同様である、何時も逆境黨たる境遇を脱して、黨の主義主張を實現する機會を得んとしたのと相似で居る。社會民主黨は、本來の主張を捨てたのでない。豹變したのででもない。其の行動は、戦時に處する一種の方便政略である。故に、戦後に於いても、現在の態度を持続するものとは見るべきでない。

社會民主黨が、戦争中輿論に迎合した事は、一大勢力を得る一原因となつた。戦後の經營から同黨を除外する事など思ひもよらぬ所である。經營に關する儼たる一大勢力であるのみならず戦後の國家施設は、悉く民主的色彩を帯びて來るであらう。所謂自給自足は、獨逸の經濟の社會主義化である。非資本主義化であるから、政黨としての社會民主黨は頗る有力なものとなるであらう。而して社會の設備に於いても、著しく社會主義的になつて來るであらうから、何れの方面より見るも、社會民主黨の主張を容れな

ければ収まりが付かない。之れを度外に置くことは逆も不可能となる。

併し乍ら、獨逸の社會に、之れを容れる準備があるかと云ふに、夫れはまだ出來て居ない。即ち、獨逸の社會の弱點は、社會が包含する事が出來ない大勢力が、社會内に益々發達して行くと云ふ事である。國の中に於ける國、社會の中に於ける社會が暇々として發達して、母體の生長之れに伴はず、社會は營養不良に陥ると云ふことである。

三 人としての弱點

【小國根性と小都會根性】是れが自ら獨逸人の人としての弱點に及ぶのである。獨逸人の性格は一概には言へない。北と南と、農民と工場労働者とは、非常に相違がある。併し、通じて言へば、大體我が國でよく言ふ所謂大國民の襟度なるものがないことに歸着すると思ふ。然らば、コスモポリタンとしての性格が發達して居るかと思ふ。社會主義者は、インターナショナルリズムを主張して居るが、其實、獨逸の社會民主主義者、労働者程、非萬國主義的性格を有するものはない。他の國語にはなく、獨

逸語にのみあつて、獨逸人が自ら評し得て適切な言葉がある。クライインシュターライ (Kleinstadterei) と云ふ語が是である。クライインは小、シュターテは國、ライは英語の接尾語 ship に當る。適譯ではないが言はゞ小國根性である。獨逸人は小國根性の持主である。所が、可笑しい事には、獨逸の下層民は其語をもじつて、クライインシュテツテライ (Kleinstäderei) と云ふ言葉で自ら評して居る。シュテツテは都會であつて小都會根性の意味である。彼等は、小都會あるを知つて國家あるを知らず、況んや世界をや、天下をや、己れの住んで居る都會を一番いゝ土地と心得、己れの國を以て天下と思つて居る。其の陋恰も支那人が、自國を中華と信ずるのと同じである。彼等は、見識狭く、調子が低く、少しも鷹揚な所がない。

獨逸人は、英國人を罵つて、番頭、素町人、シヨツプキーパーと云ふ。英國人は如何にもそれに相違ない。併し、獨逸人は、もつと下等である。番頭は番頭でも、英國人は天下を御客とする大店の番頭である。獨逸人の御客様は、小都會の町人ばかりである。

英語のシヨツプキーパーに當る獨逸語はクレイマーであるが、獨逸には此の語を含む語で、是亦他國語にない。自己批評の語がある。それは、クライニヒカイツクレイメライ (Kleinigkeitskrämerei) である。此の語は、二束三文のガラクタを店先きに並べて賣つて居る奴、そいつの根性と云ふ意味である。強いて日本語に當てれば、番太郎根性である。店中のものをすつかり引つからけて幾らにもならない品を後生大事に守つて、女子供を御得意にして暮らす人間の根性である。

此の根性は、ひとり労働者のみならず、學者、官吏、詩人、藝術家にも付き纏ふて居る。獨逸人は、動もすれば、彼奴はクライニヒカイツクレイマーであると云ふ、其の罵る人間も亦さうだから、そこで、他國語に翻譯する事の出来ない言葉が出来たのである。獨逸の學問は、世界第一でもあらうが、其の學者にも此のクライニヒカイツクレイメライが染み込んで居る。第一流の學者はさうでもないが、二流以下の學者となると、下らない問題を捉へて、愚にもつかぬ事をコテコテと書き立て、無暗に註を入れ、當人が

讀みもしない書物の名を、麗々しく並べて居る。此の風は、日本でも近來大分流行つて來て居るが、誠に閉口千萬な事である。

日本から獨逸に行く醫者などにも、大分此の類がある。ドクトルの名稱が欲しいばかりに、何處かの大學に入學して蚤の翠丸の研究をする。こんな事は直ぐ出来る。所が、それが本になつたのを見ると、コテ／＼と本の名を並べて如何にも大掛りである。到底當人が讀め相もない本などが出て居る。所が、それが出来るわけがある。リテラトゥア販賣業、參考書目販賣業と云ふものがあつて、手紙一本出せば、或る問題に關する書名、發行年月日、其の本文の出て居る頁數まで詳細記述して、タイプライタアで送つて呉れる。之れを論文の所々、然るべき場所へ嵌め込めば、立所に、立派な堂々たる大論文が出来来る。他國にもこんな商賣があるかも知れないが、聞いた事はない。第一流の學者は知らず、二流以下になると、此のリテラトゥア先生の御厄介になるのが随分ある。彼等はどつちでもいい事を争論し、下らない古い本の中から、愚にもつかない事を拾ひ出し、

是れを敷衍して、前人未發の新説と號したり何かする。是れなどは、クライニヒカイツクレイメライの好い御手本である、

是れは、學者のみではない。獨逸國民全體に亘る通弊である。尤も、是れも或は學問を進歩せしむるに効があるだらう。物事を綿密にやる、瑣事と雖も疎略にしないと云ふ所謂ジャーマンソローネス(German thoroughness)は此所に胚胎するに相違ない。併しそれと共に、人間として、見識の高い、襟懷の寛い事を妨げる事も亦事實である。獨逸人は善い意味の常識を缺くと云ふ英人の批評は、此の點に於いて確かに當つて居る。

「シャードン・フロイデとアイゲン・ジン」獨逸人は斯くの如くコセ／＼して居るから従つて猜疑、嫉妬の念の深い事を免れない。洒々落落たる所が缺けて居る。彼等は、何事でも、何處までも追究する。其の目的が、立派な事大きい事であれば、追究は甚だ結構であるが、單に追究の爲めに追究し、綿密の爲めに綿密にするのであつて其の本來の目的の何であるかを考へない者がある。そして、自分の成績を誇り、同じ方面で、同じ成